始

501-8

宇野浩二著

小説

美女

東京 アルス

帝國圖書館藏
大正 10 8.16 内交

はしがき

自分の小說集に自分が序文を書くことは、どの著者でも潔しとしないことらしく、又ひどく困ることらしい。私も無論その一人である。そしてこれ迄のところは大抵逃れて來た。ところが、今度アルス書店の主人は是非書いてくれ、と言つて聞かない。ぢや、何とか書きませうと私は降參して、さて書かうとなるとやつぱり大變困つてしまつた。

ところが、近頃或佛蘭西の小說家の小說の序文を見ると、やつぱり同じやうなことが書いてあるのを發見した。長い間序文の無用といふことが論ぜられてゐる。それにも拘らずやつぱり本には序文がついてゐる。といふやうな書き出しで、ところで、君がもし町を步いてゐる時に、突然誰かゞ何の言葉もかけないで、君の上着の襟を摑まへて、突然樣々な打明け話――たとへば細君のヒステリイのことゝか、子供の育ちがどうだとか、飼犬が死

んだこととか、女中が逃げ出した話とか、訴訟が失敗になつたこととかを、話し出したら君は何といふか？　そこで教養あるものは、先づ公衆に挨拶をして、自分のつまらない話をするのに、それに依つて、公衆の時間を少しでも割いてもらふことを、あらかじめ斷つてから、そして始める、つまり序文といふものはさういふ意味のものであると、書いてある、成程、さういふ意味で必要かも知れない。

さて、その本の序文は、さういふ文句から始まつて、挨拶どころか、大いに自家の作物を辨じ且推薦し、廣告してゐるのである。で、私もそれに多少習つて言ふと、この集に這入つてゐる諸々の小説は、私のものとしては隨分色々な變つたものが這入つてゐるつもりである、例へば「搖籃の唄」とか、「片思」とかいふ、子供の爲とか、婦女子の爲とかに書いた小説の如きである、が、これ等も私は子供や婦女子でない人々にも讀んでもらひたいつもりで、この中に入れたのである。

そしてこの集の中にある作物は、或物は書いてしまつてから、ひどく自分でその出來榮えに恐縮したものもあり、又出來上つた時多少氣持よく微笑したものもあり、今でも多少自慢のものもあり、色々であるが、すべてそれを書く時に於いて、眞面目に書いたことは、どの小説家の場合とも皆同じである、と私は言ふことが出來る、不眞面目に書く作者なんて、どこの國にあることであらう？　ところで、唯私が或る種の作者と違ふことは、自分の現在やつてゐる、心得てゐることが、世界中で一番眞面目なことであると思ひ込むことが出來ない、といふ一事である。今のところ、これが私自身の一番の眞面目であるといふことだけで、もつとゑらい神樣が見たら、或ひは叱られるかも知れない、と内心恐縮してゐることは事實である、が、それと共に、私はいつでも眞面目でありたい事を心掛けて、自分の力が出來るだけのところで、一番いゝ事をしたいと思つてゐることも、神樣に誓つて、僞ないところである。

そこで、讀者諸君、——と呼びかけて、私はそんなに躊躇なく、どうかこの本を讀んでいたゞきたいと言へるかと思ふのである。

大正九年十二月

著者

美女目次

美女……一
若者……三三
片思……一一一
歸去來……一四五
桃色の封筒……二一一
搖籃の唄……二五七
甘き世の話……二七七

美（び）女（ちよ）

『大丸』にゐました時分のことだす。……

大阪の『大丸』の黒豆奉公ちうて、御存知やおまへんか、まあ、朝は大阪の商人家は何處でもおんなしことで、お粥に澤庵と相場が定つてまつけど、晝は他所ならたとへ目差鰯の三疋でも、大根菜に油上げ位でも、お萬菜に附くもんだすが、それが、大丸のんは三百六十五日、降つても照つても、鹽で煮いた黒豆だんねさかいな、やり切れまへん、と言うて丁稚に入る時にその約束で行きまんねさかい、苦情の言ひやうがおまへん、それで辛抱出來んやうなもんは、一人前の商人になれんちふねだすさかいな、覺悟はしてますもんの、それでも、車を引いてお得意廻りする時やかてその通りだすやろ、柳合李の辨當の中がやつぱりそのお菜だすね、大概情なうなつて、何遍もうこんな家出てしまふたろ思うたか知れしまへん、他所はんで、新しいお得意先やみなで、店の規則を知りはれへんとこでは、時々お菜を出してくれはるとこがおますけど、それ貰うたんが知れましたら、一遍に出されてしまひまんねさかいなあ……。

ほい、これは別の話だした、が、兎に角、私はその黒豆奉公も無事に濟ましまして、それか

ら又番頭を十三年も勤めましたんだすが、その暇を貰ふ二年前の、丁度一重羽織に一重もんの時分だしたよつてに、さうさう、何でもその年は空梅雨で、梅雨の癖に雨の少ない年だした。六月の晦日の前の日だした、若旦那はんに言ひ付かりましてな、へえ、若旦那はんはその時まだ二十二三だした、私は丁度三十だした。けど、どういふもんか、うまが合ひましてな、何ぞ言ふと伊豫吉伊豫吉いうて、私には何でも打明けてくれはりました、私は、自分で言ふのも何だつけど、店中で一番の堅人いはれました位で、大旦那はんの大のお氣に入りでもおましてん、ところが若旦那はんは十八九の時分から一寸々々遊び始めはりましたもんだすよつてに、大旦那はんには始終厭な顔をしられてはりました、その堅人の番頭の私と極道もんの若旦那はんとが、妙なもんで、大仲よしだしたんだす、と言うて、斷つておきまつけど、遊びの方のお附合ひは、私は一遍もした事はおまへんねで、その時でもお茶屋やみなの拂ひにだすやろ、若旦那はんが御良人さんにそつと出して貰ひはつたんだすやろ、千圓ほどのお金だす、それを銀行へ出しに私が言ひつかつて行きました時のことだんね、さあ、これからが本眞の話の始まりだす

……………。

ほら、美女は、何とか言ひまんな、美女は、何やらだんな、さうさう、美女は命を斷つ斧、昔の人はうまい事いひまんな、いや、もうさうに違ひおまへん、成程、この位の女子やつたら命を斷つ斧だすやろ、もつともや、そら、本眞に何とも言へん良え女子だしたで、私は今はもうそろ〳〵五十の阪に手の届く年をしてまつけど、生れてから、まだあんなえゝ女子に二度とお目に掛つたことがおまへん。

銀行で丁度千圓の金を受取つて、あれは銀行の門の締まつた時分だしたさかい、勤め人や働き人が歸る時分だしたさかいやろ、浪花橋の下から、まだ巡航船がおました時だす、あれに乗りましたところが、人でぎつしり一ぱいやおまへんか、私は懐の錢を氣にしいしい、と言うて船の外側に立つてんのも阿房らしおますさかいな、無理に人を押し分けて、中へもぐり入りましたもんだすが、それでもやつと低い天井から下つてゐる吊革を一つ摑みまして、やつと落着いて、それでもやつぱり懐だけは始終氣にしながら、人の頭と頭の間越しに、小さい窓の

外を船と逆さまに動いて行く、あの邊の川は堀割と違うて廣いさかい良ゑ氣持だんな、空ゝ曇つた日だしたんで、薄墨色の天の下に染めたやうに緑色の濃う見える川縁の堤や植木や、青い川の景色を見てゐますと、ふッと、人臭い、汗臭い人いきれの中に、ふツふツと螢のお尻の火見たいに、何とも言へん、白粉のとも、香水のとも、麝香のとも、髪油のとも、何とも、彼とも言へんえゝ匂がしまんね。私は暫くの間右を見い、左を見いして、漸うのことで、その元が私の前のその前の、私の前には何處ぞの會社員らしい、四十がらみの身體の大きい人がゐまして、その向うは大工さんか左官か、これも亦人並外れた大きい人だしたが、匂はその人の向うから來まんね。見ると、その大工さんの法被姿の向う左に、その大工さんの肩の邊に、髪はかまはん振に見える束髪だんねやがなあ、さあ、それが唯のかまはん振ちふのやおまへんね、何ちふたら宜しおますやろかな、一遍すつかり、地が痛む程洗うて、乾いたところで、半日位油の中に浸けといて、それを又半日位掛つて乾かして、そしてさつともう一遍洗うたとでも言ふやうな毛で、ふうわりこ油氣なしに結ひ上げたやうなもんだつかな、その眞黒な、漆塗にほ

一ツと息をかけたやうな色の、朝結うた午後のらしい束髪の中に、ガラス玉見たいに見える曇り氣や縞のない、眞青な、その又彫いふたら、秋の七草を丹念に花束に細かうに細かうに刻み上げた、翡翠の束髪挿をさした女子がゐるやおまへんか、後姿のえゝ女子も隨分おまつけど、私は生れてから、あんな髪の恰好から、その髪の下に、首筋と、透通つた乳硝子見たいな耳から、頰つぺたが少うし見えまんねが、それに大川の土手の芝草か、水の色か知りまへんけど、青いのんが、すうつと刷毛をかけたやうに映つてまんね、私はぼつとしてしまひましたな、もうそれからかれこれ二十年近う經ちまつけど、今思ひ出して見ても、ぞつとする位はつきり思ひ出せますもんなあ。

あんたも知つての通り、私は今でもさうだすけど、いえ、本眞だつせ、その時かて、先にも言ひましたやうに、あの大勢ゐる『大丸』の店の中で、堅人の中の堅人や言はれたもんだす、本眞だつせ、それや私かて男だすよつてに、女子は嫌ひやおまへん、けど、人と比べると、まあ〱さう好きな方ちふより、嫌な方かも知れまへん、いえ、本眞だす、その私が震へ上りま

したな、實のとこ、堅人で通つてる私かて、もうこんな爺になつて話しますねさかい、差支へおまへんやろ、ちふのは、若い時分は心の中で、色狂ひしてよる朋輩を見ては、なんの、私が彼奴等見たいな氣になつて、片肌脱ぐつもりで掛つたら、彼奴等と違うて、人も言ふ通り、まあ申分ない男前に生れついてんのや、へゝ、これで仲々えゝ男だしたで、女子の一人や二人はいつでもこしらへよう思ふたらこしらへてこますわ、思うてましたもんだす、現に女子から水を向けられた事かて一遍や二遍やおまへんが、いつも相手が氣に入らんとこへ、人並よりずつと臆病もんだしたさかいな。………

これは又餘計な話になりましたが、巡航船の中でも、氣が付くと、その女子に目のついた人は、男も女子も、若いもんも年寄も、みんな色々の流儀で、呆氣に取られたやうな、感心したやうな顔して見てよりますやおまへんか、それにしても、不思議なことは、まあ、服裝から何から考へても、どうして車に乘らんと、そんな込合ふ巡航船見たいなもんに乘つてましたんやろな、まあ、しかしその時はそんな事を考へるどこか、私はどうぞして、前の方からその女子

の顔を見たい思うて、その女子の傍へ行かう思うて心が焦りまんねやが、何せよぎつしり積まつた人込の中で、おまけに私との間に大男が二人もゐまんねもん、どうにも斯うにも仕樣がおまへんね。

そのうちに發動機が急に力が拔けたやうな音に變つたか思ふと、巡航船は肥後橋に着きましてん、私は『大丸』へ歸りまんねさかい、四つ橋へ行きまんねやが、停船場の掛の呼聲が、氣が付きますと、その巡航船は千代崎橋の方へ廻る奴だんね、つまり私はそこで乘換へせんなりまへんね、ところが私は乘換どこやおまへん。

執固いやうだつけど、本眞に私はそれ迄でもそれからでも堅人だした、それ迄でもそれからでも、二遍とそんな事したことあらしまへん、よう人の話に、えゝ女子の後をつけて行くいふやうな事を聞きまつけど、實際は私かて、いつぞ一遍ぐらゐやつて見たろ、思ふた事はおまつし、それに今も言ひましたやうに仲々男自慢だしたさかいな、思ひ切つてやつてさへ見たら、何とかうまい事行くやろ位のことは思うてました、けど、本眞のとこ生れてからまだ一遍もそ

んなことをした事はおまへんね。それ迄にも、それからにもな。ちふのは、臆病いふより、一寸位感心した女子に會ふたかて、その後をわざ〳〵つけて行く言ふやうなこと、大儀で、とてもそんな氣になれまへんね。これはまあ誰でもおんなしだすやろな。ところが、その時だけは別だしたんや、後にも先にも本眞にその時だけは別だしたんや、その時は臆病も、大儀も、乘換へも、へちまも、そんなもんやおまへなんだな、私は唯もう夢中で、何より、その女子が乘換するかどうや、それぱつかり氣を配つてました、あの時分の巡航船の肥後橋言ふと、東京の電車の須田町だつかな、あすこ見たいなもんだすよつてんな。船の中の人は半分までどや〳〵下りて行きまんね、私の前の、例の邪魔もんの、大男の會社員も大工さんも下りる樣子だんね、私は取敢ず私の直左手の人が下りて行きました後のところへ行きまして、その二人の男を通してやろ思ひましたんや、その時だす、問題の女子の顔がぱツと花が咲いたやうに私の目に入りました。

眞白だしたな、紅味が一寸もおまへんね、どつちか言ふと青白い色だすな、と言うて、病人

見たいた青さやおまへんで、迚も言へまへんな、河原の石を一つ一つ百日も掛つて探したら、あんな肌の石がおますわ、屹度、何のことはないその石に血を通はしたやうなもんだすな。それや別嬪や、別嬪やないの、唯別嬪言ふだけでは迚も迚も言ひ切れまへん、ところで、その女子の着てる着物がこれ又どゑらいもんだすね、呉服屋の私が吃驚しましたんだすさかいな、羽織いふたら、袂と袖とに水色を染分めにして、全體が紺地で、物は一重の紗お召だんねが、その水色の地のところを主にして、季もんの菖蒲の飛模樣を置いたありまんね、それで下の着物が西陣お召だんねが、その金茶と青磁の縞模樣の織出しになつてまんのが、上の羽織に透かして雨風を利かしておまんね、まるで芝居の意匠だんな、それでゐて、分りまつしやろ、さうけば〳〵しい言ふやうな派手やおまへんねで、半襟は薄紫に、あれは屹度、特別に誰ぞ畫かきの先生に畫いて貰うて、あつらへたもんに違ひおまへん、西洋花を極く小さいのを散らしたのんを、本縫にしたもんだす、それがすつかり生れるなり着て來たやうに、身體にきつちり着いてまんねが、あゝは迚も普通の代物では行きまへんわ。………

その女子が、そこで下りるか、どうするか思うて見てましたんだすが、ちよつと一足二足、下りる人の後からついて來た樣子だんので、私もそんなら勿論下りるつもりで、横へ寄つたまゝ、それで何處やら女子の樣子が可笑しいので、もう少し辛抱して樣子を見て一番後から出てやれ、思うたもんだすさかい、丁度横へ寄つたとこの腰掛が空いたのを幸ひ、一先づそこへ腰をかけますと、女子は二足三足歩いて、又一寸立止まつて、窓から外を覗く風だしたが、その時、本眞だす、ちらつと私の顏を見ましたで、そして下りる所が違うたんやと見えて、その邊の空いたとこへ坐るつもりかで、二三度右左を見廻してから、私とは二筋おいて向うの腰掛に丁度私の方を向いて腰掛けよりましたもんだす。忘れましたが、眞白氣の、所々何の模樣だしたか、赤と黑との飛模樣を置いた、舶來もんの絹レースの、長い長い、膝の邊まで垂れるやうな肩掛をしてゐました、その端を、引きずらんように片手でつまみ上げてゐる指が又、眞白だんね、大抵の女子は、顏より手の色が別の人間見たいに黑いもんだすが、その女子のんは、おんなし、本眞におんなし色だした、指輪が、細い金具に、大きなダイヤの指輪が、一本だけ嵌

めたんが、きら〳〵光りまんね。するとな、その肥後橋では、下りた人ほど人が乘つて來まへなんだもんだすさかい、すつかり人の氣配も落ち着いて、さて、チン〳〵と發船の合圖のベルが鳴つて、動き始めの發動機の音が、ゴー、ゴト〳〵〳〵とし出した時分に、その女子が又ひよつこり立上つて、どうすんねやろと思うて見てますと、何だすな、屹度、後の方の機關場に近い方の搖れるのんが厭で、前の方の席に代るつもりだしたんだすな、私の坐つてたところが丁度出入口の近くの眞中邊だした、女子は私の前を通つて、前の方へ行く譯だすねが、どうも私の自惚のせゐかも知れまへんけど、私の方を時々ちら〳〵その標本見たいな、兩方の大きさのそろうた、少うし切が長過ぎて、黑目の大き過ぎんのが、何とも言へん一寸嶮がついてる譯だんねやが、しかし廣からず狹からずの二重瞼で、それで私の方をちら〳〵見まんねや、男いふもんは阿房なもんだんな、私はずつと船の中のそこら中の人の顏を一順見て廻つて、まあ自分よりえゝ男前の奴はゐえへんぞ、と思うて、これはやつぱり自分の方を見てんのに違ひない、思ひ込みましたもんだす。私は何ちふ氣なしに、女子が私の前を通り過ぎんうちに私の方で先

に腰掛から立上つたもんだす、ところが立上つてから困りました、が、咄嗟のうちに思ひついて、出入口の方へ行きました。さうや、あそこから一寸顔を出して上氣を冷す風にして、え丶空氣でも吸ふやうに見せたろ、思ひましたもんだす、が、さう思うて私がその方へ行くのと、女子がずん〳〵その出入口の前の途を通つて船の前部の方へ行くのんと、一寸すれ〳〵になる迄近寄つたことがおます。ぷん、と今度は、先のやうに人と人との間からやなしに、直接に例の匂を香ざかして見ますと、堪りまへなんだな、年甲斐もない事を言ひまつけど、何や斯う氣が遠うなるやうな氣がしました。その時、どうやらした拍子に、一尺ほどの近くで、私の顔と相手の顔とがちらりと向き合うたことがおました、すると、女子がそろツと笑うたやうな氣がしまんね、いや、本眞だす、その證據に、細こい細こい、そろうた眞白けの齒の奥に、丁度唇の端の邊のとこに、金齒がちろツと光つたんを覺えてますもん、いや、本眞だす、本眞だす。

そこで私は夢中で出入口のとこへ行きまして、顔だけ外にのぞかしましたら、すーつと靑いやうな氣のする川の風が顔に當つたもんだす、何とも言へんえ丶氣持がしたんを覺えてます、

もつとも多少どころか、大分上せてましたんだすが、川の方へ首を突き出しましたもんの、川の景色も何も目に見えやしまへん、その證據に、背中に目が付いたか思ふ程、私はその女子が前部の方のどの邊に坐つたか、そんなことを川の方を向いたまゝで判じたり、考へたりしてゐましたが、迚もそれでは安定わかる氣遣ひがおまへんさかい、今度は出入口を背中にして、そこに暫く凭れる風にして、くるりと船の中を見渡しました、が、始は後部の方を見まして、段々と中程へ目を移しまして、又後部に戻つて、又中程まで來て、そんな事を二三度ほど繰り返して、漸う思ひ切つて前部の方に目をやりますと、吃驚しました！ 女子は私の直右手の一つ置いた向うの腰掛に坐つてまんね、さう思ふと、一遍にぷーんと例のえゝ匂がして來まんね。私はそこで一寸考へましたなあ、といふのは、元の席へ戻ると、丁度その女子を後向きにして坐らんなりまへんね、そやさかい、疲れたやうな顔をして、何處ぞ近くにえゝ坐り場所がないか、思うて、そ知らん顔してちろ〳〵氣を附けて見廻して見ますと、その女子は、丁度、まん中の右と左の出入口に通じてゐる路から船首に向うて二列目に腰かけてましたもんだすが、私

の見付けましたんは、その眞中から船尾に向うて一列目に、つまり私の立つてました一方の出入口の目の下のところに、具合よう私一人だけ割込めるとこだんね。私はそこで早速そこへぐんにやりと如何にも疲れたやうな恰好をして坐つて、それから暫く下を向いてましたが、やつとしてから思ひ切つて、女子の方を顏を上げて見て見ますと、えゝ鹽梅に、そこと私との間に挾まつてゐた腰掛には、一人は背中の曲つたお婆さんで、もう一人はそれの連れてゐた十四五の娘の子だしたもんだすさかい、心持大柄なその女子の顏が、眞正面にそのお婆さんと娘の子との間に、頭越しによう見えまんね。先にも言ひましたやうな切長の目と、その目にあつらへた樣に、けど、もしそれが筆で描いたもんとしたら、少うし筆を長い間押付け過ぎたかと思へる程、黒うて、はつきりした三日月型だつけど、長過ぎやへんか思ふ眉毛が、これも亦一寸も片ちんばなしに、おんなし大きさで、おんなし長さで、おんなし良え加減のとこに附いてますもんやさかい、目と眉毛の間、眉毛と髮の生際の間が、何とも言へん調子よう取れてまんね、一寸横を向いた時に見ましたが鼻は氣が付かん位に、黒幕かなんぞの前に横向きに坐らしたら、やつと氣が付く位に小さい段がついて、眉毛の臺の高さから、目のある場所の高さから、鼻の高うなり始まりの具合から、こんな顏の子を生んだ親は、本眞にどんな顏をしてんねやろ、思うた位だす、もつとも、一寸位の賢い子は親に似て出來るもんやさうだつけど、うんと賢い人間はまるきり親にもお祖父さんにも似ずに、ひよつこり出來るもんやさうだすさかいな、屹度あんな飛び拔けた別嬪の子は親に似てへんに違ひおまへん。

こんな女子を一目見たら、そこら邊にうじや〳〵ゐる、藪睨みの、可愛らしい、煙草屋の看板娘も、年が若い言ふだけが値打の、何となしに愛くるしい、貰ひ立ての花嫁はんにせよ、さては口元が可愛らしいのんと、どこやらぽちや〳〵してゐる言ふだけが取得の癖に、自分だけは大の別嬪のつもりの、縹緻自慢のどこそこのお上さんにせよ、何奴も此奴も一言もおまへん、みんな下れ、下れだすなあ、何となしに可愛らしいとか、どこやら面白いとこがあるとか、それなら十人並やちふやうな、世間に降る程ある種類の女子は、みんなあきまへん、あきまへん、この位の女子を見ますと、はアー、別嬪やな……と思ふだけで頭が下りますわい。いえ噓やお

まへん、三十二相そらうた女子いふのんはあんなんだすやろな、もつとも人間の目であらを探しても見付かりまへん、けど、本眞のとこを言ふと、あれで二十八相ぐらゐそらうたとこだすやろな、どこやら一寸瞼があつて、どこやら一寸男の心をきゆつと摑むとこがな、あすこが一相二相缺けたとこかも知れまへん、もつとも三十二相そらうたら、觀音さん見たいな顏になりますやろさかいなア……。

私はぢつと頭が下るやうになるのを、時々氣を引立て引立て、ちら〳〵目を上げて見ますと、今度は又その女子が私の目と目が合ふと、すーつと下を向くとか、横に反らすとかするやおまへんか、閉ぢるやうに上瞼を下向けると、長からず短からずの瞼毛が、その石見たいな頰の上にはつきり見えまんね、近頃は瞼毛の長過ぎるのんが流行るやうだつけど、あれはほんの物好きな流行物だつせ、短か過ぎたり、少ないのんは、それやいきまへんか、長過ぎるいふのも、本眞の別嬪には禁物だんな。私は、そこで、倘の事、妙に自惚が起りましてな、これや、私を見て恥かしがりよるのやな、と思うたもんだす、本眞だす、私は又私の近所をぢろ〳〵と一順

見廻して見ましたが、公平なとこ、私が一番えゝ男やと判斷して、むづ〳〵する程嬉しなりました、いつその事、此時巡航船がどうぞして、ごーぶく〳〵と浮んでしまうたら、そしたら俺が一番先にあの女子にくらひ付いたろ、あの女子もさうしよるやろ、思ひました、そして、死んでもかまへへん、思ひました、笑ひなはんな。

そのうちに、何橋からや忘れましたが、又どや〳〵乘つて來ましてな、お蔭で、私とその女子との間の、さつき迄背中の曲つた婆さんと娘の子が腰掛けてた腰掛に、入れ替りに六十近い坊さんと、子供を背つたらうた四十餘りのぢゞ汚い、裏長屋のお上さんらしいのんとが腰掛けますし、まだその上に、その人たちと私との間に、洋服來た三人連の會社員らしい男が立ちやがりますし、すつかり女子の方が見えんやうになりましてん、それでも、どうぞして見たろ見たろ思うて、氣を附けて見てますと、それから千代崎橋へ着くまでに、二度程、會社員の洋服の袖と、坊さんの頭との瞬間に、ちらッと怪體な恰好にちぎり取つたやうに、女子の顏の一部が、鼻と口とゝか、髮と目と鼻の上とかだけが見えまんね、そやけど、その位の別嬪になると

ゐらいもんだんな、どこを一所取つて見ても、それだけでもう立派なもんだんな、私はあない感心したことはおまへん、目一つ切り離したかて、鼻だけ千切つて來たかて、それだけで、あれなら屹度これはどないな別嬪の顏の一部や言ふことが想像つきまんな、いや、嘘やおまへん、その時氣がつきましたが、その黑目の大きい、切の長い目が、さうだすさかい、少うし黑過ぎて、それが又いつでも涙がたまつてるやうに濡れ過ぎてるとこが、三十二相から言ふと、缺けたとこかも知りまへんが、確に男を引きまんな。

　さうして、到頭千代崎橋に船が着きましたんだすが、着かん先から、今度はその女子が確に下りさうな氣がしてましたよつてん、私は內々そのつもりでゐましたんやが、案の上、そこに着くと、今度は先の肥後橋の時と違うて、下りる人の一番後からになるのも待たんと、傍から見てると押し潰されへんか思ふやうな、纖細な身體を、人と人との間に割込んで、どん〳〵出て行くやおまへんか、こゝで姿を見失うたらどんならん、思ひましたさかい、私も夢中で、人と人との間に割込んで、女子の尻をつけました、ぷーんと又あの何とも言へん良え匂が鼻に來

まんね。それから船着場に上つて、改札口の所から石段を上つて、橋詰の往來に出るまでに、二遍も私の方をその女子は振り向くやおまへんか、さうすると、その長い眉毛が心持ち八の字になります恰好が、これ又何といふたら宜しおますやろ、雨に惱む海棠といふとこだすかな、何とも言へん、物に惱んだやうな、それが震ひつきたいやうに見えまんね。

　女子はそれから、あんた、千代崎橋を渡りまんね、おかしいな、まさか、松島の遊廓に關係のあるもんとも見えまへんがな、それとも、あの中には、大弓場見たいなもんから、小料理屋のやうなもんはあるけど、まさかあんなとこに……それにお妾や『高等』が住んでる筈もないし、まさか、この上品な、こんな別嬪が……思うてるうちに千代崎橋の西詰を北に折れて、どん〳〵どん〳〵行きまんね、そしてやつぱり時々私の方をちよい〳〵振り向きまんねで、いえ、これは自惚やおまへん。歩く樣子が又何とも言へまへんね、それが色町の女子見たいに外輪の足をわざつと厭らしう內輪に歩るいてのやおまへん、どつちか言ふと、生れつき內輪の癖に、それを現代式になるべく派手にばつ〳〵と歩いてるといふ方だんな、さうだす、その何處

やら天然自然のまゝやないとこが、又何とも言へまへんねやが、天然自然やない言ふと、肩の恰好が、この女子はどうやら生れ付は怒り肩らしいのんを、機械かなんぞで無理にぐつと縮めたやうに、どことなしに、その撫で肩にぎこちないとこがおまして、歩くたんびにそれが上下でなしに、前後に揺れます、もうさうなると、そんな迄が、何とも言へまへんねや。

氣がつきますと、もう松島橋まで來てまんね、それを右に見て、西に向うて、梅本橋を渡りましたもんだす、さうなると、段々譯が分らんやうになりました、言ふのは、千代崎橋まで巡航船で來てながら、わざ〳〵松島橋まで後戻りして、梅本橋を渡つて本田の方へ行きまんねさかいな、それはまあ、しかし、うつかりして乘り過したにしても、さて、何處へ行くんだすやろ？　はゝあ、分つた、洋妾かな？　と本田一丁目から又北に、川口の方に行きました時、私は、はゝあ、ひよつとしたら、川口の異人町の百十番とか百四十番とか言ふとこにゐる洋妾かな？　と思ひまして、げつそりしました。なる程、さう思うたら、一寸洋妾らしいとこもおまんねもん、あの女子の背のすらりと高いとこも、房々した束髮の恰好も、どこやら異人向きや

わい、あれを錢で買うてよる異人奴があるのやな、あれを異人にあの女子は賣つてよんのやな、思ふと、私は何とも言へん、情なアい氣がしました。さつきから、それを見當にして歩いてる濃い水色の、つゞれ織らしい地に、銀絲で浪を織り出した、素晴らしい變つた、あの女子らしい帶も、みな異人の錢で買ひよつたんやな、くそ、くそ！　思ひながら、けど、やつぱり夢中で、どん〳〵ついて行く足は一寸もくたびれしまへんね、やつぱり女子が時々私の方を振り返りまんねもん、男いふもんは自惚と何とか氣のないもんはない言ふのんは本眞だすな……。

すると又、どうだす、女子は、洋妾とも違ふらしおまんね、その川口も通り越してしまひまして、今度は木津川橋を東へ渡つて、江の子島に入つたもんだす。さあ、愈よ分らんやうになりました、何の事はない、巡航船で來た道を逆さまに念を入れて、いろ〳〵寄り道して、その癖何處へも寄らんと、唯ぶら〳〵歩いて歸るやうなもんだすやおまへんか、これや、この女子、私を釣る氣やな、とも私は思ひました、その證據に、それからも、又二三遍も後を振り向きまんね、而も、私の姿が見付からんと、つゞけて、二遍でも三遍でも後向きまんねもんな、女子

は私を犬見たいに後に連れて、江の子島を北に、崎吉橋を渡つて土佐堀川の南べりをどん〱東へ歩いて行きまんね。そのうちには、さつき巡航船で通つた肥後橋から浪花橋の方へ行くやおまへんか、そして時々後向いて私の顔を見る目附が、こつちの氣の加減かも知りまへんけど、少うしづゝ凄味が出て來たやうに思へまんね、例の惱ましさうな眉毛の八の字に、少し皺まで混り出したやうな氣がしまんね、しかし、人間て妙なもんだんな、私も斯う妙に意地になりましてな、止めずについて行きましたもんだす。

すると、女子は越中橋を渡つて、中の島へ出よりました、私もやつぱりその後から二三間離れて、越中橋を渡つて中の島へ出ました。斯うなると、もう何が何やら、さつぱり分りまへん、何をする女子やら、何處へ行く女子やら、私を吊つてよるのんか、それとも私にちよびつと位は氣があるのんか、さつぱり分りまへん、と言うて、分らん言うて、斯うなつたら、此方も止める譯に行きまへん、もう無茶苦茶に、譯分らずに、まるで女子の腰に紐でも付けられたやうな鹽梅で、唯夢中でついて行きました。女子はやつぱり、時々私の方を振り向きながら、どん

〱東へ行きまんね、……少うし邪魔くそなりましなア、聞いてゝもちつと辛氣くそなりましたやろ、飛ばして話しますわ、それからな、土佐堀川の緣を東へ東へ、到頭肥後橋も通つて、あれから淀屋橋の北詰へ行つて、公園の太閤はんの銅像と圖書館のとこをぐる〱二遍廻りましたもんだす、あすこではぐらかされたら、どんならん、思ひましたさかい、そこでは二間程後まで私も勇氣を出して女子の尻を附けましたもんだすがな、その時ちらツと後向きました、女子の顔の別嬪やう言ふたら、一寸口に言へまへんな、それも何も愛嬌を見せた譯やおまへんね、確に睨みよりましてんさかいな、けど、その切の長い黒水晶見たいな目に、さあ、どういふたら分りますやろな、さうだす、怨を持つたやうな目で、ちらツと私の方を見よつた時には、本眞に私はそこで殺されたかてえゝ、思ひましたな、いえ、えゝ女子は確に目だけでも、口だけでも、男を殺せまんな、しかし、あんた、そんな目や口を見たことはおまへんやろ、あゝ、あの女子は今頃どこに、どうしてくさるやろ、もうえゝ年になつてよるやろが、あんな女子は今見たかて、その時とそないに變つてしまへんに違ひおまへん……。

それから、ホテルの前に出て・浪花橋を渡つて、まだどん〳〵東へ、北濱の通りを行きまんね、こんな女子が・こんな着物を着て、ようもまあ、こない歩けたもんやと思ひましたな、天神橋の南詰から松屋町へ出て、それから島町へ曲りました。はゝあ、と私はその時思ひました、島町いふと、男妾の周旋屋へ行くのんか、とも一寸思ひましたが・さうやなうて、あんた、聞いたことがおまへんか、島町に名高い美男で、男女の何を教へるちふ不思議なとこがおまんね、そこのお上さんが又繪見たいなえゝ女子で、日本一やいふ評判だす、さうだすやろ、舞や踊ぐらゐではとてもあの位の恰好はつきまへんわい、これは屹度舞や踊の本家本元の、あれの上手、それも手を取つて人に敎へる程の上手になりましたら、そしたら、あんな、何とも彼とも言へん、男を引きよる恰好が出來るのやろ、今迄人を散々行方を晦まさう思うて引張り歩きやがつたのが、あゝ、これが店のもんなどが始終喧ましう言うてよる、島町のあれの師匠のお上やつたんか、思うてるうちに、又違ひまんね、違ひまんね、女子はもう谷町に出てしまうて、今度は谷町筋を眞直に南へ南へ行きまんね、さあ、もう又さつぱり何が何やら分らんや

うになりました。あんた、それから南へ南へ行つて、女子ももう大分辛氣くそなりよつた風でな、一町に一遍ぐらゐ振向きながら、もう如何な私にも、女子が私を撒きたうなつたんやな、言ふことが分つて來ましたわい。結局、南へ南へ、天王寺の方へ行きまんねけど、その間に彼方へ曲り此方へ廻り・小さい路さへあると、そんなとこを早足に曲りよりましてな、この位の女子になりますと、早足に歩いても、並足に歩いても、どうしたかて、堪りまへんな、私はもう始のうち見たいに、胸がどき〳〵するのんも何も直つてしまうて、この阿房な頭がだん〳〵はつきりして來たやうな氣がして、さうすると、この女子をいつその事殺したろか、と思ひました、どうぞして、殺したろと思ひました、そのうちに、天王寺の西門を西へ下つて、今の新世界のあるとこから、戎さんの社の前の邊へ出て、あの邊から少しづゝ少しづゝ南へ入りながら、やつぱり西へ西へと行きよりまんね、そこで、私も始めて氣がつきました、あんたも分りますやろ、西濱の女子だすがな、西濱な、御存知だすやろ、穢多町の……。

私はその時一遍に思出しましたんやが、あすこには、それや、別嬪がゐまつせ・中にはそれ

や滅法界な別嬪の癖に、一とこ目がたゞれてゐるので興の醒めるのもおまつけどなあ、それや、あんた、えゝ衆の穢多の娘には、目の醒めるやうなんがゐるまつせ。昔は私の店でも決してあそこへは、どんな良え注文があつたかて足踏せんちふことだしたさうだんがな。明治になつてから、あそこの『團駒』ちふ大金持がおますやろ、あそこの婚禮物のあつらへを受けたんが始まりで、それから『團駒』へだけは店のもんも一寸々々入りますがな。私も二三遍行きました。それや、叮嚀なもんだつせ。番頭になんてまるで殿さん扱ひにしてくれますわ。豪勢な生活をしてまつせ。私は小僧の時始めて行つた時、小僧の私にお茶を出してくれましたが、そのお茶碗が、あんた、金ぴかもんだんね、その時は唯ゑらいもんやな、思ふたゞけで知りまへなんだけど、後で聞いたり、聞いてから又呼ばれた時に見ましたんで、二度びつくりしましたんだすが、それは慶長小判を打抜いて、茶碗の恰好にしたもんだんね。そこの家の娘が又それやえゝ娘だした。さう思ふと、今つけて行く、その女子が、それや『團駒』の娘より又ずつと別嬪だつけど、よう似てまんねやが、ひよつとすると、あの娘が大きなつて、こないになりよつたん

やないか、と私は思ふた位だす。

もう穢多の娘やろが何やろがかまやしまへん、大阪中にそれが知れ渡つたかてかまやしまへん、こんな女子が女房に出來るもんなら、と私は思ひましたな。そのうちに、だん〳〵日が暮になつて來ました、丁度今宮を歩いてました時分だすがな、さあ、私も大分氣が苛ついて來ますし、女子もだん〳〵堪らんやうになつて來たらしおまんね、もう一町に二三遍も振向きまんね、そして、急に横へ曲つて、大黑町にはひると、やつぱり又西へ、西濱の方へ向いて行きまんね、もう違ひおまへん、西濱の女子だす、もういつそ、さうと定つてくれ、そしたら相手の身分が身分だけに、此方から嫁に貰ひに行つても、話が早う付くかも知れへん、俺の方は格別財産こそないけど、さう悪い身分のもんやなし、男前はよしと、思ひながら、丁度鷗町のあのごた〳〵したとこへ來ました。すると、細い横町見たいなとこで、女子はもう十間に一遍、五間に一遍ちふ割合で、むさんこに右左へ曲り曲り、振向きまんね、さすがにもう足附も大分しんどさうだんね、私の方は夢中だす、女中はさつさと足を早めて歩きまんねやが、長道した上に

急いて歩くもんだすよつてに、着物も大分身體から亂れて來た樣子が、それが又何とも言へまへん、まだそこら邊は晝の明りだつけど、お日さんは入つてしまふた時分だす、振向く女子の顔が銀見たいに、青う光つて見えまんね、丁度人通りのない、拔露路見たいなとこを歩いてました、私と女子との間は一間半か二間ほどしか離れてしまへん、私は又もう、いつその事殺してしまふたろか、と又思ひました、堪りまへん、女子もこの位別嬪になつたら、何ちふたら宜しうおますやろ、何ちふたら宜しおますやろ、惚れたりはれたりするとこを通り越して、殺したうなりまんな、堪りまへんがな、堪りまへんがな、國を傾け、城を傾ける美人ちふのはあんなんだすやろな。

すると、その時、突然女子がぴつたり立止まりましたもんだす、私もエレキを掛けられたやうに、ぴつたり立止まりました、もう私も本眞の夢中だした、女子も屹度夢中だしたに違ひおまへん、女子はきつと私の方を、腰から上だけだすけど、七分方まで振り向きました、その顔が、何ちふ顔だすやろ、柳眉を何とかするちふのはあの事だすな、きツと眉毛を畫き直したや

うにはつきり際立てゝ、目を七分に開けて、さうするとその切の長い目の中ちゆうが、その濡れた黒水晶のやうな黒目で一ぱいになつて、それが眞黑氣になつて、別の目でない目見たいに見えまんね、その目に恨が一ぱいこもつてまんね、口が又口だんね、口を持前の大きさより、少し大きう引吊つて、と言うて、それが醜女の大口の半分位の大つきさだつせ、それを心持三角形に開いて、それがやつぱり何とも言へん恨を持つた表情だしたな、その奥に眞白な、後で植ゑ直したやうに奇麗な、そろふた齒を見せて、

「しつこい!」と一聲、その聲が又、それがヒステリイ的でなし、と言うて勘走つてもゐず、と言うて鈴を振る言ふやうなんでもなし、男のやうな聲でも勿論なし、言へまへん、兎に角、さう一言だけ言ひました、そして、さう言ふのんと一緒に、私の方にちらつと右の手を振つたか思ふと、私の足元に、ぱさツと何やら落ちた音がしましてん、それだけの事が一息の間のことだんね、何やろ? と思うて、ふつと足元を見まして私は一遍に眞青になりました。女子はもうすた〳〵向ふへ行きます、私はその場に膝をついて、そこに、その女子が私の足元にぶつ

けて行きよつたもん、それは私の財布だんね、それを兩手に握つて、はアーツと長い長い息をついたまゝで、何と！　口の中で、大きに、大きに有難う！　と念佛を稱へるやうに呻りながら、拜みました、女子はもうその時は横町に曲つてしまうて、姿も何も見えしまへんね。……

[redacted]

若者

一

大和の國に高——といふ町がある。大阪の方から奈良行の汽車に乘つて、龜の瀬隧道を拔けて王寺の驛に着く、そこで乘換へて南に向ふ汽車に乘ると、二つ目の驛が高——で、そこで又櫻井の方へと、吉野の方へとの二つに汽車の道が岐れるやうになつてゐる。

その高——町から二里ほど東南に當る、汽車の通らないN——といふ在所に、私の母方の薄い緣故の親類があつて、何でも私が十四五の時分に、私の三歳の時からずつと寡婦になつてゐた母が、そこに居候に住込んだのである。山目といふ家で、母がそこへ行く迄、私はその名前さへ知らなかつた程緣の薄い親類なのである。

母が山目の家へ行つた翌年だつたかに、私は彼女を尋ねるために始めて高——といふ町の停車場で汽車を下りた。そして停車場から乘つた私の俥は東に向つて一町半ほどの間線路に沿うて走るのである。その道は片側はよくある停車場前らしい商家が軒を並べて居て、他の線路に面した側には柳と櫻が並木になつて植ゑられてあつた。が、俥は南に曲る、と陰氣な、商家だ

か仕舞太家だか區別のつかないやうな軒並の町が、でも、中には日本建のくすぼつた格子造りの家に、基督教會といふ看板が掛つてゐたり、それと隣同志に何々銀行といふ表札が出てゐたりするのだ。さういふ町を四五町も行くと、町が突當りになるところで俥は又東に曲るのである。すると急に軒並が田舍町ながらに場末らしくなつて、三町も行つたところで果して野原につゞくのである。俥の行手の遠くの方は大和山脈とか、吉野山脈とかいふ、高い山が壁のやうに立つてゐるし、俥の背中の西の方には二子山、葛城山、金剛山、と順々にこれ等は國境をなして聳えてゐるのであるが、さういふ高い山に取圍まれたその邊の野原にも又、小さい山や丘のやうなものが隨所に島のやうに浮かんでゐるのである。中で稍稍大きいのが畝傍山、天の香久山、耳成山などゝいふのである。そんな中を二里行つたところに、私の母の居候してゐた山目の家があるのだが、それはこゝでは餘談だから省くとして、

その次に、又翌年だつたか、私が大阪から母を尋ねるために、汽車を高――町で下りた時には、今度は俥に乘らずに歩いて行かうと思つて、うろ覺えの道を、線路に沿うて東へ行つたのはよかつたが、南へ曲る時に一つ手前の道を曲つたことを後で氣が附いた。妙に町に見覺えがなくなつて、心細さを感じ出した時には大きな池のほとりに出てしまつたのである。無論、それは町の中らしいのであるが、その池の邊だけはこんもりとした木立があつたり、築山があつたり、猥りに樹木を折るべからずの立札があつたり、どうやら公園らしいのである。だが、私は右手に見える例の國境の山脈に見當を附けて、葛城山と金剛山との間の邊が眞右に見えるところ迄かまはず歩いて行きさへしたら、間違ひはないだらうと思つたものだから、どん／＼その公園の池の縁を通り過ぎて、すると何だか燈籠を大きくしたやうな恰好の、鐘樓を持つたお寺の前などに出た。そして不安な中に大凡五六町も行つたところが、南向いたまゝで町が切れてしまつたのである。おや、この前には東向いて町が切れたのにと思ふと、すつかり心細くなつたので、到頭歩いてゐた人を呼び止めて聞くと、これは高――の南口で、あなたの行くのは東口へ行かなければいけない、と言つて教へられたことがある。

さて、N――村の山目の家に半三郎といふ、私より三歳年下の息子があつたが、その後私は

中學校の夏休の時など、時とすると二週間も三週間もそこに泊りに行つたことがあるので、いつとなく半三郎と親友になつた。半三郎は髪結床の主人とか呉服屋の番頭とかの亞流で俳句を作る癖がある。但し彼の俳句は何とかやとか、何とか何とか哉とかいふ形式に十七文字を當て嵌めるだけのもので、一向振はないのである。だが、その時分から文學を好む癖のあつた私はそんな在所で話をする友達が一人もないものだから、始終半三郎を捉まへては怪しい俳諧を談じたものである。すると、或時彼は私に是非俳友を一人紹介しよう、と言つて、私に紹介したのが咲谷重兵衛である。重兵衛は半三郎と同い年の、高――の鹽問屋の息子なのである。もつとも紹介すると言つたつて、彼等自身が元々、通り掛りに、やあ〳〵、と聲を掛け合ふことは始終あるだらうが、別に膝を附き合はして話したことなどは殆どなさゝうな仲な位のものだから、私と重兵衛と會つたのも、私がN――村の山目の家にゐた間にたつた一度、それも一時間ほど彼が高――町から自轉車に乘つて遊びに來たのと、その後一二度私が大阪に歸る時に、N――村から高――驛に行く道で、丁度その通り道に當る彼の家の、その鹽問屋の店の間に坐つ

てゐる彼とお辭儀をし合つたのと、その位のものである。彼の家は高――町の東口にあつたから。

二

それからずつと年數が經つてからのことである。

もつとも私が高――町やN――村と別れに行つたのは中學を出た年のことで、ぢやあ、これから東京へ勉強に行つて來ます、と言つて山目の人たちや、母や、半三郎に暇乞を告げて、N――村から俥で高――驛に向つた、その途中、東口の咲谷の家の前を通ると、その店の間にお凸の、奧目の、小さい鼻の、獅子鼻の、私が半三郎と内所で狆がくしやみしたやうな顏だな、と言つて『狆くしや』といふ仇名を附けたところの、重兵衛がちよこなんと坐つてゐたので、その時はわざ〳〵俥を下りて、鹽の袋が石垣見たいに積んである土間で彼に挨拶をした。重兵衛は半三郎とは違つて俳句も相當にうまかつた、と前から感心してゐた私は、その時始めて重兵衛の本懐を打明けられたところに依ると、彼は大きくなつて鹽屋になるのは厭だ、俳句もも

うつまらなくなつた、是非文學をやりたいと思ふ、東京の大學に文學を研究に行くあんたが羨ましい、とその狆くしやの顏に悲みの表情を充たして言つた、そこで私は、眞面目と熱心さへ缺かなかつたら、そのうちにお父さんからお許も出て、そのうちに本懷が遂げられますよ、自愛なさい、と言つて、彼と別れて俥に乘つて高——驛に行つたのである。それは私の二十歳の年だから、重兵衞は十七歳だつたに違ない。

だが、境遇の變化なんてものは、十年もの年數に匹敵するものだ。それから三四年後のことである。何でも秋のことであつた、私は東京の或私立大學の文科の、而も最上級に籍を置いてけろりと文學書生になり了せてゐたことである或。朝、下宿の寢床の中で、寢もせず起きもせず、出來ればもつと寢てやらうと思ひながらうと〳〵してゐる所へ、女中が手紙を持つて來た。それが大和にゐる母からの加代子に就いて書いて來た始めての手紙である。

それに依ると、母はその一二ケ月前から、山目の世話で高——町にある、彼の持家の小さな借家を借りて、そこで近所の娘たちに踊や唄の師匠をしてゐた。そして、その手紙の終りに、

この一ケ月程前から、誰かの紹介で三味線を習ひに來るといふ隣家の娘のことが書いてあつた。その娘と母が大變仲よくなつて、寡婦暮しの寂しさを慰められて居ることを書いて來た、本の好きな娘であるから、小說本を讀むことが好きなといふ意味だらう、何か面白い本を二三冊送つて上げてくれと言ふのであつた。

それから一ケ月ほど經つて、次に又一ケ月ほどして、私が一向その約束を果さなかつたものだから彼女から二三度催促の手紙が來た。その娘の名が加代子と言ふのである。加代子さんは始終お前のことを聞いて下さる、私は色々と慰むられてゐる、だからお前からお禮の手紙を出しておくれ、と言ふ風なことを彼女は書いて來た。無論、親一人子一人の境涯で、その親一人の所へ遊びに來る者なら、子の話が始終話題になるのであらう。

私はそれでも尙母の賴みを果すことを怠つてゐたところが、そのうちに冬休か來たのである。私はその休中に友達と一緒に旅行をする約束をしたのであるが、母の方からも是非一度歸つて來いと言つて聞かないのである。で、友達に旅行の日を少し延ばして貰つて、私は三日ほ

どの豫定で母のところに行くことに定めたので、その時始めて、どうせ母の所へ行つたら、よく手紙に書いて來る、加代子といふ人とも會ふだらう、と氣が付いたので、早々二三冊の小說本を買つて送つておいた。

思はぬ町がお馴染になるものだなと思ひながら、私は高——町で汽車を下りて、始めて行くところの、母の侘住居の町の名を言つて俥に乘ると、車夫は、近道を行きませうと口の中で言つて、N——村へ行く時とは反對に、停車場から西に向つて一町ばかり行つたところで、南に曲つて、田圃と家と半分々々位の、寒い風が金剛山から吹き下ろす道を走るのである。その道を二三丁走ると、だんだん兩側が町の中らしく人家が續いて來て、いつとなく全く町の中に入つたと思つたところで町が四ツ辻になつて、いつか見たのとは又違つた、大きな燈籠のやうな恰好をした鐘樓のある、塀の有樣などは支那の繪に見るやうな寺の角を東に曲つたので、おや、これでは後戻りするやうになるんぢやないかなと思つて居ると、寺から五六軒目に大きな新築らしい料理屋があつて、その料理屋の隣の路次の中に私の俥が入つて行つた。母の家は、その

中の、新築の格子造りの、全體で三間ほどしかない小さな二階家であつた、もつとも長屋建である。

私が母の家に行つた時、丁度加代子が來あはしてゐた。見ると、思はず少し私の顏が赤くなりはしなかつたかと心配したほど、私ははつとした。と言ふのは、その時まで彼女の年齡とか年頃とか、まして顏立とかに就いて、私は何の考もしてなかつたことだのに、見ると、彼女が餘り美人でそして年も若かつたからである。が、私はそこをぐつと唾を一つ呑み込んで、氣を鎭めておいて、わざと少し改まつた恰好で挨拶をしたところが、加代子は、ずつと若くは見えるが、その實後で聞くと、私と三歲違の廿歲にもなつてゐると言ふのに、ひどく子供見たいにはにかんでしまつて、又實際心からさうらしかつたが、まあ、恥かしい、といふやうなことを一言か二言か言つて、母の止めるのも聞かずに逃げるやうに歸つて行つてしまつた。加代子といふのはこの娘だつたのか、と私は改めて心の中で味はふやうに思つて見て、大きに照らされた氣味だつたが、兎に角十分な滿足を感じたものである。實際、素晴らしい、いゝ娘なのだ。

ばつとした典型的な恰好の目が、餘り黒目勝なので、いつも濡れてゐるやうに見えるのである。眉毛も鼻の形も悉く少し堅過ぎる程調つてゐて、黒々とした髪の形まで、稍々風情を失うて見える程ふつくりはしてゐるが、一絲亂れずに、油氣の多い束髪に結つてあるのである。口が少し大きいのが難だが、その難さへも彼女の表情に變化を與へるとさへ見えるのである。彼女は母の住んでゐる路次の出口の料理屋の娘なのである。詳く言ふと、その料理屋の主人といふのが彼女の上の姉で、その人は夫なしに暮してゐた、その姉の料理屋の直裏手の、路次の取付きの家を一軒借りて、料理屋とは屋根から屋根に往來するやうにして、彼女はそこに住んでゐたのである。だから、路次の二番目に位置してゐた母の家は、彼女の家の又隣になるのである。

彼女は平素あんなに親しくしてゐる人の息子が、こんなに立派な、(と私が言ふのも異なものであるが、鼻下には黒い、而も如何にも青年らしい口髭さへ生やしてゐる!)青年であつたことに、大きに驚いたといふ風であつた。さうに違なかつた。彼女は自分の住んでゐる高――町に、こんな青年を一人も見なかつたに違なからう。ところで、その日の夕方、私が母と共に、

彼女の家へ挨拶に行つた時も、丁度その時表の料理屋のお上であるところの、彼女の姉が來てゐたので、姉に切り話をさしておいて、始終の間俯向いてばかりゐた。その時、一寸私の驚いたことには、彼女の上品な、お嬢さんお嬢さんした恰好に似合はず、彼女の住居の、長火鉢から、茶棚から、鏡臺から箪笥の上の飾りに至るまで、妙に玄人じみてゐたことである。無論料理屋の姉に育てられて、その姉の家の裏にゐるのであるからであらうと私は思つた。

が、その翌日から、彼女は近づけるかどうか、そつと探りを入れるといふやうな風に、少しづゝ私に接近して來るやうに見えた。夕方、彼女が母の家に遊びに來た時、母が一寸下の部屋に用事に行つた時だつたか、昨夜から町に芝居が始まつてゐる、一緒に行きませんか? と耳こすりするやうにして言つたので、私は殊更に、恥かしさを退散させるために、行きませう、一緒に行つてくれますか、と大きな聲で答へたものである。ところが、夜になつて、私が心待ちに、母にもその事を言はずに、部屋の中の疊の上で立つたり坐つたりして待つてゐたにも拘らず、彼女は到頭やつて來なかつた。彼女は恐らく、私が行きませう、と大きな聲で答へた意味

を汲み兼ねたのだらう。彼女が私に惡い感じを抱いてゐないことは確だ、しかし私が輕々と、あの見苦しい田舍芝居を見に行かう、と言つた言葉が本心かそれとも唯の冗談か、と解し兼ねたのであらう、屹度幾度か思ひ切つて誘ひに行かうと思ひ立ちながら、だが、と思つて、そして到頭來なかつたのであらう。それとも、何かの都合で急に行かないことになつたのかな、と私は色々と思つた。

翌日私たちが會つた時にも、始のうちはその事に就いて彼女は何にも言ひ出さなかつたので、又母がゐなかつた席で、私はわざと快活に、昨夜は到頭待ち呆けを食はしましたね、と言つたら、でも、恥かしおましたさかいに、と彼女は又しても少女見たいに恥かしさうに顏を隱して言ふのである。そしてその日の夜、私は友達との約束のことがあるので、もう東京に歸らなければならなかつた。すると、彼女はそつと何か秘密をでも囁くやうに、私の耳の傍に口を寄せて、どうぞこれから、東京へお歸りになつても、さい〲お手紙をおくなはれな、」と言ふのである、そんな仕方は又妙に思ひ切つてゐるのである。

「えゝえゝ、上げなくてどうしませう、」と私は內心は少なからず狼狽しながら、口の先では出來るだけ豪放に答へた。「だが、あなたはそんなことを言つて、僕にばかし出さしても、お返事をくれないんでせう、」とやつてのけた。すると、

「まあ、そんな事を、」と言つて彼女は袂で顏を隱した。だが、考へて見ると、私と彼女とは、彼女が事每に無暗に少女見たいに恥しがるかとおもふと、どうかすると急に物馴れたやうな振舞をするのに比べて、私は又表面だけは隨分苦心して磊落らしく裝うてゐるのだが、內心は恐縮して始終汗をかいてゐたことなど、丁度裏表をなしてゐたらしく見えるである。

三

斯ういう次第で、私たちは知合つて、直に別れたのであるが、その後私たちは約束の如く時々手紙を取交はした。會はない迄はひどく彼女に冷淡だつた私も、どうやら冷淡ではゐられなくなつたのである。が、なるべく辛抱して、彼女の方からの手紙の數より、自分の方のが多くなるやうな事があつては體裁がよくないなぞと心掛けてゐたところが、彼女の方からは、私の

手紙の出し方が少ないと責めて來たものである。すると、私はその返事に、時々その私の方から返事が遲れたり、手紙を出すことを怠つたりするやうに見えるのは、それは決して私があなたを疎略に思つてゐるからではないので、實は東京にゐる學生などゝいふものは、私ばかりでなく、隨分だらしのない亂暴な生活をしてゐるもので、どうかすると郵便の切手代さへなくなつてしまふことがあるものですから……といふやうな事を書いてやつた。これは無論嘘ではないが、と言つて何もわざ〳〵報告してやる必要はないことなのだが、唯好きな女に、全く私は彼女に戀して居たのだが、それにやる手紙に一寸こんな事を書いて、磊落を裝つて見たいやうな、これが私の癖で、その反對に、愛する愛する君とか、毎日忘れないとか、そんな事が言へれば言ひたくないこともないが、どうもそんなことを手紙に書いたり口で言つたりすると、背中がむづ〳〵して來て出來ないのである。ところが、早速その返事としての彼女からの手紙の中に、私は五十枚の三錢切手が這入つてゐたのに驚かされた。それ以來、時々彼女から、丁度國の妹から兄にでも送るやうな品物を、送つて來てくれたのである。それと共に彼女は私の母

とも益々親密の度を增して行くやうだつた。そして私との間の手紙も、だん〳〵戀のそれらしい色を加へて行つたものである。その調子で行くと、私と彼女は、丁度年頃も年頃だし、私の母も彼女の姉も手近にゐることだし、二人は夫婦になるべき狀態に進みつゝあつた譯である。

だから、次の夏休は私にとつてひどく待遠しかつたものである。それに私はその夏、私立文科大學を卒業する譯だつたのである。略々讀者も既に察しられたゞらうが、母はさういふ貧しい寡婦のことだから、私は或父方の親類から金を貰つて、そして勉強してゐたのである。が、私は外の文科の學生の例に洩れず、否それ等の誰よりも一層勉強しなかつたのである。大抵の者なら、試驗の前ぐらゐには一寸勉强をするのであるが、私と來ると、不斷は何をしてゐたかと言ふのに、無論學校へは一日も行かないで、友達を訪問したり、家で雜誌を顏に當てゝ晝寢をしたり、全く芋蟲見たいにごろ〳〵して暮して、試驗といふ聲を聞くと、早い話が急に私並の藝術的緊張を感じ出して、取止もない文章や、變挺な詩などが作りたくなるのが常で、そんな譯で試驗が來ると原稿紙を百枚ばかり

汚して、そしていつとなく日を過してしまつたものである。それでもどうやら斯うやら、最後の一つ手前位で進級して來たのである。

さういふ流儀の試驗を終ると、私は今度は決して友達と旅行の約束などをしないで、前以て葉書や電報を出しておいて、一散に汽車で高――町に驅け着けたものである。屹度母と加代子とがその停車場に迎ひに來てくれてゐるであらう、と思ふと、十里も手前の汽車の中から私の胸は半鐘のやうに鳴るのである。無論、加代子から早く歸つて來て下さい、停車場迄お迎へに上ります、とちやんと前から手紙で言つて來てあつたのだから。が、高――の驛に汽車が着いて、大きに見得を切つて、汽車を下りたところが、そこに母一人しか來てゐないので、私はがつかりした。が、母には決して加代子のことを私はその時聞かないで、妙に不機嫌を顏をして、彼女と並んで高――の町を歩いたものである。今度はその前に俥で行つた道ではなくて、ずつと以前私がN――村へ二度目に行く時、歩いて行つて間違つた、あの池のある公園の所へ出た。こつちへ行くんぢやないんですか、と私が停車場の通で西の方を指さして母に聞くと、

いや、そつちは近いけど、田圃道を通らねばならぬから、暑い、と言つて、この前の時とは別の道に來たのである。そして公園のところでくるりと池の西北を半分廻つて、そして西向いて曲ると、入口に共同井戸があつて、その井戸の隣に御神燈が掛つてゐたり、駄菓子屋の二階で淸元の看板が出て、稽古をする三味線が聞えたり、百姓家そのまゝらしい家の中に、荒い簾のすき間越しに、桃色の腰の物一枚で三々五々と女が寢そべつてゐるのが見えたり、つまり高――町の色町らしいところを三町ばかり行つて、町の目貫らしい本通りに出て、そこを南に一町ほど行つたところで、一寸西へ曲つたら、例の加代子の姉の料理屋の前に出た。この前に裏から來た時とは全然反對で、仲々田舍ながらに賑かな通りなのである。

そして母の家に着いた時、彼女は始めて加代子の名を口にして、言ふには、「加代子さんは一昨日から、この暑いのに風邪をひいて寢てはんね、けど。お前の歸つて來るのをゑらう待つてはる樣やさかい、これから歸つて來た挨拶かた〴〵、一寸見舞に行つてお上け。」

この言葉は私の心中をひどく快活にしたのは無論である。が、例の私の性質で、わざと進ま

ぬやうな聲で返事をしておいたが、やがて母と二人で加代子を訪問した。その癖、言ふことは仲々大膽なのである。「今日はお母さんと一緒に是非お迎ひに行きたし、それにお歸りになる迄に早う身體を直しときたいと思うたもんだすよつてに、」と口ではこんな事を言つて、彼女は暑いのに殆ど蒲團で顔を隱してつゞけてゐるのである。「お醫者はんのお藥を二度分一ぺんに飲みましてん、熱さましだんね、そしたら急に苦しうなりましてな、こないに手から顔までほろ〳〵したもんが出來ましてん、」とそれも七分通り私の母に言ふやうにして、最後に「私、恥かしいわ」と言つて、彼女は又一旦出した顔を蒲團で隱したかと思ふと、向ふ向いてしまつた。私はぞく〳〵する程嬉しくなつたことである。

多分その時のことであつたが、彼女は私に明日になつたら起きられようと思ふから、そしたら一緒に夕方でも散歩しませう、と言つたことであるのに、その翌日の夕方になつて彼女は完全に起きてゐて、路次を出た通りに涼床几を出して涼んだりしてゐながら、今か〳〵と思つて

待つてゐた私を一向誘ひに來ないのである。その癖、又その翌朝になると、今晩こそ公園へ行つて見ませう、と言ひ出しておいて、その晩になると、澄まして母の家に來て一時間も二時間も私たちと雜談をしながら、約束の話は忘れたやうになつてゐるのである。やつぱり、いざとなると恥かしくなつて言ひ出せないで、私から言ひ出すのを待つてゐるのだらう、と私は氣が付いたが、私は自分の意地張りの癖から辛抱して默つてゐた。が、到頭三日目の晩だつたかに彼女は私と母とゐるところで、母に向つて頻りに散歩を勸めた。母は、その時、私たちが近づくのを認めてゐながら、何故だか進まないらしい返事をするのである。だが、そこで私が思ひ切つて、行きませう、と言つたので、三人でぶら〳〵と例の池のある公園に出かけた。方々に明りが點つてゐるのだが、隅々までそれが通らないのか、妙に暗い感じがする公園なのである。池の中には三四艘のボートが赤い提灯をつけて浮いてゐた。私があれに乘りませうかと、提議すると、今度大阪へ一緒に行つて乘りませう、この邊は人の口が喧ましい、と彼女は言つた。で、私たちはぞろ〳〵と涼みに出てゐる人通りが多いので、寂しくはないが、何となく暗い、

田舍のお祭の晩の景色見たいな氣のする夜の公園の、木の枝と枝とがどうかすると道をふさいでゐるやうな所を少しばかり歩いて、それから又町に出たところで、彼女はとある果物屋の店に這入つて、バナナとか枇杷とか色々なものを澤山注文したので、私の母がそんなに澤山どうしなはんのと聞くと、みんなで食べまんねやが、と彼女は甘へるやうな口調で言つた。餘り、こんな風にくど〳〵と詳く書いてゐると切がないから少し端折るが、さうして私が母の家にゐる間に、彼女は是非近いうちに一緒に旅行しませう、私見たいな田舍者と一緒には厭だすか、私はあんたのお母さんが好きで、私の姉なんか大嫌ひ、あんたのお母さんは綺麗な人だんな、それに品のえゝ人やさかい、時々一緒に奈良や、京都や、大阪やに行く事がおますが、私までえゝとこのお孃さんに見られて、私嬉しいわ、とか、或ひは又彼女は方向を變へて、私のことを落着いてゐるとか、教育のある方は違ふとか、大人しいとか、等々々、そして自分は商人は嫌ひだとか、私あなた見たいな人が好きやとか、だん〳〵大膽になつて、あなた見たいな方と一緒になれたらどんなに……とか言つて、袂で顏を隱したり、さうなると、流石の私も

嬉しいには嬉しいが、口がきけなくなつて、さうですかね、本當ですかね、などゝ間の拔けた答をして顏を赤くしたものだ。

さういふ、一體加代子は何者なのか、夫があるのか、それはどうも見かけないやうだが、そんなら誰か約束の夫でもあるのか、どうも私にはやつぱり娘としか受取れないのであるが、をかしいのは、彼女が私をそんなに好いてゐるらしいにも拘らず、そして私のやうな者、元より此方も嫌ひではないのだから、彼女さへよければ、結婚なぞ出來さうなものであるのに、それはどうやら彼女の口振りから察すると、彼女が望むところであるにも拘らず、何か出來ない事情がありさうに見えるのは何のためか?――その事を、私は五日目だつたかに母から聞いて驚かされたのである。

四

私はその二三日の間、妙に不安な氣に襲はれて、少しばかり不機嫌だつた、といふのは私が東京を立つた翌々日だつたか、東京の學校の方の成績が分る譯なのだが、元より最後の一つ手

前の邊の位置に違ひないが、それでも卒業だけはする譯だから大丈夫とは思ひながらも、多少氣懸りでもあつたので、東京に殘つてゐる友人に賴んで、及第さへしてゐたら、母の家へ宛てその事を電報で知らしてくれ、落第なら通知してくれなくてもいゝと賴んでおいたのである。あんな腐り學校の腐り文科なんか、何程の事ぞと思つてゐたのであるが、一向電報が來ないのである。そんなものに比べたら、百倍も値打のある加代子といふ人が出來た譯だから、どうなつたつてかまふもんか、と一旦は度胸をきめたものゝ、やつぱり少し苛々するのである。その時分のことであるが、私にとつてグワンと背中を天秤棒か何かで毆られたよりも、三年間授業料を拂つた腐り文科を除名された百倍も痛い思を感じたことであるといふのは、母から聞かされた加代子の身の上なのである。

早く言つてしまはう、加代子は人の妾なのである。元、彼女の家は貧乏で、彼女の生れぬ先に、現に「おかめ」といふ料理屋をしてゐる彼女の姉は、始め大阪に女郎に賣られて、四年目に無事に足を洗つてからも樣々の苦勞をした後、どこかの男をうまくだまして金を捲き上げて

今から六年程前にこの町に歸つて來て、小さい料理屋を始めながら、又二三人の男から金を取つて、そしてつい近年に今のやうな立派な料理屋になつたのである。その次の、加代子の直上の姉は、町の受負師で、俠客の男の氣に入られて、その男に嫁いたので、その仲に子供なども出來て、仲々贅澤に暮してゐる。その俠客が上の姉を間接にやつぱり助けたのである。で、一番下の妹の加代子だけは、姉たちのお蔭で大した苦勞もしないで、高等小學校までも出て、十七十八と大きくなつたのである。だから都合よく行つたら、上の姉などゝはすつかり氣質の違ふ、內氣な娘のことだから、彼女だけは普通の堅氣の家に嫁入つた筈なのであるが、或時「おかめ」に遊びに來た客が加代子を見初めて、是非妾にほしいと言ひ出したのである。音取亦太郞といふ、大和の國第二番の金持ださうで、その話に先づ上の姉がすつかりその氣になつて、彼女一流の凄い腕を奮つて、月々百圓、別に半期々々に千圓づゝといふ約束をしてしまつて、厭がる加代子を嚇したり、賺したりして承知さしてしまつたと言ふのである。

その話を聞いた時、私は世界が一時に暗闇になつたやうな氣がした。どうも、いくら金儲の

荒い料理屋の娘とは言ひながら、私が母の家へ行つた以來、毎日程、色々と珍しい、金目の食べ物や何かを私に持つて來てくれたり何かするのはをかしい、とは思ひながら、私もまさかそこ迄氣が附かなかつたので、その話を母から聞いてゐた間は、さうですかね、女ツていゝもんですね、金持なんて惡い奴ですね、あの姉さんていふ人は奇麗な人だが、どこか凄い顏をしてゐると思つたら、並々の人ぢやありませんね、あなたもなるべく餘り親しくしない方がいゝですね、などゝ、團扇ばかり無暗にばた／＼使ひながら、なるべく平氣な調子で合槌を打つておいたが、やがて一人で二階の部屋に上つて行つて、ごろりと仰向けになつて、三時間ばかり天井を見てゐたものだ。天井の木目まで諸行無常と見えるのである。

だが、餘り頭の惡くない、その代りどこやら俗物であるところの私は「おかめ」の姉の心事も、金持の音取亦太郎の心持も、加代子の境遇も、一切の事をさらりと一通り了解してしまふと、忽ち洒々として、それ等の事を百年も前から知つてゐた事のやうに、或ひは又別の言葉で言ふと、神樣の御意のまゝにと思つて、心を落着けたものであるが、流石にまだ少しばかり動

搖し殘つてゐる心の方は、それを宥めるために、あゝ玉盃に花受けて、と藝のない私は唱歌をうたつて一時間ばかり暮した。

それから又二日目の晩だつたかに、夕方、加代子が、旦那さんが是非あなたにお目に掛つて一緒に御飯を食べたいと望んでゐるから、厭でなかつたら來てくれないか、と私を呼びに來た彼女は最後に、色男に對するやうに、ね、宜しおますやろ、一寸でも來とくなはれな、その方が私、都合がえゝことがおまんね、と私の耳にその白い細い指の手をかざして言つて、につこりと溶けるやうな表情をして見せるのである。はい／＼、と答へて、私は一人で彼女の家を尋ねた。

一見して、併し内心安心なやうな氣がしたことは、大和第二番の金持の、音取亦太郎の容貌はいぶしが掛つた赤銅の樣な色の顏に、目と言はず鼻と言はず、それ／＼の道具がまるで、年賀狀のスタムプ見たいに薄れて、存在が明らかでない上に、顏一面のあばたの方が又念入りに深くて大きく、澤山凹んでゐるので、更に一層人間の顏に遠い上に、何かの拍子に

立つたところを見ると、背は普通だが、肩が水平より高く怒つてゐて、おまけに着物の着方が思ひ切つて下手なものだから、見られた恰好ではないのである。唯一つ物の言ひ方が兵隊式を程よく加味したと思へる程、大和あたりには珍しくはき／＼してゐることである。もつとも、後で彼の話したところに依ると、やつぱり兵隊に行つてたとか言ふことで、日露戰爭に行つた話などを始めた。かと思ふと、文學の話なども始めて、大阪朝日に出てゐる夏目漱石の小說、はじめは難かしさうで讀まず嫌ひだつたが、なる程少し馴れて見ると面白い、此頃は毎日待ち兼ねて愛讀してゐる、それから、森鷗外といふ人がありますね、私は戰爭中ずつとあの人に附いてゐましたが。決して部下を叱らない、いゝ人でしたが、唯あんまり寢る時間が少ないのでね。あの人のは一寸椅子にもたれたまゝ、二時間か、どんな暇な時でも四時間でいいんですからね。私たちがつい寢坊して、あわてゝあの人の部屋に入つて行くと、もうちやんと机に向つて何かやつて居られるといふ鹽梅でしてね、などゝいふ話を、田舍では珍しいつもりだらう、こちこちのカツレツや、變な臭のするコロツケーなどを私に御馳走しながら、亦太郎は一種の

雄辯を以て語つたことである。

彼女はその間徹頭徹尾默つてゐたが、私と音取とが小說の話をしてゐた時、突然口を開いて「あんた、咲谷はんを御存知だつか？」と聞いた。

「咲谷半次郎ですか？」と聞き返すと、「さうだす、」と彼女は答へて、言ふには、「私と學校友達だしてな、あの人も小說が好きで、私と始終小說を貸したり貸されたりしましたわ、あの人、私の『金色夜叉』貸して上げたまゝになつてるわ、」と後の句は半分口の中で言つた。

「僕、」と私は彼女に言つた。「もう隨分長いこと、もう四年も咲谷君に會ひません、あなた時々今でもお會ひになりますか？」

「いえ、滅多に、」と彼女は答へた。

五

私はやつぱり東京の腐り文科は到頭落第したと見えて、どうも本當とは思へないが、一向友人から何とも電報も郵便も來ないのである。問ひ合はすのも剛腹だからそのまゝにして置いた。

そんな事より何より暑い日が暮れて、兩方から、暑い〳〵、とそれを口實に、わざと團扇をばた〳〵と使ひながら表の涼み床几のとこまで出て行つて、私は加代子と話し合ふのが、その頃のこの世の中での一番の樂みだつた。

私は今の旦那が嫌ひで嫌ひで仕樣がない、と彼女は私に助けてくれといふやうな表情をして言ふのである。私は、ぢやあ僕と一緒に世界の果までも逃げませうか、と心の内では滿々と思ひながらも、私も年の若いのにひねくれた男だ。辛抱なさいよ、私の叔母が私によく言ひました、人間といふ者は、誰でも、大臣でも、國會議員でも、子供の時分に思をかけた人と決して一緒になられた例はありません。思うた人と一緒になられるなんてことは、この世の中にはないことですよ、と始終お經の文句か何ぞのやうに僕に言つて聞かせてくれましたが、さうかも知れませんよ、あなたはまだ若いから、さうして不平をこぼすんですよ、と言つておいて、私は私自身が内心少し寂しくなつて來るものだから、お互ひに若いうちに考へることは、みんないゝ事ばかりですね、あなただつて、今に今の旦那様よりもつともつと縹緻の惡い人でも、(失

禮!)お金を澤山くれる人の方に付くことになりますよ、何よりもお金が好きになりますよ、などゝ先に言つたことを混ぜつ返したやうなことを言つたりした。

彼女は默つて溜息をつくのである。

「な、本當に近いうちに屹度一緒に旅行しましよな、」と又彼女は言ふのである。

「そんな事をしたら旦那様へ惡いでせう、」と私が心にもない忠告をすると、

「宜しおまんねて、宜しおまんねて、あんな人かまやしまへんわ、」と彼女は言つて、しかし一寸不安になるのか、「でもあなたのお母さんと一緒に行つたらかまやしまへんやろ、」と言つた。母が傍に居た時、その話を彼女は聞いて、「でも、加代子さん、姉さんに惡うおまつしやろ、」と言つた。

すると、彼女は、「いゝえ、姉は行たかてかまへん、と此間からさう言うてましたわ、」と言ふのである。

そこで、私たちは大阪に行つて、宿は堺の私の叔母の家にしよう、それ迄にも加代子は母と

一緒に大阪へ行つた時には、始終そこで泊つたのである。そして、大阪から和歌山や、須磨や明石やへ行かうといふことになつて、或日私たちは三人で高――町の驛から汽車に乘つたのである。

一つの客車を二つに仕切つて、その半分が二等室になつて居る汽車の中で、私たち三人切りだつた。汽車が驛を離れて動き出すと、加代子は私と母とに向つて、これが新婚旅行やつたらどないに嬉しいことだすやろに、な、と言つた。母は唯笑つて居たが、私は極りが惡かつたので、汽車の窓から首を突き出して、こゝからは生駒山は見えませんね、それから又反對の窓の方に行つて、こゝからは二子山が一つにしか見えませんね、あの塔の見えるのが、確か中將姫の當麻寺ですね、などと言つて、煙草に火を付けたものである。それから、汽車が大阪に着くと、三人で暑い中を天王寺の公園に行つたり、道頓堀のカフエーに寄つたり、芝居の前に來た時、明日は芝居を見に行きましよな、と加代子が發言したり、夕飯を食べにとある料理店に上つたり、そして日が暮れてから、電車で堺まで行つて、叔母の家に行つたのである。途々、私

は誰に遠慮する者もなく、夫婦のやうに加代子と並んで、向ふ五日か、七日か、十日かの樂しい日を色々と空想したものである。

一寸、こゝで讀者諸君に斷つておくが、元、私は閨房の描寫に餘り興味を持たないものであるが、この夜のことは少し書く方がよいのである。だが檢閲局や、編輯者や、方々の迷惑を思つて、それが出來ないのは、作者の心外とする所である。――兎に角、その夜は、殆ど夜の明ける迄私たちは寢ながら語り明かしたのであるが、これ迄の彼女の言行でも略々察しられる通り、加代子の方でその意を十分に示したに拘らず、私が例の流儀で、肝腎のところになると、飛んでもない方に話を反らして、例へば、あなたのために少々ならぬ錢を費やして居るところの、それではあの音取氏に私が濟まないとか、もしそんな事になると、私は愈々あなたと別れられなくなつて、今度はあなたが厭だと言つても、私があなたを命を懸けても連れ出すやうな氣になつて、さうなると女のあなたは屹度私を厭がつて、果は私を狂死させてしまふんだらうか、等々、私も實は十分その氣がありながら、わざと本意ない話をしてゐるうちに、憎ら

しや、鷄が鳴いて、夜が明けて、隣に寢て居た私の母が、寢呆け聲で、まあ、あんた方、まだ寢なかつたの、それともう目を醒ましたの、と聲をかけたので、事なきを得たのである。

で、その朝、私たちは太陽を頭の上に見た時分に目を醒ました。どうせ、お晝飯と一緒にして、それ迄に大濱の鹽湯へでも行つて來ませう、一寸待つて下さい、女の人が仕度をしてゐるうちに僕は一走り床屋に行つて髯を當つて來ます、と言つて、私は近所の床屋に出かけたのである。髯を當られながら、私は昨夜の彼女との寢物語のこと、その時彼女が自分の指から外して、私の小指に嵌めてくれた指輪のこと、私は一寸小指のその指輪を、床屋に掛けられた白い切の下で探つて見て、俺は何といふ仕合せ者だらう、と思はずほゝ笑んだものである。

私が散髮屋を出て、角を曲つて、叔母の家の前の通りを歩いて來ると、私の十歩ほど前を電報配達夫が右手に自轉車を引きずつて、軒別に一軒々々表札をのぞいて行くので、何といふことなく私ははつとして、わざとその配達夫を追越さずに、二三歩後からついて行くと、果して彼は叔母の家の前で止まつて、電報！と叫ぶので、私が後から追付いて、記名人を見ると、

加代子なのである。急用がある直ぐ歸れ、と云ふのである。念のために近所の魚屋の電話を借りて、加代子と母と私と三人がゝりで、高——町の「おかめ」に電話をかけて、加代子が電話口で何か色々言つてたやうであるが、浮かぬ顏をして電話を切つて、歸り途で母が何か頻りにぼそ〳〵と話してゐた。そして彼女は歸ることになつたのである。

私は當分叔母の家に止まることにして、母だけが加代子と一緒に歸ることになつたのを、私は堺の停車場まで送つて行つた。彼女は私に昨夜の指輪あなたに上げますと言つて、五分程してから、やつぱりそれはいけません、と取り上げて、又五分程すると、私に蟇口を見せてくれと言つて、私の蟇口を見る振をして、札を二三枚入れて私に渡したのである。そんな事をしちやあ、と私は二三度謝絶したが、無駄だと思つて、默つてとつておいた。そして結局私は彼女たちを堺から更に電車で天王寺まで送つて行つて、そこで別れることにした。彼女と母の乘つた汽車がピーと出發の笛を鳴らした時、私は彼女の顏を見をさめみたいな氣がして、思ひ切つてぢつと見詰めると、どうしたのか、彼女の顏の白粉が地圖のやうに散つてゐて、ひどく醜く

見えた。だが、ちつとも愛想が盡きないどころか、ゴーと汽車が動き出した時、兩方で目をくしや〳〵さして、泣けて來さうになつたので、さよなら、と私は大きな聲で言つて、勢よく背中を向けて歩き出した。すると、急に目の前の景色が濡れて見えて來たので、何でも無茶苦茶に町を歩いてやらうと思つて、直に堺には歸らないで、天王寺公園を斜めに突き拔けた。その途でふと思ひ出して、人氣のないところで、蟇口の中を開けて見たら、十何圓しか入つてなかつた私の蟇口が、ふくれて六十何圓になつてゐた。

六

母と加代子とから來た手紙に依ると、前者のは、隨分心配して歸つて見たが、大した事もなかつたので安心した。が、あの音取亦太郎といふ人は並々ならぬ嫉妬家だから、お前もそのつもりで用心するやうに、いづれそのうちにお目に掛つていろ〳〵、と言ふのである。後者のは色々御心配をかけて申譯ありませんでした。それよりも、何よりもあなたと御一緒に、あんなに樂んでゐた旅行の出來なかつたのが恨です。もう或ひは一生出來ないかと思ふと私は死に

たくなります。せめて、どうぞお忘れなく此後ともさい〳〵お手紙なりと下さいませ、と言ふのである。

そこで私は、せかれた水見たいに、隨分激しい、人が見たらさぞ背中がむづ〳〵するだらうと思へるやうな手紙を度々書いたものである。以前と違つて、今度は彼女が二度に私が三度以上の割合で、書き又書いた。すると、それから十日後のこと、當然來るべき筈の彼女の手紙がばつたり來なくなつて、大きに氣を腐らしてゐるところへ、急、と書いた母からの手紙が來たので、私は變に胸を轟かしながら封を開いた。私は殘念でたまりません、と彼女の手紙の第一行が始まつてゐるのである。掻い抓んで言ふと、私から加代子に宛てた手紙の一つを、どうした彼女の不注意からか、音取亦太郎に發見されたのが事の始まりなのださうである。亦太郎はその晩、私の手紙と、加代子の袖とを一緒に掴んで、母の家に血相を變へてやつて來て、大體あなたが年寄の癖に注意して下さらないから困る。自分は先日あなたが一緒で、加代子とあなたの息子と三人で大阪へ出かけたと聞いた時、餘程あなたに抗議を申し込まうと思つたが、辛

抱してゐた。ところが、この手紙はどうです、と言つて亦太郎は母の前に突きつけるやうに私の手紙を置いた。それでも母が默つてゐたので、彼は益々腹を立てゝ、封筒の中から手紙を引き出して、大きな聲で二三行讀み始めたと思ふと、急に聲が出なくなつて、再びそれを、今度は母の前へ打突けた。ところが元來一枚の紙のことだから、偶然に母が使つてゐた團扇の風にそれがあらぬ彼方へ吹き飛ばされてしまつたのを見て、あなたはどうしてくれます、この責任を？ と亦太郎は夢中になつて、扇子で疊を叩いてゐるうちに、母の膝を一寸打つたといふ次第である。私は殘念で堪りません、私はこの年になつて、他所の人に叩かれようとは思ひませんでした。どうぞ此後は一切加代子さんに手紙を出すことは止めて下さい。それから、若し間違があるといけないから、當分私のとこへ來ないで下さい。しかし、都合のよい事にはお前も今度は無事に學校を卒業してくれたのだから、この夏が濟んだら早々上京して、何處かに勤めでもして、一日も早く私を引取るやうにしておくれ。それ迄は、さう言つてもう幾月のことでもないのだから、用があつたら私の方から行くから、私の家へはもう來ない方がいゝだらう

と思ふ。さういふ事を長い〳〵手紙に書いて來たのである。私は咽喉がつまつたやうな氣がして讀んだ。しかし、考へて見ると、母も腹が立つだらうが、亦太郎の憤慨したのも無理はないのである。現に、加代子が呼び戻されてから、私は餘り始終彼女に宛てゝ郵便を出すのも、彼女の姉の思惑もあらうから、と思つて、二三度も母に宛てた手紙の中に、彼女に宛てた手紙を同封して、母に手紙の使を頼んだことさへあるのである。

その翌日だか、加代子からも簡單な手紙で、一寸差支へがあるから、當分手紙を下さらぬやうに、と言つて來た。かと思ふと、又二三日すると、同じ高——町の何とかいふ女名前を書いて、以後この人宛に手紙をくれ、この人は私の小さい時分の乳母だから、大丈夫である。で、手紙の表はこの人にやるやうな體裁で、この人の名前に樣を付けて、私の名前は書かないでくれ、と言つて來たりした。が、それも一週間程すると、やつぱり又危くなつたから、手紙はどんな方法でゞも當分下さるな、と言つて來た。

七

學校は落第する、女には失戀する、秋になつたら母親が養つてくれと言ふ。そんな事の心配がごちやごちやと、一度に夕立雲見たいに腹の中に湧上つて來ると、ぐつと咽喉が窒まつて來て、腹の中に塊を呑み込んだやうな氣になるのである。武男さん、何事も男子の心膽を練るのぢや、とこれは活動寫眞の「不如歸」の、辯士の聲色で覺えた片岡大將の言葉であるが、心持が少し苦しくなつて來ると、私は口の中で、この武男さん、何事も、をくり返したものである。が、さう手輕に心膽は練れないのである。

ぐづ／＼してゐるうちに、堺での日が十日も經つてしまふと、今度は今迄の年のやうに、九月と共に東京に歸つたところが、學校を卒業した筈の私に、親類の仕送りも來ないのだから、早速糊口の途を講じなければならぬ心配があるのである。その年になる迄、無論、その方の心配だけはした經驗のない私には、人は知らないが、自分にそんな能力があらうとは一寸想像が付かないのである。ありたけの智惠を絞つた結果、何ぞ外國の小說でも飜譯して、それを引つさげて上京して、それを賣つたら或ひはどうにかなるであらう、と言つて本當に賣れたら何だ

か夢見たいな話でもあるが、などゝ思ひながら、しかし、さうでも考へなければ心が安まらないので、或日叔母の家に別れを告げて、少し勉強して來ますと言つて、實は彼女の家はさう食ふに困る程の貧乏世帶でもないのだが、どうも人間がけちで居心地が惡いから、思ひ立つて、又大和の高――町で汽車を下りて、N――村の山目の家に一ケ月も居候しようとて、出かけた譯である。いつかの懷中の、膨脹した五十何圓は、二三日自暴で遊び廻つたり何かした結果、N――村に着いた時は又元の十何圓に逆戻りしてゐたのである。

その時、丸善から出鱈目に買つて行つたのはゲーテの「エルテルの悲み」とワイニンゲルの「性と性格」との二冊、無論英譯本である。一寸でも何にもせずにゐると、隙間を狙つて來るやうに浮世の青年の咽喉を窒まらせるやうな空氣が吹き込んで來るので、「エルテルの悲み」と「性と性格」を毎日大抵十五枚づゝ飜譯して、間違つてゐても何でもかまはないのだ、なるべく頭を考へる事に使はないで、紙の上に字を並べることに精を出した。私の境遇の時節柄、どちらの本もそれ／＼私の胸を叩くのである。飜譯をしない時には、山目の息子の半三郎と雑談をす

るのだつた。半三郎だつて私と僅三歳違ひだから、此頃は俳句の話の代りに、百姓は厭だ、商賣をしたい、何の商賣がいゝだらう、などとそんな話はかりするのである。何の商賣がいゝだらう、とは私の方から聞きたいことなのだ。半三郎の父は、私がさうして毎日英語の本を寫し取つてゐるのを見て、教育のある人は結構なもんやな、それでどの位儲かりまんね？　と聞くので、さういふ話が出ると、倘更こんな事をしてゐたつて、どこにこれを買ふ本屋があるものか、と突つゝかれるやうな氣がして私ば心細くなるのだが、そんな話止めて下さいとも言へないので、さうですな、一枚三十錢位ですと答へると、で、あんた一日に何枚位書きます？　と聞くので、三十枚ですと答へると、三十枚！　三十枚、三三が九、と九圓、へエ！　えらいもんだんな、三九二十七、へエ！　一ケ月に二百七十圓！　と半三郎の父は驚いて叫ぶのである私も内心驚いたものである。

母にはそつと私がN――村に來てゐることだけは知らしておいた。すると彼女からの返事にお前がこちらへ來てゐることを、誰言ふとなしに「おかめ」の人たちも知つてゐる樣子だから、私の方へは決して來ないやうになさい、一寸加代子さんにもその話をしたところが、加代子さんも誰からとなしにその事を聞いてゐたので、私に聞いて見ようと思つてゐたところだと言はれたので驚いた。と又その後の手紙に驚いた事には、加代子さんの旦那の、あの音取亦太郎さんの耳にも、お前がN――村へ來てゐるといふ事が聞えてゐるさうだ。聞くところに依ると、あの男は金の威光で高――町の町内の博奕打や、遊び人といふやうなものを買收して、もしお前がうか〳〵高――町へ來ようものなら見付け次第に袋叩きにさすと言つてゐるさうだ。決して決してこの町へ來てはいけませんよと言つて來た。その翌日には、久しぶりで加代子が手紙を寄越して、その後の無沙汰の詫から、世の中の思ふやうに行かぬ事を述べた後に、しかし、又よい時が來てお目に掛れるでせうからと要領を得たやうな得ないやうな手紙を寄越した。高――町は危いから、決してこの町へいらつしやらぬやうにくれ〴〵もお願ひ申します。

その後、一度母の方から私に會ひにN――村へやつて來た時の話に、夜分なら、お前も斯うして引込んでばかり居ても運動が足りなくて體に毒だらうから、夜分なら大丈夫だから、半三

郎さんとでも一緒に高——町へ行つて活動寫眞でも見に行つたらい〻だらうとの話だつた。又夜分なら、半三郎さんの顔はあの家でも誰も知らないから、高へ——來たついでに半三郎さんに私のとこへ使に來てもらつて、お前はあの公園にでも待つて〻くれたら、私がそこ迄會ひに行つてもい〻といふことであつた。

そこで、或日のことである。私は、別にさうする程の急ぎの用事を思ひ付いた譯でもないのだが、一度高——の町を見たく、あの暗い公園の夜も歩きたく、あそこから母のとこへ半三郎に使に行つてもらつたら、又どんなことで加代子に會へるかも知れないとも思つたので、半三郎を誘つて、夕方N——村を出たのである。金剛山と葛城山とを眞西に眺めながら、村の道を北に〱と進むのである。鎭守の森や、小さな川に架つた石橋や、ギツチヨンギツチヨンと音のする機を織る音や、どこの田舍も餘り變りのない景色の中を、畝傍山や天の香久山や、耳成山が順々に東の方に眺められる中を、一里半も行くと、道が少しづ〻上りになつて來て、見ると行手に三間以上も高くなつた土手が萬里の長城見たいにつゞいてゐるのが目に這入る。土手

は一ぱい櫟の木で蔽はれてゐるので、高低のない山脈の雛型のやうにも見えるのである。こ〻は葛城川の堤防なのである。川には水が流れてゐないが、なる程堤が高い筈で、この川に少し水が出て、溢れでもしようものならその邊の田舍は海になつてしまふだらう。その堤を上り切ると、忽ち目の下に、何とか紡績會社の可成り大きな赤煉瓦の煙突をまん中に突つ立てた、高——の町が見下ろされるのである。その時、

「半三郎さん」と私は言つた。「これでは、高——へ明るいうちに着きますから、こ〻で少し時間を過ごすことにして下さい、」と事情を知つてゐる半三郎に頼んだ。

そして私たちは堤の櫟林の草原の中に手巾を敷いて、高——の町の方を向いて蹲んだのである。日はもう山の向ふに隱れたのだが、あたりはまだ急に暮れさうにないのである。この邊の土地の癖で、その時分になると全ぐ風が死んでしまつて、櫟の葉一葉も、皆魔藥をかけられたやうに動かないのである。高——の町の紡績會社の煙突の煙さへ、する〱と梯子を上るやうに眞直に空に上るのである。空氣も赤蒸れて、變に靜まり返つてゐるのである。時々驛の邊で

汽車だけが鳴るのである。私たちの目の下に、一本の眞白な道が一筋、一直線に西に下りになつて、直角に北に曲つて、それが七八町もつゞいたところで西に通ずる本街道に接してゐる。本街道には影畫のやうに何人もの旅人や、幾臺もの車や馬や牛も通るのが見えるのだが、それ等がみんな妙に物靜かに見えるのである。それが高――町の東口に通じて居る。東口には絕えて久しく會はないが、鹽問屋の息子の咲谷重兵衛は達者だらうか？

凸凹した、流石に日暮に近いことだから、墨繪のやうにではあるが、高――の町もはつきりと、參謀本部の地圖見たいに、手に取るやうに見えるのである。所々に、他所の屋根よりも高く、例の大燈籠型の鐘樓も聳えてゐるのである。町を離れて、南の方に一叢繁つた森も見えるのである。それは高――の母の家にゐた時のある晩、夏の祭があつて、人込に押されながら彼女と加代子と私との三人で、參つておみくじなどを引いて喜んだ、鎭守の社のあるところだらう。それ等を、默つて、あたりには唯並んで坐つてゐる半三郎の息する氣配だけを感じながら、坐つて見て居ると、私は何だか自分の身の上が西洋の昔の小說見たいな氣がして來るのである。

あの町に私の戀人が居るのだが、あの町に私はうか〳〵と入つて行けないといふのである。私はセンチメンタルな氣に襲はれて、武者ぶるひをするのである。

やがて、ぽつ〳〵と附いて居る町の灯が、次第にくつきりとあざやかに見えて來たので「さあ、ぽつぽつ行きませうか、」と言つて私たちが立上つて、南に向ふ一直線の道を半分も行きかゝつた頃には、世界はすつかり暗くなつてゐた。

半三郎が私の使のために母のところへ行つてくれて居る間、私はぽつん〳〵と方々に、色ばかりで一向輝やいて見えない電燈や、赤い提灯や、池にボートの浮かんでゐるところの、高――町のまん中の暗い、人通りの多い公園の中を、なるべく人に顏を見られないやうに、盜人のやうに用心しながら歩いてゐたのである。それから、半三郎と諦し合せておいた、池の南の岸に、外の店から一軒だけ離れて簾掛けの店を張つてゐる、とある氷店の、板張りの床の上に置いた莫蓙の上に坐つて、眞暗な池の方ばかり眺めながら氷水を飲んだのである。一軒離れて立つてゐた代りに、その氷店は外のどれよりも大きくて、池に面して、五六尺の幅づゝ簾で仕切

つた部屋が幾つも並んでゐるのである。ふと氣が附くと、私がさうして、ぴよ〳〵の手摺にもたれて、ぼんやりと池の方を見ながら氷水を飲んでゐた時に、私の直隣の仕切に一人の男が這入つて來た樣子であつたが、その男も亦私同樣に氷サイダーか何かのコップを注文して、ちびり〳〵とそれを吸ふやうに飲みながら、手摺にもたれて池を眺めてゐるのである。それだけならいゝが、屢々彼は私の方を首を延ばして覗つてゐる樣子なので、私は大きに味氣が惡くなり出した。これがもし音取亦太郎の廻し者で、私が誰だかと覗つてゐる者なら、今に半三郎と私の母がやつて來て、間違ひなく私であることを確かめたら、どんな難に遭ふかも知れぬ、と思ふと氣が氣でないのである。けれども、その男は益々繁々と私の顏をのぞき込むやうにして、果は言葉をかけさうにするのである。私がその度毎に、はつとして、あらぬ方を向いてしまふものだから、その男は半分出しかけた言葉を呑み込んでしまふ樣子だつたが、到頭彼は
「失禮だつけど、」とはつきり聲をかけた。私がぎくつとしてその方を向くと、「あなたは——さんやおまへんか！」と私の名を呼びかけて、私が驚く間もなく、「私、咲谷重兵衞だす、」といふ

のを半分聞かないうちに、なる程、見ると、四年會はないうちに、すつかり大人になつた咲谷重兵衞が、昔ながらの狆くしやの、併し色の白い顏に微笑を湛へて言ふのである。
「あゝ、」咲谷君ですか、暫く、」と言つて私はほつと安心の息をついたのである。
「大分長いことこちらに御滯在のやうだんな、」と重兵衞は私の來てゐることを、人傳に聞いてゐたと見えて「一度お尋ねしようと思うてましたんだすが……。」
「近頃は如何です、俳句の方は？」と私が聞くと、
「いや、もうすつかり止めました、」
「ぢやあ、御商賣の方を？」と私が聞くと、
「相變らずでおます、」と言ふ彼の聲は妙に悄氣て聞えるのである。思ひなしか、時々溜息さへしてゐるやうに見えるのである。で、私たちは又暫く默つて、コップを鳴らして氷を啜つた。
すると又重兵衞が、
「私はどうぞして、東京へ行かうと思うてまんね、」と決心したやうに言ふのである。聞くと、

彼はやつぱり文學を專心にやりたいのらしく、で、近頃何か面白い本を讀んでゐますか？と私が聞くと、彼は又悄氣た聲で、いゝえ、ちつとも、と言ふのである。お家が嚴しくて讀めないんですか、と尋ねると、さうでもないのですが、と思はせぶりな事を言つて、そこで明らかに重兵衞は溜息をついたものである。その時、私は、私自身がさうなものだから、重兵衞は戀をしてゐるんだな、と察したのである。

彼は暫くすると、急に何か思ひ出したやうに歸り仕度をして、簾の仕切越しに、ぢや、失禮します、いづれ近いうちに伺ひます、N——村の方にお出でなはるんだすやろ？と聞くので、私はもう一週間ほどしたら、あそこを引上げて、それから堺の叔母の家に一週間ほどゐて、そして東京に歸るつもりだ、と答へると、重兵衞は堺の叔母の家の所を詳しく私から聞き取つて、そこ／＼に歸つて行つた。殆どそれと入れ違ひに半三郎が歸つて來て、お母さんは今夜當歳座へ活動寫眞を見に行きはりましたさうだすとの返事である。で、私たちもそつと當歳座へ行つて見ようといふことになつた。

八

こゝで、田町舍の夏の芝居小屋の、ごた／＼した觀覽席の、蒸し暑さ、汚さ、亂雜さに就いてくど／＼と記述することは省かう。私は半三郎の後から、鳥打帽を眞深に被つて、木戸を入つたところを右手に曲つて、一所木の襖の篏まつて居るところに身體を押付けて、恐る／＼場内を見渡したところが、唯汗臭い野蠻な人間たちがごちや／＼と、扇子をばたつかせながら入り込んでゐる中を、腕白小僧が彼方此方を飛び廻つてゐる光景の外、容易に母の姿が目付からないのだ。ふと見ると、右手の棧敷に、東京の私立大學の文科で同級だつた男、と言つても顏を知つてゐるだけで、私の方で輕蔑して物も言はなかつたところの、何でも大和の天理教から派遣されて勉強して居る人たちだと聞いてゐた男たちが、この町の者と見えて、二三人一かたまりになつて座を占めてゐるのを發見した。彼等は田舍者獨特の大きな聲を張り上げて、半覺えの東京言葉と大和言葉の調子で、愚にも付かない質問をしては教師や學生たちを笑はしてゐた者どもであつたが、恐らく私のやうに落第はしないで、目出度く卒業して、斯うして活動寫

眞を見に來てゐるのであらう。見てゐると、時々その中の一人が大きな聲を張り上げて、「早く始めえ――」などゝ勢よく怒鳴つてゐるのである。だが、私はそんなものには頓着なく、尚も仔細に場内を見廻したところが、左手の棧敷の、後から三番目の邊に、母の姿を認めたので、はツとして一度目を反らしたが、思ひ切つて、もう一度その方を見ると、母の直ぐ隣に派手な友禪の浴衣を着た加代子が坐つてゐるのである。私は一旦龜のやうに首を縮めて、又思ひ切つて、人の頭と頭の間から、もしや音取亦太郎も一緒ではないか、と展望すると、亦太郎の姿は見えないが、彼女等の連として、二三度見覺えのある、「おかめ」の、男自慢らしい、一寸役者の猿之助まがひの顔をした料理人が彼女等の後に、お供のやうにして來てゐた。

　私は半一郎にその事を告げて、わざ〳〵呼びに行くより、あなたの顔はあの中で私の母より外に知る者がないのだから、少し緩くりした歩調であの花道の所を歩いて見てくれないか、そしたら私の母が認めて、屹度事情を察してやつて來るに違ひないからと言ふと、彼は私の言葉通りにさうしたが一向母がそれを認めないので、彼は思ひ切つて棧敷の裏に廻つて、私の母を

呼び出した。そして私は母に會つて、別に急ぎの用でもないが、もう一週間ほどしたら、一度堺に出て、それから東京へ歸らうと思ふからといふことを話したら、母は、さう、ぢや、なるべくよくやつとくなはれ、と言つて人に見付かるといけないから、私、もう元の席に歸ります、身體を大事になさい、さよなら、と言つて、元の席に歸つて行つた。私たちは彼女とは反對の右側の棧敷の、一番後の隅にゐたのである。明りが屆かなくて、蚊が無數に攻めかゝつて來るのである。

　暫く、何だか「チヤツプリンの戀」とかいふ寫眞だつたが、そのチヤツプリンが化粧部屋のやうな所で、鏡におどけた顔を映して化粧してゐる光景を、ぼんやり見てゐた時、私の背中をつく者があるので、驚いて見返ると、母が來てゐたので、即座に立上ると、母は私の耳元で、あんたの來てることを加代子さんに話したら、一寸會ひたい、と言つて、あそこへ來るから、といふ知らせに、私は更に胸を早鐘のやうに打たしてゐると、入口の方からの道の曲り角に、加代子が現はれたのである。彼女はその時、何んな事を言つたのか、よく分らなかつたが、何で

も一別以後の挨拶を、極めて取亂した言葉で、切れ切れに俯向いて言つてゐたのだらう、私は唾を呑み込み呑み込み、極めて落着いたつもりで、ゆつくりとそれに應答してゐると、加代子は途端に一寸後を振返つたかと思ふと、あ、料理人が來ましたやうだすよつてに、失禮します又、と始終の間二分間程で、再び姿を消してしまつた。母も一寸呆氣に取られた形で、ぢや、さよなら、とこれ亦間の抜けた調子で發音して、加代子の後を追ふやうに姿を消してしまつた。

その時、突然半三郎が私の袖を引つ張つて、人に見られないやうに、胸の邊で私たちの前の方を指差しながら、あそこに、と私に耳打ちして言ふには、あそこに咲谷重兵衛が來てまつせ、と注意したので、見ると、私たちのところから、桝にすると四つばかり前の方に、なる程咲谷重兵衛が、丁度黑い蔽ひの掛けられた電燈の眞下に、一人ぽつねんと、一人も連がなさゝうな様子で坐つてゐるのである。だが、私の心の中は重兵衛が一人來てゐるなどゝいふ事件を取入れる餘裕などがなかつたので、私自身だつて、外の人が見たら重兵衛同様、如何にもぼんやりして見えたに違ない。そして私はそれから、ものゝ五分以上と活動寫眞を見てゐなかつた。半

三郎にもう一度母を木戸口まで呼び出してもらつて、そこで、ぢや、又當分お目に掛れませんから、さよなら、お大事に、と彼女に挨拶して、私は半三郎と一緒にせい〱する表の空氣の中に出て、それから二里の野道を、あゝ玉盃に花受けて、を二人で聲を合はして歌ひながらN——村をさして歸つて行つた。

九

N——村には、一ケ月と少しゐて、私は「ヱルテルの悲しみ」を全部と、「性と性格」を六分通りと飜譯して、それを携へて堺の叔母の家に行つて一週間ほど泊つてゐた。

その間のことであるが、或日突然そこへ咲谷重兵衛が尋ねて來て、彼と一日大濱の海岸へ行つたり、鹽湯に入つたりしたことがある。

その時の彼は又、もう當分東京には行かない、しかし文學は思ひ切つたのではない、といふやうなことを言つてゐた。あなたは、と私はその時言つた。不斷からさうかも知らないが、不斷をよく知らないから言へないが、妙にぼんやりして、何だか斯う胸に物思ひでもある風に見

えるが、どうかしてるのぢやないんですか、と私は彼と二人で鹽湯の家族風呂に入つてゐた時こんな事を聞いて見た。い〻え、別に何にも、とは答へたが、もう少し私たちが親密だつたら實は、と前置して、確に何か言ひたいことがあるやうに見えた。可笑しかつたことは、裸になつた彼を見て、氣が付くと、彼のお腹のまん中に極大の蛤程の大きさの物がくつ附いてゐるのだ。私は何かと思つたので、それどうしたんです？ と聞くと、彼はあわて〻それを手拭で隱すやうにして、これ、出臍です、と言つて恥かしさうにした。小柄なところへ、まるで女のやうに色が白くて、肉附がふく／＼してゐるので、顏こそ狆くしやだが、身體は餅のやうにむち／＼して愛くるしいのである。それだのに、あんな厭らしい出臍がくつ附いてゐて、誠に可哀さうである、と私は妙に可哀さうな氣がした。その夕方、彼は、これから大和へ歸ります、さよなら、お大事に、と私の心なしか、やつぱり哀れな表情をして、歸つて行つた。

＋

愈々、九月になつて、私が堺の叔母の家から上京しようとすると、暴風雨のために箱根を汽車が通らない、と新聞に出てゐるのである。その翌日の新聞によると、汽車の線路は當分復舊の見込が立たない、と報告してゐるのである、私の不安は益々ひどくなつて、最早やそれを制へるための飜譯も手につかないのである、何よりも先に困つたのはぐづ／＼してゐると、東京に行くだけの汽車賃がなくなりさうなことである。又新聞を見ると、江尻から汽船で横濱まで聯絡して、横濱から東京へ送る、でなければ箱根の、線路の駄目になつたとこを、二里半とか徒歩すれば聯絡する、と出てゐるので、私は心細々と叔母の家に別れて、梅田から汽車に乘つたのである。

此間咲谷重兵衞に會つた時、私が彼に飜譯の話をすると、重兵衞のいふには、或雜誌で見ましたが「エルテルの悲み」は何とか文學士の飜譯で九月上旬に新聲社から出るやうですよ、といふのだ。して見ると、私製の文學士にさへなり損ねた私の飜譯は、これ亦見事に落第した譯である。さうなると「性と性格」だつて、これは一寸人の知らない本だから、外にやつた人はないかも知れないが、それだけに一層本屋が相手にしてくれさうにはない、と思へるのであ

る。汽車は東京に向つて勢よく走るのだが、私の心は走らぬのである。

江尻で聯絡船に乘せられたが、三等旅客のことだから、いくら二千六百噸の船でも、豚小屋のやうな部屋の中につめられたので、暑くて辛抱が出來ないのである。私は許された甲板に出て、そこの帆綱だかを積んであつた、程よい山になつてゐるところへ頭を載せて、額に油汗を掻きながら寢てゐると、二十分も眠つたかと思はれる時分に、おい〳〵、と言つて誰かに起されたので。目を開くと、洋服を着た役人見たいな男が、寢呆けてゐる私に、こゝは通路ですから、こゝで眠つちやいけません、と言ふのである。もう私の周圍に四五人の人だかりがしてゐるのである。その中に、ふと私は洗ひさらした白絣の着物を着た友達を認めて、やあ、やあと兩方から聲をかけ合つた。山成といつて、中學時代の級友である。もつとも級友といふ名前だけで、彼は四年の時かに他所から轉校して來た、極く無口な男だつたので、殆ど言葉を交したことがない。目は間違なく明いてゐるのだが、そして別に人並はづれて小さいといふ譯でもないのだが、何となく盲目みたいな感じのする男なので、按摩といふ仇名が付いてゐた。が學問

は素晴らしく出來る男で、轉校して來るなりずつと一番をつゞけた、それで、ちつとも秀才らしく見えない男なのである。誰からとなく聞いたところによると、彼は或る家に養子に行つてゝ、そこから中學にやつて貰つてゐたのだが、中學を出ると間もなく養家を飛出した、仲仲惡い男である。その代り上の學校へ行けないのである、といふことだつた。或ひはさうかも知れない。私たちが中學を出てからもう四五年にもなるのに、今見る山成は依然として苦學生見たいな裝をして、曲つた鐵緣の眼鏡を掛けてゐるのである。

「やあ、隨分暫くだつたね、」と言ひ合つて、私たちは並んで船の欄干にもたれて話したのである。

「君は學校の方は？」と山成が聞くのである。

「今年出たよ、」と私は即座に嘘を吐いて、「君は中學を出てから？」と聞くと、

「僕は到頭今迄ぶら〳〵してゐたよ、」と彼は昔のまゝの按摩のやうな表情をして、「今度それで判檢事の試驗を受けに行くんだが……うむ、受けたら通るつもりだがね、」と仲々自信に充ちて

ゐるのである。無論、この男なら判檢事でも、大臣でも、試驗で濟むことなら通るだらう、と私は大きに彼を心に羨みながら、それに引きかへ、俺はこれから何うしたもんだらう、と思ひながら、ふと目を上げると、海の向ふに、如何にも暑さうに一塊の島が突つ立つてゐるのだ。

「あれは何處だらう?」と私が言ふと、

「大島ぢやないかね、」と山成はそんなことどうでもいゝと言つたやうに答へた。

成程、この男なら、加代子見たいなものが百人出て來たつて、びくともしないだらう、と突然私はそんなことを考へたのである。すると大島を見て居た私の目が泣けさうになつて來たのである。

十一

豫想以上に、それから東京へ行つてからの私の生活は散々なものであつた。無論、讀者は私の飜譯が賣れたとは思はないであらう。全くその通りなのである。やつと始めの月の月末は、或人の紹介で、その人の名前を借りて、武俠世界だつたかに、電氣鰻と馬の戰爭といふ課題を

與へられて、それを上野の圖書館で調べて書き上げた原稿料をもらつて、下宿料を半分拂つて見逃してもらつたが、その次の月末は、もう十日頃から心配で、だが何と手の出しやうもないのである。そこへ、突然、大和の國から母がやつて來て、その後、あの香取亦太郎が色々と惡い策略を講じて、私をあの町にゐさせないやうにして困つた。今迄なら、お前の修業中と思つて、何事でも出來ぬ辛抱をして來たが、もう〳〵勘忍がならなくなつたから、突然でお前も面喰ふだらうとは思つたが、出て來たやうな譯である、と目に涙を溜めて言はれて見ると、私も何と仕樣がないのである。

でも、母を抱えて、今迄のやうに便々と拂ふ見込の立たぬ下宿にもゐられないものだから、どうして、何處でそれだけの金をこしらへたのだか、今はもう忘れてしまつたが、そつと本郷の或町に家を借りて、母の荷物と母その者とをそこへ運んでおいて、自分もその翌日下宿を遁走したのである。だが、下宿の一ケ月半分くらゐ逃れたとて、それから後の一年か、十年か、それは何と遁走のしやうもないのである。と言つて、遁走しないで濟む方法も亦、見當が付か

ないのである。私の困り方は一と通りではないのである。母は、長い間苦勞して、當人も並々ならぬ修業だつたらう。七歳の年から二十四歳になる迄、ざつと十八年といふ長の年月の間、學校から學校に行きつゞけて、到頭大學校まで出たといふ子が、蟻だつて出來さうに見えるところの、一ケ月二十圓の錢さへ持つて歸らないのを、涙を目に溜めて、明け暮れ眺めたのに無理もないのである。私と母とは毎日餅つきのやうに、互ひに溜息をつき合つて日を送つたものである。

割合に私たちの氣持が愉快だつた時、母は時々高――町の加代子の話をするのである。彼女の話は私を慰めて明るくするのである。が、或時、その話が私の心を眞暗にした。その事情は斯うである。母が言ふには、加代子の旦那の音取亦太郎は、私のことがあつて以來、更に一層やきもち燒になつて、やれ「おかめ」に始終やつて來る何某といふ男が、加代子に氣があるとか、「おかめ」の料理人と加代子とが怪しいとか、高――町で何といふ男か知らないが、相當な家の息子が彼女に惚れてゐるとか、色々な憶測を逞しうして、果ては自分が來ない時、彼女を一人

家に寢さしておくのが危險だと言ひ出して、自ら私の母のところへ再三足を運んで、濟まないが夜寢る時だけは加代子の家へ泊りに行つてやつてくれないか、あなたの家には誰か私が「おかめ」の家の人に留守番を賴むから、と言ふのださうである。しかし、母は仲々それを聞かなかつたところが、その後加代子から、濟まないけど、と言つて、無論亦太郎に言ひ付けられたのだらうが、母に夜分だけ泊りに來てくれ、と再三賴むので、やつと母は承知して、亦太郎の來ない夜だけ、加代子のところに行つて、二階で加代子と隣同志で寢たのである。すると、或晩、誰か梯子段を上つて來た音がするので、默つて、息をこらして伺つてゐると、確に人が二階に上つて來た樣子なのである。で、思ひ切つて、母が枕元の消してあつた電燈をひねると、加代子の寢床の傍に、べつたりと蟇が這つたやうに、「おかめ」の男自慢の料理番が平太ばつてゐるのださうである。それから色々考へて見ると、加代子の性分として、毎晩母が多少の抗議をするにも拘らず、電燈を消して寢よう、と言つたことなど、その外いろ／＼腑に落ちないことが多い。それに始め、私との事のあつた時分、音取亦太郎が色々手を廻して、母のとこへ唄

や踊を習ひに來た者を邪魔をして來させぬやうにしたりしたこともある。そんなこんなで、私はもうあんな町にゐることが厭になつたので、思ひ切つて引き上げて、突然こちらへ來た次第である、と母は言ふのである。

何と世の中は私に樂くない事だらけなのである。

その頃の事である、或日、ひよつこり、私の、細々の煙さへ上げ兼ねてゐる家の玄關に、籠の手提を片手に提げた、咲谷重兵衛が立つたのである。

いつ來たんです？ と私が聞くのに、今着いたところだす、と答へる重兵衛の顏は、この前見た時より一層悲しげに見えるのである。まあ〳〵、お上りなさい、と言つて、上に通して聞くと、彼が言ふには、やつぱりどうしても商賣をやる氣になれないので、思ひ切つてやつて來た。では、お父さんやお母さんに斷らずにか、と私が聞くと、えゝ、と彼は俯向いて答へて、だが、そのうちに、國の方に、從兄弟が居るから、それに言つてやつて、母から內所で毎月少しづゝ位の仕送りをして貰ふつもりだす、といふのである。私にすれば、母と子二人が食ひ兼

ねてゐた最中ではあるが、どうせ食ひ兼ねるに變りはなからう、それに人一人私たちの暗い家庭に混つてくれると、それだけでも家の中に笑ひ聲と話し聲とが起る譯だから、と思つて、心よく彼に同居を許したのである。

その晩、元より餘分の部屋も、餘分の蒲團もない私たちの家のことであつたから、私は重兵衛と同じ蒲團の中で、枕を並べて、上向いて寢たのである。ところで重兵衛がいつまでも眠り入らない樣子であるから、私は慰め顏に、家を離れた當座は寂しいでせう、寢られませんか、と言ふと、いゝや、さういふ譯でもおまへんけど、と言つて、又そのまゝ重兵衛は默つてしまふのだが、やつぱり眠れない樣子なのだ。で、又暫くして、やつぱり眠れませんか、何にも考へないで、胸の中で一から百迄、それでも駄目なら千迄も數の勘定をなさい、と言ふと、えゝと彼は答へた切りで、又一寸の間默つてゐたが、やがて、

「――さん」と妙に改まつた語調で話しかけた、「――さん、さつき私はあんたに國からずつと來たやうに言ひましたが、あれは噓だす、實は、實は」と言ひ淀んで、「實は私、あなたも知つ

てなはるやろ、『おかめ』の家にゐるお紋といふ江戸ッ子の女子がゐましたやろ、あの女子と駈落をしましたんだす。私は家の金を四百圓ほど持ち出しましてな、そしてあいつの言ひなりに方々見物しながら、東京へ來ましてん。ところが……あんな悪い奴知りまへん、」と言つて、到頭二十一歳の咲谷重兵衛は天井を向いたまゝ泣き出したのである。そしてつゞけて言ふには、その女は、東京の者であるが、始め旅役者に惚れて、それに附いて大阪まで來るうちに、持物も持金もすつかりなくしてしまつた末、相手の男に振られてしまつたのださうである。そこで度胸を定めて、このまゝすご〳〵裸で東京に歸る譯には行かないから、東京へ行く途々お茶屋嫁ぎして、相當にして歸りたいと思つて、大和に來てあの「おかめ」にゐたのであるが、生憎悪い男に引つかゝつて困つてゐたところへ、丁度咲谷重兵衛を見出して、彼を下駄の代りにして、東京まで來て、東京の宿屋で錢がなくなつた時分に、彼から消えてしまつた、と斯う言ふのである。

それを聞いてゐるうちに、如何に私も悲しくなつて來たかといふことは、讀者も十分想像さ

れるであらう。いつか、私の仰向けに寢て睥んで居た天井も、涙で浮いて見えて來たのである。

私は三遍もいつそのこと、私自身の失戀の話をして、その相手が彼のと同じ「おかめ」の内の彼自身も子供の時本を貸し借りしたといふ、女性であるといふことを言つて、一緒に公然と泣き會はうと思つたが、三遍とも唇を噛んで、腹の中に收めてしまつたのである。

十二

そして、私たちが如何に散々に、唯錢がないといふだけの缺點で、その外には私たちは世間の人並に正直で、世間の人並に決して不逞な考なぞ毛頭抱かず、或ひは世間の人並よりぐつと寡慾で、謙遜であつたにも拘らず、來る日も來る日も、難儀な目に遭つて送つたか、それ等の記述は餘談に渡るから省くとして、何が餘談で、何が本筋か、と、讀者よ、月評家見たいに、眉を逆立てゝ下さるな、兎に角、私はその頃よく腹の蟲を殺して、頭を下げて、傳手を求めては、お伽話の原稿を引つ提げて、雜誌社を歷訪したものである。神樣も照覽あれ！　けれども大抵の所は意地悪らしい編輯者が多くて、原稿も碌に見ないで、返却されるのである。さうは

言ふものゝ、實は私の性分として、家の中ですることなら、書く事でも、飜譯する事でも、或ひは字を寫す事でも、それを人の二倍やれと言ひ付けられても、敢て苦痛とはしないが、外に出て、知らない鹿爪らしい人に會ひに行くことは、咽喉を締められる程苦しいので、滅多に行かなかつたものである。

たまに、そつと、と言ふのは、又賣れなかつたのか、又排斥されたのか、と母にしても、同居の嗅谷重兵衛にしても、さう思はれるのが辛いので、それで、そつと雜誌社の應接室に行くと、時とすると同じ部屋の中で、時とすると隣同志の部屋で、屢々同じ行動を取つてゐる嗅谷重兵衛に會つたものである。此間から重兵衛が何か頻りに書いてゐたやうだつたが、今日も彼が默つて出て行つたところを見ると、又俺の行き先で鉢合はせするんぢやないかな？ と思ひながら、行くと、果して彼と顔を合はして、或時は赤くなつたり、或時は相手を憎らしいと考へたり、或時は穴があつたら入つてしまひたいと思つたり、要するに、雜誌社から斷られた上に、二重の恥かしさを感じなければならぬのである。

或朝、時事新報の「時事案内」といふところを、重兵衛に見られぬやうに、用心してそつと見てゐると、筆耕一名募集、と見出しをして、飜譯物の寫し直しを頼みたし、芝區何々町何某とあるのを、私は手早く紙の切端に書き取つておいて、朝飯を濟ますと、決心して家を出たのである。目的地の電車の停留所で下りて、その近くの交番で道を聞くと、巡査が教へてくれたのはいゝが、有難う、と言つて去らうとすると、もし／＼、と呼び止めて、どうも、今日は朝からあなたのやうな書生さんが十人以上も、同じ家の名を言つて道を聞きましたが、何かあるのですか、と聞くので、えゝ、いや、一寸、と私は返事の代りにぴよこりとお辭儀してすたすたと歩き出した。背中で、巡査が、をかしいな、誰も譯を言はない、と獨言のやうに言つてゐるのが聞えて、私は火のやうに赤くなつたものである。そして、ぢやあ、やつぱり隨分もう應募があるのだな、と思つて、いつその事止めようか、と躊躇する心を鞭打ち鞭打ちして、尋ねる家の門をくゞつたところが、玄關の次の八疊の間に、車座になつてもう二十人位の人が集まつてゐるのである。その人たちは思ひ／＼に塊になつて話し合つてゐたが、私は入つた時に赤

くなつたまゝの顏を俯向けて、その上氣を冷ますために手を額に當てながら、隅の方で一人で俯向いてゐた。私が俯向いてゐる間に、後から又二三人もの新參者が入つて來たが、私は顏を上げなかつた。

三十分ほどして、私は漸う少しづゝ顏を上げて、あたりを盜見した時、心の中で十六人目を數へて見た人間の顏を見て、はつとした、咲谷重兵衛なのである。その時は私はこれ迄のやうに彼を憎らしいとも、私自身を恥かしいとも、何とも思ふ前に、限り知られず悲しくなつた。私はふら／＼と重兵衛の前に立つて行つて、目で挨拶した切りで、彼の傍に默つて坐つた。彼も目で答へた切りで無言でゐた。五分間もさうして二人は無言でゐた後、私はやつと、

「歸りには待ち合はしてゐて、一緒に歸りませうね」と言つた。

「えゝ、」と彼は口の中で言つてうなづいた。

私が先にそこの主人に呼び込まれて、簡單に私の經歷を問はれた後、主人が言ふには、自分は退職陸軍少佐であるが、目下參謀本部の飜譯をしてゐる。今度始まつた歐洲戰爭の、あちらの色々の雜誌や何かの記事を飜譯してゐるのであるが、それを淨書して貰ひたい。だが、中には秘密を要するものもあるので、なるべく人にその記事の話を洩らさないやうな人物が欲しいと言つて、退職少佐はぢつと私の人物を見通すやうに睥み付けてから、兎に角、この原稿を一枚寫して、その端にあなたの所と名前とを書いて行つてくれ、いづれ採否の程はこちらから通知するから、と言ふので、私は先から部屋の隅の机で、同じ應募者だらう、寫し物をしてゐる二三人の人の隣で、それを濟まして、下の間で重兵衛を待ち合はして、彼と一緒にその家を出たのである。

私と重兵衛とは何の目的もなく、唯、それから陰氣な私たちの家へ歸つたとて、それは、お互に鬼に口を縫はれでもしたやうに、むつゝりとして、歪んだ顏を向き合はせるばかりのことだから、それを恐れて、電車にも乘らずに、譯もなく無暗に歩いてゐたら、二人の足はいつの間にか芝浦の埋立地を踏んでゐた。

「大分疲れたから」と私が言つた、「こゝらで一寸一吹しませうか？」

そして、二人は鈍い色をした、海の方に向つて、程よい所に蹲んだ。私たちはぽつり〳〵と色々とこの世の中の決してさう愉快ではないことに就いて話し合つた。が、それもあんまり生生しい話し方でなく、それでは私たちの息が苦しくなるから、一種のお伽話のやうな情調を加味して、話したことである。

「僕の死んだ祖母はね、」と私は言つたのである。「彼女は偶然、一昨年の冬だつたか、N――村の山目の家へ僕の母を尋ねて行つた時に、僕が一緒に行つたのですがね、行く道から病氣になつて、山目の家へ着くなり寢込んでしまつたが、三日目にぽつくりと、折れるやうに亡くなつてしまひましたがね、その僕の祖母はね、常々口癖見たいに、それを堅く信じてゐるやうな口振りで、人間はこの世に樂をしに來たものぢやない、さう思つたら間違ひで、人間は生れる時苦しみ、生きながら苦み、死ぬ時に苦む。つまり苦しみにこの世に來たのである、この世は苦の世界ぢや、とさう言ひ〳〵しましたよ。僕はその祖母の、この世は苦の世界ぢや、といふ言葉を子供の時から子守唄見たいに聞きつゞけましたよ。僕の堺の叔母は又斯ういふのが口癖なんですよ、これは彼女自身にそんな經驗をしたのか、それは知りませんがね」と言つて、例の人は、男でも女でも、決して自分の思ふ人と添ひ遂げることは出來ない、さうちやんと出來ないやうに定められてゐる、といふ叔母の持論に就いて話したのである。

すると、何と思つたのか、咲谷重兵衛は、「ほんまに、その通りだすな、ハア――」と深い溜息をついて、そのおでこの顏に手を當てゝ俯向いてしまつた。

「思ひ當ることがありますか、」と私は冷かすやうに言つた「お紋さんのことでも又思出したんですか?」

が、重兵衛は暫らく私の言葉に返事をしないでゐたが、稍々あつて一寸聞きとれない程の聲で、「私のほんまに思うてゐる女子は別におまんね、」と言つたのである。

「あゝ、さうですか、」と私が割合に冷淡な返事をしたにも拘らず、彼は「聞いとくなはれ、今日こそあんたに聞いて貰ひまほ、」と言つて、つゞけた話に依ると、「それは私の這ひ歩いた時分からの、ほんまの幼な馴染の女子だんね」といふのは、彼の家のすぐ向

ひの家の、彼と同い年の女の子のことで、子供の時分から、よく彼と彼女とが仲よく遊んでゐると、外の子供たちか「男と女子と遊ばんもん」と言つて相手になり〳〵したものである。無論、その時分はお互に何の成心も持たなかつたが、彼が始めて彼女に戀を覺え始めたのは、彼が商業見習のために、一年間大阪の或商店の奉公に行つてゝ、歸つて來た十六の歳の時のことであつた。一年の間に、相手の女は見違へる程奇麗になつてゐた。夏の夕方のことで、彼女の家は貧乏で、碌に蚊遣りも燻べられないものだから、彼の方の、蚊くすべの十分行屆いてゐる涼みの床几のところへやつて來て、そこで二人は長い間、十一時か十二時までも、終ひに双方の親たちが叱りに來る迄、並んで腰かけて、色んな罪のあるやうな、ないやうな話をしたものである。それが、秋になると、彼女は姉の家の方へ引取られて行つた。「母親の家は、それはぼろ〳〵の家ですが、今でも私んとこの向ひにおます」と重兵衞はそこで一寸註釋して、無論相手の家は貧乏で、身分のよくない家だし、彼の方は代々相當に暮してゐる、相當の資産家なので、二十歳にもなつたら、彼は無論結婚が成立つものだ、と信じてゐた。ところが、相手の女の姉が急に金をこしらへて、といふのは今迄小さくやつてゐた料理屋が段々發展して、

「あんた、あんた、」とそこで重兵衞は到頭泣き出したのである。「あんた、その女子はあんたも御存知だす、その女子は、もつとも姉に勸められたんやろと思ひますが、あんた、妾にならはしたんや、……『おかめ』の娘のお加代だす……」と彼は切れ〳〵の言葉で言ふのであるが、私には一言々々が剃刀のやうにはつきり聞えたのである。私の目の前が忽ち眞暗になつて、品川沖のお臺場も何も消えてしまつた。

「ほんまにこの世は苦の世界だすな、」と重兵衞はまだ泣きしやくりながら言ふのである。

「さうですよ、」と私は漸くそれだけ口にした切りであつた。そして彼を慰めることも忘れて、半時間も默つて砂の上に目を落してゐたのである。

それから三日目だつたかに、或朝、咲谷重兵衞はどこかへ出て行つたまゝ、珍しく晝になつても歸つて來ない。今日は大分念入りに方々廻つてゐるんだな、今に歸つて來るだらう、と私

は何でもなく思つてゐたが、到頭夕方になつても彼の姿が見えなかつた。そこへ鉛筆で走り書きした彼の、途中よりとした葉書に、母へ取りなしを頼んでやつた從兄弟の方からは何のたよりも來ませんし、この上あなたに御迷惑をかけるにも忍びませんので、默つて出たのは幾重にもお詫します。今日、一寸日本社に行つて見ましたら、その前に私の持つて行つておきましたお伽話を採用してくれるといふ話でしたから、その原稿料を貰つて、夕方の汽車で一旦國に歸ります。私には、私の生れた町、高——がどうしても離れられません。お母樣によろしく、と言ふのである。

その同じ時の郵便が、外に二通あつて、一つは、實は私も、それは多分重兵衛とそこの應接室で會つた時だつたから、彼と一緒の日に日本社に預けておいたところの、私のお伽話の原稿を返送して來たものであつた。そしてもう一つは、N——村の山田半三郎が、今度愈々何の某女と結婚することになつて、明後日式を擧げる、といふ知らせの葉書なのである。

「阿母さん、咲谷君は今夜の汽車で急に高——へ歸る、といふ、今葉書を寄越しましたよ、」と

私は母に言つた。

「どうして、そんなに急に、」と母が驚いて言つた、「をかしな人だね、あの人も、默つて歸るなんて……」

「子供見たいな青年ですから、急に歸りたくなつたんでせう、」と私は言つてゐるうちに、私も變な泣蟲だ、急に鼻の上の邊がきゆうとして來たので、便所に飛び込んだのである。

—九・七—

片思

浪花の蘆は
片葉の蘆葉

――これは何の唄であるか？　私は知らない。又この言葉の前にどんな言葉があるのか、この言葉の後にどんな言葉があるのか、それともこれだけで、前にも後にも何の言葉もない、これだけの斷片のやうな唄の言葉であるのか？　私は何にも知らない。そして、唯私の知るところは、由來蘆の葉といふものは一本の莖を中心にして兩方に出てゐるものであるにも拘らず、所謂津の國の浪花の地方に生へてゐるそれ等には、片方ばかりにしか葉がない、その事を言つたものに違ひない、と言ふことだけである。

事實、私の知る限りでは、大阪の北の方、蘆の名所であると言はれてゐるところの、長柄でも十三でも、何處でもさうだらう。あの邊、俗に新淀川と呼ばれてゐる川原に行つて、さや〳〵と少しの風にも、所謂『蘆の葉は蘆の葉にゆすられて打顫ふ』ところの、蘆の叢に入つて蘆といふ蘆の葉を悉く調べて見たことがあるが、それが皆この『片葉の蘆』ばかりなのであ

る。——

浪花の蘆は
片葉の葉蘆

いつ頃の事か？　その時を審かにしない、が、兎に角、それは王城がまだ山城の京都にあつた頃の、これは物語に相違ない。……

いつもいつも、夜が來て、寢床に入ると、一緒に添寢する年取つた祖母は、つく〲と小さいお蝶の寢顔を眺めながら、彼女はもう年のせゐで直には寢付かれないからであらうが、それは毎晩屹度のことなのである、「お蝶や、お父樣のない子は一寸でも良くない事があると、あゝあれは父親のない子だからと後指を差される、祖母さん子だから、お母さん子だから、と何彼につけて人は嗤はうとするものだよ、お蝶、」と祖母は、晝の遊びに疲れて、うと〲と眠り入りさうになりながら、そして目は閉つてゐるのだが、確に自分の言葉を幼な心にしつかりと聞

いてゐるのを見て滿足しながら、つゞけて言ふのだ、「お蝶、だからお父樣のない子はとりわけ氣を付けないといけないよ。お前が惡いと他所の人はみんな、屹度あれは祖母さんやお母さんに育つたからだ、と直にさう言ふんだから……」と祖母は同じ事を同じやうな言葉で、毎晩毎晩同じやうに言ふのである。だが、そのうちに、小さいお蝶は閉つたまゝの目の、長いまつ毛の間に、ぢつと涙をにじました。それを見ると祖母は、あゝこの子の、この長いまつ毛の樣子から鼻筋の邊はまるで母親そのまゝだが、どうぞあの娘に氣質が似てくれないやうに、と心に祈りながら、又その閉つた目ににじむ涙を拭いてやりながら、何にもしらない、幼ない子を泣かして、濟まない、濟まない、と心で詫びながら、だが、何と言つても頑是ないもので、そのうちにお蝶は眠り入つてしまふのであつた。けれども、年取つた祖母の繰言は、誰に聞かれることなしに、やつぱりつゞくのであつた、「こんな可愛い子があるのに、この子の母親と言へばお邸の御用にかこつけて、親の私にも、娘のこの子にも、稀にしか顏を見せに歸つて來ないと言ふのは、何といふ心なのだらう？……」そして彼女は、すや〲と聞えぬ程のいびき聲を立

てゐるところの、小さいお蝶の寢顏の上に、長い長い溜息を吐きかけるのが常であつた。

だが、言ふ迄もなく、親が子を思ふ程に、子は親を思はないものに違ひなかつた。お蝶の母は、お蝶が三歳の時に、彼女の夫に死に別れると間もなく、大阪の町はづれの北を流れてゐるところの、大川の向ふ岸の或貴い身分の人のお邸に上つたのであつた。そして、そこでは、朝から晩まで綺麗な着物を身に纏うて、奉公とは言ひながら、面白い、氣樂な、華やかな日を送つてゐたのであつた。そこで彼女は年老いた母親のことも、彼女に預けて育てゝ貰つてゐる娘のお蝶のことさへも、どうかすると一日に一度も思ひ出さずに、毎日々々を暮したのであつた。

可成り富裕な、よい身分の家に生れたのであつたが、お蝶の祖母は入りかはり入りかはり押し寄せて來たところの不幸の應接に、その六十餘年の生涯を殆ど一日の樂しい日も知らずに、過ぎ去つて見れば六十餘年も一夜の夢のやうなものではあるが、その時その時にとつては一日が十年も百年ものやうな氣のする、長い浮世を送つたものであつた、――一寸した災難が元で

財産を殆ど失くしてしまふ、一人の男の子が家出してしまふ、一人の娘は嫁づいて間もなく後家になる、僅殘つてゐた金を人に貸したのがすつかりたふされる、――といふやうな、縱横無盡な不幸の横暴を祖母は追想し、ひいては今の身の上を考へて、まことに泣かない譯には行かなかつたのだらう、恨まない譯には行かなかつたのだらう。六十餘年、積もり積もつた悲しさ恨めしさを、彼女は夜毎に添寢するところの、幼ない、まだ頑是ないお蝶に、愚痴をこぼしこぼしゝて、僅に慰めたものに違ひなかつた。

だが、だん〴〵、年と共に物心のついて行くお蝶は、明らかにこの祖母の愚痴を嫌ふやうになつた。夕方になると、お蝶は夜寢てからの祖母の繰り言を想像しては、あゝ、今夜はどうかしてそれを聞かないで眠つてしまひたいものだ、と思ふやうになつた。だから、屢々彼女は祖母が一人で寢付くまで、自分は眠いのを辛抱して、わざと起きてゐたものだつた。そして一時間ばかりしてから、もう大丈夫だらうと思つて、おづ〳〵しながら、そつと祖母の寢床に忍び入るのであつた。そして、やつとのことで、今夜こそ彼女の目を醒まさずに寢床に入ることが

出來た、と安心して、靜かに寢入らうとすると、「あーあ、」と祖母が例の溜息まじりの欠伸をするのではツと胸を打たれるのが常であつた。そして「お蝶や、お前は本當に可哀さうな子だ、」と、もう日の暮から、否、晝から、朝から、彼女の顏を見る度にお蝶は心の中で聞いてゐた言葉を、祖母はつゞけて言ふのであつた。「お蝶や、お前は他所の子と違つて、こんな町の中で育つ子ぢやないんだが、なあ、お父樣が生きて居られたら……それに、どうしてお前のお母さんはあんなに介意ぬ人なんだらう?」と祖母の話は斯ういふ風に始まるのであつた。

お蝶は、終には、この祖母の愚痴を聞かされないやうにと色々な、幼い智惠を絞つたものだつた。他所で聞いて來た色々の珍しいと思はれる話、近所の遊び友達から敎はつたお伽話、などゝいふやうなものを、寢床に入つてから、逆さまに祖母を先に眠らさうと思つて、して聞かせたものである。

「あゝ、――あゝ、――あ、――」とそれを聞きながら、する祖母の返事が、だん〳〵間遠に少なくなつて行くのに、お蝶はそれに連れて次第に話聲を弱めながら、やがてすつかり祖母の

返事がなくなるのを待つて、ほツと安心の息を吐くのであつたが、やがて一二分すると、祖母はその間に一寸眠つたものなのか、それともやつぱり寢てはゐなかつたのか、「ね、可哀さうな子だ……お蝶よ、お前はあんまり悧好過ぎる……」と祖母の繰り言はこんな風に始まるのであつた。「お前のお父さんといふ人は、朝から晩までお酒を飲んで、その爲たうとう命を亡くしてしまつた。自分一人、死んで行く者はいゝが、後に殘された者が可哀さうでならぬ、せめてお母さんでもしつかりしてるといゝんだが、あの娘は女だてら行末のことも、自分の子のことも考へない、仕樣のない人間だから……」

そして祖母の話は終るところを知らなかつた。お蝶はもうほと〳〵聞き飽きて、又かと思つて、はては祖母が憎らしく思はれて來たものだ。それでも夜な夜な淚だけは盡きず流れて出たものだつた。終には、何が、どうしてそんなに可哀さうなのだらう? 祖母さんが勝手に私のことを可哀さうな子にしてしまふのではないか知ら? いつそ、これよりも本當にもつと可哀さうな子になつても、可哀さうだと言はれるよりは、その方が仕合せだ、と次第に年頃になつ

て行つたお蝶は思つたものであつた。そして、小さい彼女は、祖母のいふ、始末の悪い人間のいつも内にゐない母を慕つたものであつた。さうして、お蝶は十六になつたのであつた。

　けれども、お蝶が十六になつた年は、彼女の母は丁度四十になつたのであつた。母親の心は年をとると共に、子を思ふ心で一杯になつて來た。無論、今迄とても、可哀い、たつた一人のお蝶を忘れてゐた譯では決してある筈がないが、若い女心には、なるべく悲しい事や不仕合せなことは考へないやうにと努めて來たのであつた。が、それが、次第に人間世界の老の阪路にさし掛つて、四十歳の聲を聞くと共に、今はもうどうしても小さいお蝶のことを忘れられなくなつたのであつた。そして終にはお蝶を見ずに生きて行くことさへ辛抱が出來なくなつたものなのである。そこで、彼女はお蝶を自分の勤めてゐるお邸に一緒に奉公させようと思ひ立つたのであつた。そしたら、毎日可愛いお蝶を自分の傍に見て暮せる上に、彼女が年頃になつて嫁にやるにしても、このやうな立派な邸に勤めてゐたとあれば、父のないお蝶にとつてそれが立派な背景となつて、どんなにも良い家に嫁けよう、と斯う思つたことなのだ。

　お蝶は、ところが、この話を聞いて、あまり喜ばなかつたのである。彼女が祖母と共に住んでゐた町は大阪の南の方にあつたところの、色町の中にあつた。で、彼女の祖母の小さな家の近所には、その頃は多分白拍子とでも言つたものか、今で言ふ藝者や娼妓のやうなものや、或ひは若衆といつたやうなものもゐたことであらう。兎に角さういふ種類の人々が多く住んでゐて、唯一軒だけ、まるで田舍の百姓の家のやうに宵寢するところの彼女等の家が目に立つ程に、近所の家々では夜になると丁度朝が來たやうに華やかに、活氣立つたものであつた。幼ない頃お蝶は祖母の寢物語の繰言を聞きながら彼女の寢てゐる家の中はまるで丑滿頃のやうに陰氣で物悲しげであるのに比べて、家の外の浮き浮きした人々の話聲や、歩く足音などを、恰も牢屋の中から外の世界の消息を聞くやうな氣がしたものだ。そして羨ましくてならなかつたものだ。それが次第に憧れの氣持にさへ高まつて行つたものであつた。

　そのうちに彼女は段々と年頃になつて行つた譯であるが、さて彼女にお葉といふ、外のどの友達よりも、一番仲のよい友達が出來た。お葉は役者の娘であつた。お蝶は何彼につけて、そ

のお葉を見習つたものであつた。お葉が踊の稽古をすることから、唄の師匠に通ふことから、さては不斷家にゐる時でも木綿の着物を着ることを厭がるやうなこと迄を、何から何迄模倣したものであつた。ところが、今度そのお葉の父が京都の歌舞伎に出るとか言ふことで、二三ヶ月前に一家を上げて京都に越して行つた。しかし、お葉は京都へ行つてからも、お蝶に始終手紙でたよりを寄越し寄越しゝて、その町の美しさやら、人々の美しさやら、娘心の何よりも喜ぶことを、細々と書いて來たものであつた。——さう言ふ譯もあつたからだらう、お蝶は、その頃、もう隨分祖母の傍にゐることは飽き飽きしてゐたが、幼い頃にはそんなにも心から慕つた母のところではあるが、今は母のゐる窮屈な邸へ行くことをも、それよりも、お葉のゐる京都へ行きたくてならなかつた。京都へ行つて、そこでお葉と一緒に、やがてはお葉の父の關係してゐる芝居道にでも入つて、舞臺などに出て、華やかな踊など踊つて、やんやと大勢の人に賞められたいといふやうな、多くの娘たちが思ふやうな、だが夢に違ひない夢のやうなことを考へてゐたのであつた。

けれども、或日お蝶はたうとう母のゐるお邸に、彼女をそんなにも愛してゐる祖母も、彼女の出世の爲ならば、と賛成して、連れて行かれたのであつた。そして彼女は毎日々々浮かぬ顔をしては、そこのお邸の欄干にもたれて、すぐ目の下を流れる大川を眺め眺めたことであつた。その大川の川上に上つて行けば、あのお葉のゐる京都に行けるのだ、と當り前のことを色々に思ひ耽つたものだ。そして、年取つて、愈よ優しくなつた母にも、彼女はいつも素氣なく當り散らすのであつた。だが、母はもう幼い子供ではないわが娘を、生みの親とは言ひながら、さう頭ごなしに叱る譯にも行かないことであつた。だから『身體を生んでも、心まで生む譯には行かない』といふ諺などを思ひながら、娘のお蝶と並んで、彼女も亦欄干にもたれながら、夕方など、ぼんやりとして、いつ迄も、黯いて見廻すと自分たちの周圍が眞暗になつてゐる迄も、大川の流れを見て暮すやうなことが屢々になつた。

或時のことである。今は大阪の町に一人で寂しく暮してゐる祖母から母とお蝶とに宛てゝ、次のやうな意味の手紙が來たことがあつた。——

「私の嘗へやうのない寂しさを察しておくれ、この世の中に私の他依りにするのはお前たちだけだ。私ももう取る年波で（私はもう六十六だよ。）いつあの世の人となるかも計られない。お前たちは何と言つても御奉公の身の上だから、私はなるべく我儘を言はないやうにと隨分心がけてはゐるが、せめて老後の思出に、私の一生のお願ひだ。（私は幾度も幾度も躊躇した上で、やつと思ひ切つてこんな申出をするのだよ。）たとへ五日でも十日でも、長い間離れてゐたところの、緣薄くして、各々の長い一生の間に數へる程の日數しか同じ家根の下で寢たことがないところの、私たち親と子と孫と三人、それが他所樣の家であらうが厭ひはしない、同じ家で一緒に暮して見たい。……」

その後、お蝶の母がこの手紙の趣を、彼女等が奉公してゐるお邸の主人に話したところが、主人は大變情深い人だつたので、早速お蝶に祖母の機嫌を伺ひ旁四五日でも骨休みに大阪の家に歸つて、そして彼女を迎へて來て、十日でも一ケ月でも、彼女がゐたいといふだけ、いくらでも邸に止めておくやうに、との言葉であつた。

すると、お蝶にしては、祖母を迎へに行くといふ事よりも、それどころか彼女を迎へに行くことは氣に進まなかつたが、たとへ一日でも二日でも窮屈なお邸を離れて、又今は多少可愛がつて貰ふことが重荷に感じられるところの、母の傍にゐることから開放されて、氣樂な町に行けるといふことが嬉しいのであつた。だから、迎への爲に祖母の家に行きながら、さう聞いて子供のやうに祖母が喜んで、直にもお邸へ連れて行つてほしいと言ふのを、邪慳に聞き流してお蝶は出來るだけ派手な、美しい風姿をして、晝は友達の家を遊び廻つたり、夜は彼女等と一緒に芝居を見に行つたり、或ひは音曲の會を聞きに行つたりして、瞬くうちに、三日五日と日を消してしまつた。

さて、今迄は話の混雜を避けるために、祖母とお蝶の家のことを何にも書かなかつたが、それはお蝶にとつては彼女の叔父、即ち彼女の母の弟、祖母にとつては彼女の息子の家なのである。彼は商人で、而も一年中旅から旅へと呉服類を商つて歩くやうな類の商人だつたので、月のうちの五日以上と家にゐなかつた。殊にお蝶がずつと年の幼かつた頃、祖母が彼女に添寢し

て、くり返しくり返し愚痴を聞かしたのは、この叔父の留守の家でのことなのだ。が、今では叔父も月のうちに半分は家にゐる位の餘裕も出來、妻も娶り、その間に子も生れて、繁昌に暮してゐた。從つてお蝶の祖母も年取つてから樂な暮しが出來るやうになつた譯なのだが、さて子を思ふ親の心ほど不思議なものはないことだ。彼女は家の後取の息子が出世して、自分の身が安樂であるにつけても、嫁に行つて間もなく後家になつて、自ら好んでとは言ひながら、邸奉公をして、それも若い時は浮か浮かと暮したが、今四十の老の坂に達して、限りなく他依りなくなつたのか、今迄頑なかつたお蝶を自分の元に呼び寄せたところの、娘の心の中を思はない譯には行かないのだ。それと共に彼女の愛は息子や息子の子に對するのよりも二倍にも三倍にも娘や娘の子にそゝがれた次第なのである。

それは丁度正月の三ケ日が濟んだばかりの時分で、春といふ名ばかりの、一年中の一番寒い日頃のことだつた。その日お蝶は心には少しも進まないのだが、それ以上止む事を得ないので祖母を連れて母のゐるお邸に發たうと用意してゐたところへ、折惡く彼女の友達が、彼女がお

邸の方から歸つて來てゐると聞き傳へて、遊びに來たのであつた。やつぱり京都へ行つたお葉なども友達で、お樂と言つて商人の娘ではあるが、お蝶とは同じ唄の師匠の朋輩なのであつた。で、お蝶は母や祖母には始終機嫌の惡い顏をしてゐるだけ、それだけ友達弟子などには愛想よく接しるのが常だつたが、この時も久し振りに會つたことなので、いそ〳〵と迎へて、祖母との出發のことなどは度外視して、ゆつくりと腰を据ゑてお樂と話し込んでゐると、その部屋に祖母は年寄のことゝて、堪へ性もなく、泣きさうな顏をして入つて來て、友達などにはおかまひなく、

「お蝶や、どうするの、今日はもう行かないつもりなの？」と言つた。

「お客樣が見えてるのに、惡いぢやありませんか？」とお蝶は今迄お樂に對してゐた笑ひ顏をぐつと邪慳な顏に變へて、鋭い聲で叫んだ。そして疳癪まぎれに、「もう今日は止めます！」

「どうしたの？」と樣子を知らないお樂は吃驚したやうに聞いた。

「いゝえ、何でもないのよ、」とお蝶は友達の方には優しい調子で返事したものだ。

「……」そして祖母は何かまだ言ひたさうだつたが、何にも言はずに出て行つた。

それからも、お蝶は意地になつて、無理にもお樂を引止めたが、どうも話がはづまなくなつて、何となく妙にこじれたやうな氣持になつたまゝ、歸つて行くお樂に別れた。お樂が歸るとお蝶は急に、今迄堪へてゐた不機嫌を一時に顏に出して、疊を蹴るやうに歩いて祖母の部屋に入るなり、「祖母さんツたら、どうして、あんな、友達が久し振りで來てるとこへ來て……だから、お樂さんも屹度氣を惡くして歸つてしまつたんですわ。私はお樂さんに言ひ譯が立たない私は、私は……」と言つて、

「それでも……それでも……」と唯言ふことがなくて、おど／＼してゐる祖母を、惡い目をして睨みつけ睨みつけした。

すると、お蝶には叔母に當るところの、伯父の女房といふ人も、二人の仲に入つて、「な、お蝶さん、年寄のことだから、そこはあんたからお連の方に今度會つた時よく言つて置いたらいゝぢやありませんか。……さあ、機嫌を直して、……」と取りなした。

けれども、一度氣分のこじれたお蝶は、自分でももう機嫌を直したいと骨折つても、どうにもならなくなつて、長い間立つにも坐るにもぷり／＼して、そして時々子供のやうに悲しさうな顏をして悄氣てゐる祖母を睨みつけたものであつた。そのうちに段々時間が過ぎて、おまけに空模樣さへ惡くなつて來たのだつた。

「今日はもう止しませう、」とやがて祖母はがつかりしたやうに言つた。

「いゝえ、折角思ひ立つて、それに友達まで追歸したんですもの、行きませう！」とお蝶は意地を張つた。

「今日は大變寒いやうだし、それにどうやらお天氣も惡くなつて來たやうだから、明日に延ばした方がよかない？」と叔母も口を挾んだ。

「今日は止しませう、」と祖母はくり返した。

「いゝえ、行きませう、」とお蝶は後に引かなかつた。

そして、到頭お蝶は躊躇つてゐる祖母を追立てるやうにして、一度中止した支度の荷物など

を又大急ぎで纏めて、殆ど大阪の南の端から、その北のはづれの、大川の北の岸にあるところの母のゐるお邸に向つて、輿に乘つて出かけたところが、道を十町と行かないうちに、段々重苦しい灰色に沈んで行つた空から、ちらりほらりと雪が散り出した。やがてそれに冷たい北風が吹き添うた。それが急ぎ足に行く輿夫の、眞に一足每に雪と風とが激しくなつて行くものだから、大阪あたりの雪に馴れない彼等は一町行つては一度、又一町行つては一度と言ふ風に、人の家の軒の下に吹雪を避けては、「北風の中を、おまけにこの吹雪に吹かれながら行くんだから、全く目の前が眞暗になつて、一足も足が進まないんです。こんなひどい雪は十年この方ないなア。」と言つた程だつた。そして彼等はその逞しい顏を恨めしさうに空に向けた。全く輿の中にゐても、手足が凍えて、それが痛くなつて、終には何にも感じがなくなつてしまふ程だつた。若いお蝶がそれ程なのだから、年取つた祖母はもうこのまゝ死んでしまふのではないか、と思つたのも無理ではなかつた。彼女は絶えず口の中でお念佛を稱へてゐた。

やうやく彼等が大川の岸まで來た時は、日がもう暮れかゝつてゐた。のみならず、降り頻る

吹雪のために、どちらを眺めても、あたりは一面に灰を撒いたやうにぼんやりと薄暗くて、その大川の向ふ北の岸に、晴れた日ならば城のやうに聳立つて見えるところの、彼等の行先のお邸はおろか、目の前三間先も見えなかつた。無論、渡船などは止まつてゐた。で、仕方がないので、お蝶は輿夫をそこから歸して、祖母と一緒に川岸の、見る影もない粗末な商人宿に一夜を過ごすことにした。その晩は、お祖は、晝間からの不機嫌な顏を直さずに、身體が弱つて、他依りない顏をしてゐる祖母に碌々話しかけもせずに、その癖さういふ氣分でゐる事は彼女自身も辛くて堪らないのだが、直さうと思へば思ふ程益々苛々した氣分になるのをどうしようもなく、祖母と娘とは早くから別々に默つて床に就いて寢たことであつた。

「お孃樣、お孃樣!」とお蝶は夢の中から次第にはつきりと、それが夢ではなく、誰かゞ自分を、何か唯ならぬ事を知らせるやうに、不穩な調子で呼ぶ聲に、ふと目を醒ますと、枕元に宿の女中が、果して少し周章へた態度で坐つてゐるのを見出した。氣がつくと、もう窓の障子に

は、雨戸の隙間を通して、今日は晴天に違ひないと思はせるやうな色の、青白い朝の光を映してゐた。女中は彼女が漸く目を醒ましたのを見ると、「お嬢樣。」ともう一度呼びかけて、「あの祖母樣が、大變お身體の鹽梅が惡いやうでございますが、……直、彼方のお部屋へ入らしつて下さいませんか。」

さすがにお蝶はハツとして、急に胸騷ぎを感じて、飛び起きた。そして、そこ〳〵に寢間着を着更へて、祖母の部屋へ行つて見ると、祖母は、一見してお蝶にぐつと咽喉に何かの塊を呑み込ませたやうな感じを抱かせたところの恰好で、寢床の上に坐り直つて、ぐつたりと炬燵にもたれ掛つてゐた。わづか一夜のうちに祖母の顏は十年以上も病氣したやうに衰へてゐた、が、後になつて思ひ出して見た時の感じは兎に角、まさかに、まさかの事があつたら、とはお蝶は思はなかつた。

外戸は、次第に朝の空氣が明るくなつて來ると共に、空は滴るやうな青い色に晴れ渡つてゐた。それを見ると、昨日の日、昨夜見た景色が、まるで實際のことではなく、夢の中で見たやうな氣がしながら、だが、あれが皆夢であつてくれたらどんなによかつたらう、と思ひながらお蝶は一寸の間の祖母の介抱を宿の女中に頼んで、大急ぎで渡船を仕立てゝ、川一筋向ふのお邸に母を呼びに行つた。

……しかし、それから丁度三日目の夜の明け方に、哀れな母祖は汚い旅籠の一間に、しかしながら、望み通り彼女が最も愛する娘と孫とに見とられながら、靜かに目を閉ぢたのであつた。始めて、母がお蝶の迎ひを受けて、川向ふから祖母の病室に來た時、そして衰へた彼女の姿を見た時、彼女も亦はツと胸を打たれたが、まさか三日の後に病人が死なうとは思はなかつた。實際、どうかすると病人は可成り元氣になつて、折角こゝ迄來たのだから、せめて年頃彼女の娘（お蝶の母）が日を暮したところの、お邸に一時も早く行きたい、こんな汚い旅籠にゐるのは厭だ、川一筋向ふなのだから、船をあつらへてくれ、私は行きたい、などと言つた、かと思ふと、ひどく苦しがつて、もう私も今度は死ぬに違ひない。いや、しかし大阪の方へは知らさなくてもいゝ、お前たち（お蝶やお蝶の母）が傍にゐてくれたら、それで滿足だ。だが、此上

の望みには、途中で死んでもいゝから、やつぱりお前の年頃日を暮した、あのお邸のお前の部屋に行きたい。そこで死にたいなどと言つた。そんな風で、よくなるかと見えたり、又どうも今度は難かしいかナと思はせたり、容體の程は傍の者には、醫者にさへも一寸見當が付かなかつた。が、常々あんなに達者な人だつたから、屹度直るだらう、とお蝶の母も、お蝶もさう思ひたかつたし、又さう思つてゐた。が、三日目の夜の明け方に、大分長い間あまり病人が靜かなので、お蝶が「祖母樣。」と呼んで見た。返事がないので「祖母樣！」と呼んで見た、やつぱりないので「祖母樣、祖母樣、祖母樣！」とつゞけ樣に幾度も呼んで見た、けれども返事がなかつた。そしてそのまゝ祖母は永久に返事をしなかつたのである。死んだ人の枕元で、母は母お蝶はお蝶で、年頃の祖母の愛の十分の一も、百分の一も報いなかつたばかりでなく、それぞれ今にして思ひ返して見ると、不孝の罪を數多く重ねて來たことを考へて、何とも言へぬ暗い心持に沈んだことであつた。それに反して、祖母の死顔は、その生前に比べて、誠に晴々としてゐたことであつた。

だが、お蝶は何と言つても、まだ年も行かないし、從つていろ〳〵の盛んな希望に充ちてゐた。けれども彼女の母は既に老の阪にさし掛つて、今は行末には何の希望もなく、過去つた日の思ひ出を樂むことの方が多いやうな年頃であつた。だから、子を思ふ自分の心に比べて、自分を思つてくれた祖母の心を思はない譯には行かなかつた。で、大阪からお蝶の叔父やその他の親戚の人たちを呼んで、野邊の送りを濟まして、母はお蝶を連れてお邸に歸つて行つた。そして、今迄のやうに、見たところ變りなく勤めてはゐたが、心は鬱々として樂しまなかつた。彼女は、日と共に、さういふ母の心をも又川一つ此方まで來てゐながら、旅の宿屋で死んで行つた祖母の心をも、少しも察しる樣もないのみか、全く省ないかの如くに、いつもぼんやりとお邸の欄干にもたれて、何か別な自分の考へ事を考へてゐるらしいところの、お蝶の姿を見ると、母の心は益々味氣なくなるばかりであつた。

祖母の墓は、そこから程近くにある、同じ大川の岸の長柄といふ所に立てられた。で、母は三日目に一度は屹度お邸から暇を戴いては墓參に出かけた。が、お蝶は、いつ誘はれても、や

つと三度に一度か五度に一度位の外は、大抵行かなかつたものである。
そのうちに、春が過ぎてそして夏が來た。祖母が亡くなつてからといふものは、心ばかりでなく、身體も大變弱くなつたらしく思はれたお蝶の母は、或日のこと、突然お邸の廊下で、何かの用事をしてゐた最中に、ばつたりと倒れた。傍にゐた人たちが吃驚して、大勢で彼女の身體を彼女の部屋に擔ぎ込んだところが、漸く一度は呼吸を吹き返したやうだつたが、それからずつと囈言ばかり言ひつゞけて、倒れてからこれも三日目の夜の明け方に、到頭正氣に返らなかつたまゝで亡くなつてしまつたのであつた。
お蝶も、祖母に別れた時は悲しさうな顏はしてゐたが、一寸も泣かなかつたお蝶も、この時はひどく泣いた。眞に袂を絞らなければならない程泣いた。ところが、傍に見てゐる者が痛々しくて堪らない程、悲しみ死に死にはしないかと思はれた程、泣いて泣いて泣き頻りながら母の葬式を送つたことであつたが、日が經つと共に、恰も若者の病氣が快方に向ふ時のやうに、一日が一日とお蝶は元の狀態に戻つて行つた。何と言つてもお蝶はまだ年も行かず、從つて親

の心などを細かく考へてゐる暇がなかつたのである。丁度、折も折、母の死を悲しむお蝶の涙の乾きかゝつた時分から、偶然に、繁々と彼女に宛てゝ送られて來たところの、あの京都に行つてゐるお葉からの消息に、
「……そんな堅苦しい、日蔭者のやうなお邸奉公なぞして居られるよりは、あなた程の御縹緻の美しい、あなた程の藝のお出來になる方が、思ひ切つてお母樣に無理にもお願ひして、此地に入らしつたら、どんなにいゝだらう、と私のみならず父も母も申して居ります。……」とか、又お蝶の方から、今度祖母につゞいて又母の亡くなつた事を知らしてやると、お葉からは早速それに對して悔みの言葉を述べた後、「……やつぱりさういふ不幸な御運にお生れ遊ばしたのですから、不幸な御運は不幸な御運とあきらめて、あきらめられない處をあきらめて、この際思ひ切つて、日頃からのお望みをお遂げなすつたら如何でせうか。及ばずながら、それには父も母も屹度御力添へになりたいと申して居ります。私も姉妹が出來たつもりで、仲よく一緒にやりたいと思ひます。さうなれば、どんなに仕合せなことでせう……」といふやうな事が書いて

あつた。

　この手紙を見てからといふものは、もうお蝶は一刻もぢつとしてゐられないやうな氣に攻め立てられた。で、そこ〳〵に母の四十九日の法事を濟ませると、大阪の叔父にも誰にも相談しないで、お邸の主人には大阪の叔父の家に歸るやうに斷つておいて、彼女はその思ひ出の深い土地を後にして、大川をば三十石船に乘り、年頃慕うてゐる京都へとさして上つたのであつた。

　それは丁度秋のことであつた。川の道程は僅十里ほどではあるが、これ迄ゐたところでは朝に夕に東に眺めて來た生駒山が、何も別に不思議なことではないが、だん〳〵船の上るにつれて、それが終には眞南に、常々見馴れてゐたのとはすつかり變つた形で眺められた時には、彼女はさすがに長年住み馴れた川下の都、大阪の祖母の家のことや、幼かつた時のこと、さてはその川下のお邸のこと、或ひは又そのお邸とは川を隔てた岸なる長柄に、今は墓になつて並んでゐる祖母や母のことが、この時殆ど生れて始めてのやうに、沁々と彼女の胸をゑぐるやうに

思ひ出されて來たものであつた。その祖母はその一生涯の間に絶えぬ泉のやうに彼女の胸から溢らした愛に殆ど唯の一度も報いられたことなく、この川下の岸で母とお蝶とを思ひながら死んで行つた。又その母は如何にその娘の子のお蝶が不孝にしたからとて、子を思ふ心に少しも變りなく、夢のやうに死んで行つたことであつた。そして、そのお蝶は今その祖母と母との墓を見捨てゝ、住み馴れた土地を離れて、夢より外にない思ひに驅られながら、果敢ない旅を果敢ない旅とも思はずに、うか〳〵と行くのであつた。川は、ところどころ、遠くから見るとそれが草原かと見える程に、岸近くは言ふまでもなく、その中程までも一面に蘆に蔽はれてゐた。さういふ所は、自然水も淺いので、水路を選ぶのに骨が折れるものと見えて、舟の進みが極めて遲くなるのだ。そして船べりにはさら〳〵、さら〳〵と蘆の葉がすれて鳴るのだ。

　丁度お蝶等の乘つてゐた船が伏見に近づいた頃であつた。何分上りのことだから、船足が遲いので、お蝶は乘合の人々から一人離れて、船緣に腰かけて、何彼と來し方行末のことの物思ひに心を責められてゐた時のことであつた。それは東の白むのにはまだ大分間がある時のこと

で、船頭の言葉の通り、伏見に着いたら、丁度夜が明け放れる時刻になるのだらう。その邊は淀川筋でも一番川底の深い、水の潤澤なところで、名物の蘆は少ない代りに、半町おき位のところに、がら〳〵と陰氣な音を立てゝ、淀川の別の名物であるところの、水車が廻つてゐた。夜半から出た弦月が、薄白い色で秋の野山を照らしてゐたものだ。遠い兩岸の土手からは、絶え間なく、まるで草に雨が掛る音かと疑はれる程に、蟲の音が通つて來た。お蝶は、川上の京都のこと、お葉のこと、これからの自分の身の先を思ふと、心が踊るのだ、が、川下の大阪のこと、お邸のこと、死んだ人々のことを思ふと、心が沈むのだ。

その時！　何かの序にお蝶がふと立上つた拍子に、ギイギイといふ重苦しい舵の音と共に、急に船が方向を曲げた、その途端、不意のはづみを喰つて、か弱い女のことで、よろ〳〵としたかと思ふと、一度空しく一寸泳ぐやうな恰好をしたまゝで「あッ！」といふ鋭い叫び聲を殘して、大きな水音と共に、彼女の身體は川に呑まれてしまつたのであつた。

忽ち、船の中は大騷ぎになつた、が、夏のことなら、直樣誰か裸になつて川の中に飛び込みもしたらうが、更けた夜の夜中のことで、誰一人さういふ勇氣を出す者もなく、人々は唯あわてるばかりで、やれ、船を少し流して見ろとか、一度屹度浮くものだから、その時櫂の竿を延ばしてやれとか、口々に思ひ思ひの意見を述べたが、結局何にもならなかつた。四五丁ばかり船を川下に流して、人々は思ひ思ひの方向に川の面を見詰めたが、誰一人お蝶の姿を發見したものはなかつた。人々は、誰も彼女が過つて川に落ちたものとは思はなかつた。何か、屹度譯があつて死ぬつもりで飛び込んだのだらう。道理で、隨分前からあの船縁に腰かけて、思案に暮れたやうな顏をしてゐたとか、で、この川の一番深いとこへ來るのを待つてたんだとか、と噂し合つた。

けれども、仕樣がないので、船は一應伏見に急いで、そこに着いた時にはもうすつかり夜が明け放れて、東の山には既に朝らしい日が上り、西の空には月がまだ消えずにその姿を曝してゐたものだが、そこから改めて、新しく傳馬船などをくり出して、その日一日お蝶の死骸を探すことに骨折つたが、やつぱりそれが目付からなかつた。ところが、丁度又それから三日目の

夜明け方、川下の長柄の渡船守が、朝の一番の客を乗せるために、船を繋いでゐる場所にやつて來て、

「おや〳〵、昨夜は大分寒かつたと思つたら、初霜が下りたな、蘆の葉の上に……」と獨言ちながら、船を繋いだ綱を棒杭から解かうとした時に、

「あッ！」と言つて驚いた、その棒杭の下に、蘆と蘆との間に、滿潮の時に運んで來られたに違ひない、一箇の少女の死骸を見出したのである。

それは、言ふ迄もなくお蝶の死骸で、それの漂ひ付いた長柄といふところは、先にも言つたやうに、彼女の祖母と母とが墓を並べてゐる土地なのである。

浪花の蘆は
片葉の蘆葉

――そして、この物語は誰に、何時、何處で聞いたものか？　私は知らない、或ひは又いつ

となく、私の心がこの唄に依つて、こんな物語を編み出したものであるか、それも私は知らない。

だが、その後、いつだつたか、ある人の話に、浪花の片葉の蘆には或傳説がある。そして、その傳説の事件以前には、この川原には一本の蘆も生えてゐなかつた。その後生えたのがこの片葉の蘆である、といふ話を聞いたことがあるやうに思ふ。又それと同じ人だつたか、又別の人か、或ひは物の本で見たのか、この川原には昔から蘆が生えて居た。が、それは皆普通、他所にもあるやうな蘆だつたが、或時からそれが悉く片葉になつてしまつたのだ、とも聞いたやうに思ふ。して見ると、この物語はその人たちの誰かに聞いたものかとも一寸考へて見たが、よく考へて見るとその時に聞いたのは戀に關した傳説であつたかと思ふのだ。して見ると、やつぱり私がいつとなく唄の心をこんな拙い傳説に編み出したものに違ひない。讀者、幸ひに諒せられよ。

浪花の蘆は
片葉の蘆葉。

歸去來

一

此處に二三人の友達が集まつた時、四方山の話の末に第三者の噂が出たのである、「鶴丸退藏はどうしてゐるだらう？」「どうしてるかね、退藏の奴……」と鶴丸退藏の噂はそれ以上に發展しなかつた「乙骨三作に暫く會はないが、君は？」「會はないね、相變らず毎日本でも讀んでるんだらう、退屈なことだらうね、」「ところが、彼は退屈つてどんなものだか知らないと言つてるさうだよ、」「僕等から見ると怪物だね、」「ハハハハ、」「ハハハハ、」とそれで乙骨三作の噂も終るのである、「時に、島木島吉はどうしたか知ら？」「何でも男爵の家に家庭教師に住込んでるといふことだよ、」「拔け目のない男だから、又うまく人々を瞞着してゐるだらう、」と島木島吉の話もそれ切りで「土屋精一郎は……？」と次に誰かゞ言ひ出すと「よせ〳〵、俺は彼のことを考へると不愉快だから……」と土屋精一郎の噂は一言でもみ消されてしまつた。由來、人の名前なんて變なもので、それは元を正すと單に親や先祖が符牒の代りに附けたものに過ぎないのだが、一旦附けられて定つて見ると、最早や彼の顏と同じく拔きさしならぬものとなるので

ある。ところで、理屈は抜きにして、名前とその本體とが全然違つた功果を與へることがあるのをも諸君は知つてゐるだらう、例へば今の噂の土屋精一郎君の場合がそれである。彼の噂はいつでもこんなにひどくはなくても、大抵惡口で終始されるか、さうでなければ抹殺されるのが常なのである。それにも拘らず彼自身が人々の前に現れると、その圓轉滑脱な交際振りのために、人々は彼がそこにゐる間は大いに笑はされ、大に御馳走され、時の過ぎるのを忘れさせられる位なのである。ところで又無論その反對の人もあるのである。それは例へば私がこれから話さうとする厨戸朝生君の場合である。

「厨戸朝生、」と言ふと、彼を知つてゐる人なら、誰だつて輕い、快い笑の影を頬に浮かべるのである。それは何も輕蔑――幾分それが混つてゐないとは斷言出來ないが、しかし頭から輕蔑してゞはないのである。さうかと言つて非常に愉快になつて、無論笑ふ位だから可笑しさを感じるのは事實であるが、腹の底から愉快になつて笑ふと言ふ譯でもない。が、兎に角我々の友達の中でこの男に不快な感じを抱く者は一人だつてないことは確である。それでゐて本人に會つて見ると、話などが少しくど過ぎて、する事が馬鹿正直で、どうかすると幾分か愚に見えるやうなこともあつて、到底公衆の中に『これは自分の友達だ』と言つて手を取つて這入つて行けないやうなこともあるので、多少眉を顰める友達もあるのだが、離れて噂をする時はひどく人々に一種の快感を與へる、所謂人德見たいなものを持つてゐる男なのであつた。

一口に言ふと、砲兵のやうに體が大きくて、色が黑くて、そして吃音で、さういふ風格の人物にあり勝な極く善良なこの山梨縣生れの書學生は、從つてその物の考へ方も亦砲兵のやうに正直で、善良で、そして小心で、されば又臆病者でもあつたやうだ。砲兵と言ふと、彼は今から數年前に鄕里で中學校を卒業した後、一年餘りそこで小學校の代用敎員を勤めてから、やうやくの思で山梨縣から上京して來たところで、それから三ケ月目に東京で徵兵檢査を受けて、實際に砲兵にとられたのである。だから愈よ彼が長年の望であつた洋畫の研究を始めたのは、その三年間の砲兵の勤務を終つてからのことなのであつた。彼は兵役を濟ますと、早速小石川の繪畫研究所に這入つて、毎日兵隊であつた時のやうに勤勉に畫の稽古を勵んだものであるが、

這入つた日の翌日だつたか、早速外の學生に『砲兵』といふ綽名を附けられたものである。すると彼はその四角な、大きな顏の要所に附いてゐる、その六尺近い體の玄關であり、又主人であるところの、だが如何にもそれを支配し兼ねて見えるその小さな、光の鈍い目に善良な愛想笑を浮かべながら、「さうかな、や、や、やつぱり砲兵に見えるかな？　ちや、諸君、」と吃りながら言つて、突然直立不動の姿勢をとつて、「失敬、」と言つてその熊のやうな手で擧手の禮の恰好をしたものである。神よ、斯くの如き我々の正直な、無邪氣な友達に汝の廣大無邊な慈悲を垂れ給へ！

だが、神樣は何をうか〳〵として彼の日を暮してゐるのだらう？　彼が三年の間大砲や馬を友達にして國家への奉公を濟まして、愈よ長年の望の仕事を始めてから六年も經つのに、その間に彼は唯の一度だつて幸福どころか、その兄弟にも子分にも見舞はれたことはないのであつた。加ふるに、これだけは十二分に神樣から惠まれた健康な體を彼は牛馬のやうに鞭うつて、明けても暮れても畫をかいてゐたのであるが、それが又一寸も進歩しないのである。のみなら

ず、小心で、規丁面な性質の彼は、年を經るうちに幾分か馴れはしたが、放膽な、かと思ふと無茶苦茶に神經質な、だらしのない多くの美術學生たちに脅かされることが一方ならぬのである。例へば彼は研究所に行くのにいつも最寄の菓子屋でジャム附きの半斤の食麵麭を晝飯の代りに持つて行つて、小使の爺の出してくれる出鱈目の木の葉を煎じたやうな茶で十分滿足して、それを食ふのである。外の學生たちがどうかすると表のミルク・ホールに行くのに誘つても、彼は決してその仲間入をしないものだから、それだけの事で隨分と彼を輕蔑する者があるのである。今日は一つ別嬪のモデルが來た祝に親子丼をみんなで取つて食はうと彼等から勸められても、ところがさういふ種類の人間に限つて、おい、厨戸君、明日返すから一寸五拾錢貸してくれないか、と言つて、引奪るやうにもて借りて行つて、明日は愚か明後日になつても月末になつても返さないのである。そして催促すると輕蔑したやうに嗤ふのである。

始めは、なる程藝術などに心を込めようと言ふ者は、そんな風でなければいけないのかな、と正直な男だけに彼は眞面目に考へたものである。借りた金は返さず、約束などは屢々反古に

し、なるべく夜更かしをして、稽古を怠り、健康を害し、等、等と、言はゞ普通の人間の是とすると反對の事をしなければ、全く藝術家になる資格がないのかな？　俺は人に金を借りる事が嫌ひ、約束を違へるのは嫌ひ、どうも上達しないから躍鬼になつて稽古を勵む、健康は生れつきで此上なく達者だから夜眠れないやうな事は一年中に一度もない。俺はやつぱり藝術家を志願する資格がないのかな？」と厨戸朝生はまる三年の間幾度この考に惱まされたか知れない。「お、お、おれはやつぱり駄目かな？」と彼は持前の愛嬌のある吃り言葉で屡々言つたものである、「俺の繪はまづいな、俺が自分でまづいと思ふ位だからな、やつぱり君たちが見てもまづいだらうな？　どうだ、はつきり言つてくれ、厨戸朝生の繪は見込がないか？　俺の繪のどういふところが拙い？　どこがどうと言へない程、全體がいけないんだらうな？」

すると、腕白な、出鱈目な、彼の友達も、何と言つても、皆根は正直な者たちであるから、「まあさう言つたもんぢやないよ、」「珈琲でも飲みに行かうか？」「此間外國から歸つて來た岡部長四郎の展覽會を今日見て來たが、あんまり感心しないね、」などと色々と別の話に接ぎかへて

しまふのである。すると、どうかすると、「さうごまかすなよ、」と厨戸朝生はその善良な顔に寂しさうな笑顔を浮かべながら、吃音者らしい聲の調子で言ふのである、「はつきり言つてくれよ、佐々田四萬、君はどう思ふ？」などと弱い音の言葉でつゞけるのである、「さあ……」「ねえ、……」などと尋ねられた相手は困つたやうな笑ひを浮かべながら困つたやうな答をするのである、「やあ、困つたらうな、困るだらうな、失敬、々々。厨戸朝生は時々困つたことを言つて困らせるな……」と言つて、笑ひ聲の立たない笑ひ方をするのである。

大體、そんな風に、心が弱くて、柔順な男なのであるが、いつとなく彼は、如何に藝術家でも、やつぱり百姓や軍人と同じやうに、借りた金を返さないことや、約束を反古にすることや、健康を害することは、決して讃めるべきことではなく、惡いことに違ひない、と言ふ確信を抱くやうになつた。それには彼が小石川の研究所を、そこに二年餘り通つたのを止めて、その間に美術學校の入學試験を二度受けて落第して、又二年ばかりぶら〳〵と下宿住居をした後、つまり彼が繪畫の研究に身を委ねてから五年目の或秋のことだつたが、彼の同郷の先輩の畫家・

折谷市郎に會つたのが、重要な原因をなしてゐるのである。

厨戸朝生が如何に砲兵のやうに善良で、正直で、そして才分を惠まれなかつた畫家であるかといふことは、これ迄の話で大凡諸君も見たことであらうと思ふ。だが又彼が決して眞底から無考へな、愚な徹頭徹尾頭の惡い人物ではないといふことも併せて考られることだと思ふ。さて、今言つた或秋のことである。彼は或人から貰つた折谷市郎に宛てた紹介文を認めた名刺を持つて、町を歩いてゐたのである。折谷市郎といふと、彼が中學二三年の頃始めて、行く行くは畫家にならうと志を立てた時分に、既に同鄕の先輩として、町の文房具店などにも折谷市郎先生作と書いた袋に這入つた水彩畫の繪葉書に依つて、その名を覺えた人である。彼はその繪葉書を買つて來て、それを手本にしては一生懸命に習つたものだつた。畫の隅の方の、丸に市の字を英字のやうな恰好にくづした落欵さへ、彼には何と懷しく見えて、彼も亦自分の名の頭字の朝といふ字を、色々と苦心の末、先づ草書にして、改めて英字のやうな恰好にくづして、それを丸の中に入れて自分の幼い畫の落欵にしたことである。自分の畫が版になつて、そ

れが繪葉書に刷られて町に賣り出されるなんて、何といふ素晴らしい事であらう。それは無論山梨縣の或町だけではなく、東京はおろか、日本全國に廣がつてゐるのに違ひない、あゝ！と思つて、中學生の厨戸朝生は感激の時を久しうしたものであつた。やがて、大人になつて、東京の畫壇の消息にも一通り通じて見ると、何の事だ！ 彼が少年の頃あれ程崇拜してゐた畫家は寧ろ畫界の落伍者の一人で、今は漸く一部の畫界の歷史や消息に通じてゐる畫學生の仲間に、その名を辛うじて知られてゐるだけの不遇な老畫家に過ぎないことを知つた。彼等の言ふところに依ると、彼は年每の官營の展覽會に缺かさず出品はするのであるが、畫戸朝生が中學時代の頃にたつた一度入選した外、その頃例の水彩畫の繪葉書が出版されたのであらう、以來一度もその會場に陳列されたことはないとのことであつた。さういふ種類の畫家の數を數へたなら、濱の眞砂と盡きぬであらう。だが、さういふ事情に悉く通じた今になつて見ても、厨戸朝生にはやつぱり折谷市郎といふ名前だけは何となく懷しく聞えるのである。のみならず、丁度その年の秋の官展に市郎の畫が十何年振りに入選したのである。厨戸朝生は、彼自身も密か

に一枚出品して見たのであるが、無論それは落選したことだが、彼は市郎の當選を我事の樣に喜んだ。唯、困つたことには、やつぱりその頃のこと、さう大して裕福でない彼の故郷の家から、この秋限りもう仕送りは出來ないと脅して來てゐたことである。朝生は、そこで、若しその秋の官展に自分の繪が當選したら、そしたら何とか理屈がついて、仕送りもつゞけて貰へるだらうし、或ひは必しづゝでも繪の注文が來るかも知れない、と望ないこととは思ひながら望をかけてゐたのであるが、それがすつかり外れて見ると、今迄さへ僅な仕送りの金だつた爲に、一方ならず困つてゐたのに、一文も送られないとなると、人の七倍も小心で臆病な彼は、あらゆる疫病に對するよりも恐怖で眞蒼になつた次第である。そこで、彼はあらゆる傳手を求めて生活の資を得る道を探し始めた。そして彼は今或人から、偶然に折谷市郎は色んな内職をしてゐるから、その人に紹介して上けよう、と言はれて、紹介の名刺を貰つたやうな譯である。

芝の愛宕下町で電車を下りて、彼は尋ねる家を探すのに大方三十分も時間を費して、さて蜘蛛の巣のやうにごちや〳〵した裏町の、見すぼらしい格子造りの家の一つに、今となつても何

となく崇拜してゐる折谷市郎の名を見出した時には、何とも言へぬ幻滅の感じに襲はれた。當年の水彩畫の繪葉會の落款に、丸の市の字を歐字風にくづした面影はどこにもなくて、貧弱な名刺に、而もその左の隅には前にゐた住所でも刷り込んであるものと見えて、墨で一筋に消した跡があるのを、入口の頭の上に張り付けてあるのである。それでも厨戸朝生は先輩の名家に會ふ時の臆病さで、吃音者特有の不鮮明な發音で、「御免下さい、」と呼ぶと、「はい、」と案外近くに答へる男の聲がして、あ、あれが折谷市郎だな、と思ふ間もなく、がらりと玄關の破れた障子が開いて、背のひよろ高い、青黑い色の顏が可成り右の方に傾いて首の座に乘つてゐる、目尻の下つた、しかし何處となく美術家らしい男が現れたが、訪問者を見ると訝しさうに「どなたです？」と言つた。

「わ、わ、わ、わ、私、」とさういふ場合には不斷は大抵おさまつてゐる吃りが必ず出るのであるが、今も案の上そんな風に眞赤になつて吃りながら、厨戸朝生は「私はこ、こ、こんな者です、」と紹介文を認めた名刺を出したのである。

早速、玄關の二疊の間を通り越してがらんとして、何一つ道具らしいものが置いてないので、廣々として見える六疊の、しかし石版刷りのビラ畫のやうなものや、畫稿の反古のやうなもので足の踏所もない程散らかつてゐる奥の間に通されたが、やがて相手が吃音ではないが、朝生にも匹敵する程の不明瞭な發音の言葉で、問はず語りに始めた話に依ると、「君は體が丈夫さうですね、羨しいですね。」と言ふのを冒頭に、藝術家は普通以上に體が丈夫でなければならない、そして十分に養生しなければいけない、自分なぞは青年の頃、所謂若氣の至りで、不養生を自慢にしたり、體を何處か惡くしないと、餘りぴん／＼してゐると鈍才に思はれるやうな氣がしてわざと胃を破したり、心臟を惡くしようと言ふので生醬油を飲んで走つたり、「そのお陰で僕は到頭心臟が持病になつてしまひましたよ。」或ひは又或期間少しばかり金が豐富に這入つたことがあつたが、貯金することが藝術家の値打を下げるやうな氣がして、却つてその後金のために看板繪をかいたり、斯うして到頭團扇の繪や廣告のビラ繪かきになつてしまひました、等、等、と彼の說くところ、聲は小さくて不鮮明だが、一句一句悉く厨戸朝生を感動させるに十分であつた。

「一寸、失敬します、お茶でも入れませう。」と言つて折谷市郎は話半ばに立ち上つて、どうぞおかまひなくと挨拶する朝生にかまはず、唐紙一重の隣室へ這入つて行つた。その後をふと見送つた朝生の目に、そこにも亦何一つ道具らしい道具の置いてないところの、三疊敷の茶の間のぼろ／＼に剝けた壁の傍に、八歲と六歲位の乞食娘のやうな二人の子供が、小鳥の樣にくつ附き合つて、膝の上に手を置いて並んで坐つてゐるのが認められた。

「お、お、お子さんたちですか？」と暫くして貧しい茶器を持つて這入つて來た市郎に、朝生が斯う吃りながら聞くと、

「え〻。」と市郎は無表情な顔で答へた。「家内がゐないものですからね。」

「亡くなられたんですか？」と聞くと、

「え〻。」と相手は相變らず他所の人のことのやうに、「一昨年亡くなりました。……仲々手が掛つて厄介ですよ。」

さういふ風にして、朝生は二時間餘り邪魔をしてゐた後、歸りがけに漸く思ひ切つて、「實は、お、お、お願に上つたのですが……」と前置して、廻りくどい言葉で自分が今月限り國から仕送りを斷たれたこと、だから決して澤山の金は望まないが、出來るだけ切り詰めて暮して行かれるだけの、生活費を得たい、自分に出來るやうな何か仕事がないでせうか？　と中腰になつて切り出した。

「さうですね、」と折谷市郎は案外、まるで親類の者の身の上をでも案ずるやうに、その瘠せた兩腕を組み合はして、その中に山羊のやうなしよぼ〳〵の頤髯を埋めるやうに頭を垂れて、もう一度「さうですね、」と言つてから一寸顏を上げて朝生の方を見ながら、「畫の外に何か習ひ覺えたものはないんでせうね、例へば簿記とか、保險〻勸誘とか？……」と言つて、彼は相手の大きな、善良らしいが、又如何にも鈍才らしい、光の鈍い目の色なり、吃音者らしい訥辯に氣が附くと、急に今言つた言葉を取消すやうに、さうですねえ、と再び組んだ腕の中に頤を突つ込んで、仔細らしく數分の間考へ込んでゐたが、ふと何か思ひ付いたのか、急に立ち上つて、朝生の坐つてゐる後の押入の中をごそ〳〵搔き廻した後、何やら大形の紙を二三十枚亂雜に卷いたのを持出して來て、「いやな仕事で、つまらなくて、而も報酬がお話にならない程少ないのですが……」と言ひながら朝生の前にその紙をひろげた。見るとそれは三尺幅くらゐの大型の軸物にする石版繪らしく、上の方に『教育勅語圖解』として、その下一面に勅語の趣旨を組んだ樣々の場面が黑一色で繪解きしてあるものである。仕事といふのは、それを四色位の色を使つて彩色することなのである、「つまり石版屋の仕事より安く人間の肉筆を利用しよう、といふのです。一枚に就いて三錢なんですが、」と言つて、市郎はてれ隱しのやうに立上つて次の間へ急須の湯を入れに行つた。

「まあ、お暇ならもつと遊んで入らつしやい、」とやがて元の座に歸つて來た折谷市郎は言つた。

結局、朝生は、それでもかまはないから、試みにやらして貰はうと言ふことに定めて、それから二人で彼等が專門にやりたいと志してゐる油畫に就いて話し合つた。

「その日その日の食に困つて來たり、妻が病氣をしたり、子供が生れたりしたら、繪もくそも

なくなりますよ、」と市郎は蠅のやうな訥辯で話し出した。「さうなつたら、下駄の齒入れでも、燒芋屋でも何でもかまはない、食つて行ける仕事がしたいと思ひますよ。それや、千人に一人萬人に一人といふやうな天才は別でせうがね。それでゐて、一寸でも時間が餘つたり、一週間でも食べ物の餘裕が出來たりすると、又いつの間にか何か眞面目な繪を一つかいて見たいといふ考がむく／＼と頭を持上げて來ますね、不思議なもんですね、藝術といふ奴は惡魔のやうなものですね。君はさうは思ひませんか？　藝術は長くて、人生は短いと言ひますね、しかしそれは千人に一人、萬人に一人の藝術のことですよ。我々にとつては藝術は長いも短いもない、影と言ひますか、蜃氣樓と言ひますか、幻影といひますか、誠に果敢ないものに相違ないんですよ。ところで、人生は、人生はどうでせう？　我々にとつて人生は餘り長いとは思ひませんか。厨戸君？………」

別れる時、市郎は朝生に、「その仕事は、その勅語圖解の彩色は、無論僕が言はなくても、すぐ厭になつて止めたくなるでせうが、僕の口からこんな事を言ふのは厭ですが、仕事としては、

口過ぎの仕事としては、書記でも、巡査でもいいから、さういふ何でも自分の專門外の仕事をやることを心掛けた方がいゝと思ひますが………」と言つた。

「は、」と朝生は吃り出すと無暗にお辭儀ばかりして、もつと外に色々言はうと思つたこともあつたが、咄嗟のことで、生憎一言も發音がうまく行かないので、「わ、わ、わかりました、さよなら、」と言つて外に出たのである。

二

その翌年の春のことであるが、厨戸朝生は折谷市郎の紹介で、もつとも始めのうちは見習生といふ格で、遞信省の通信事務員といふものになつて、市郎の近くの芝區南佐久間町の紙箱屋の二階を借りて、そこから毎日通勤してゐた。彼は毎朝六時半に起きて他所行きにも不斷着にも、何せよ一枚しかない着物に、研究所時代からの小倉の袴を穿いて、出勤の途中飯屋に寄つて簡單な朝飯を濟まして、それから研究所時代からお馴染の、辨當代りに、ジャム附の半斤の食麵麭を買つて行くのである。そして歸りには又朝の時の飯屋に寄つて、なるべく安くて澤山

の量のある夕飯を食つてから箱屋の二階に歸るのだが、それからは別に小說本が好きといふではなし、と言つて時々折谷から受けて來る內職の畫の仕事をする氣にもならず、五燭の電燈の下で每晩ぽかんと坐つてゐるのであるが、此頃頓に何とこの善良な『砲兵』にも世の中が味氣なく見えて堪らぬのである。そこで、二日に上げず折谷のところへ出かけて行くのだが、いつ行つても彼はおんなじ顏をして、或時は燒畫の道具を以て文房具の木箱のやうな物に畫をかいてゐたり、團扇の下圖のやうなものをかいてゐたり、稀に子供雜誌の挿畫のやうなものをかいてゐたり、終には朝生が行つても、仕事の手を止めないで、唯時々ぽつり〳〵と餘り興の乘らぬ話をし合つて、そして結局二時間なり三時間なり、その間お互ひに默り合つてゐる方が多い時を潰すのであつた。だが、朝生は人並外れて子供が好きで、子供も亦彼に馴付くものだから終には市郎を訪問すると、先づ子供と一二時間遊んで、子供たちが寢てしまつてから市郎とぽつり〳〵と會話をして、そして遲くなつて箱屋の二階に歸るのである。十時になると箱屋の家族は皆寢てゐるのである。玄關の間に二人の小僧が寢てゐるのである。そ　蒲團の隅つこを恐る恐る踏んで、彼は忍ぶやうに自分の部屋に上るのであつた。便所に行くには主人たちの寢てゐるところを通らねばならぬので、彼は大抵[illegible]に這入る前に、いつも定つて、『苦は樂の種、仁丹格言』といふ廣告の貼つてある電信棒に小便をするのが常であつた。

だが、七日七日には麗らかな日曜が廻つて來るのである。櫻の花も咲くのである。すると、この砲兵のやうな。六尺近い大男の厨戸朝生の總身の血も春と共に温まつて見えるのである。彼等が步いて通る地面の上には、麗らかな日光を受けて、その赤い日傘や友禪の着物の色までが影と共に落ちて染まるかと思はれるやうな、派手な姿をした若い女や娘たちも町に見られるのである。春といふものはどんな靜かな室內に坐つてゐても、紅白の幟幕に取圍まれて、どこからともなく天地の奧から鼓の音が聞えるやうな氣がするものである。厨戸朝生もさういふ日曜の午後には、何の用事がなくてもそゝられるやうに町を步くのである。やつぱり俺は明日から一生懸命に畫をかかう、と彼は步きながら思ひ立つのである。たとへ三度の飯を二度にしても畫具を買つて、カンヴスを買つて、一生懸命にやらう、俺だつてやれないことはあるまい、

乙とは宇野浩二

いつ迄俺だつてこの儘で通信事務員をしてゐられるものか、俺も早く嘗て研究所時代の同窓だつた、せめて乙骨三作位に人に名前を知られるやうにならう。そしたら國の父や兄も俺を認めて、老いたる母は俺の爲によい嫁を探してくれて、月々相當な仕送りをしてくれて、そのうちに追々と俺の畫の注文をする者も出來てくるだらう……だが、そんな者があるだらうか？　乙骨三作は大分うまいからな、俺なぞ迚も及ばないだらうな？……いや〳〵、何でもかまわない、是非明日から一生懸命にやらう、と厨戸朝生はから〳〵と、足の脊の黒く染み込んだ日和下駄を鳴らしながら、春の町を興奮しながら歩くのである。

　すると、通信事務員の見習生を卒業しないうちに、厨戸朝生は次第に現在の職が厭で堪らなくなつて來て、去年の秋以來めつきり親しくなつた折谷市郎のところに毎晩出かけて行つては勤の愚痴をこぼすやうになつた。愚痴をこぼす時、この男は吃音にも拘らず、小唄をうたふやうに雄辯になるのである。「僕はどうしても畫をやらうと思ふんです。折谷さん、僕がこれから畫をやつても、どうしても駄目でせうか、僕の畫には見込がありませんか？」

「まあ……ねえ……」と市郎は困つたやうな、どちら付かずの返事をして、「僕ももうぼつ〳〵、僕なんぞ暇がないのだから、間際になつてもその時の都合で畫けるか畫けないか分りませんから、今から官展の用意をしようと思つてるんです、今年は一つ人物を畫かうと思ふんです、一寸いゝモデルが見付かつたんですよ。いゝと言つたつて、つまりモデル賃が安くて、畫になる面白さうな女が見つかつた譯ですがね。」

「僕も人物をやつて見ようかな？」と朝生は獨り言のやうに言つて、「いや、いや、僕はやつぱり風景にしませう。畫いたら持つて來ますから、折谷さん、見て下さいな。」

「えゝ、見せて貰ひませうとも。」

　と斯ういふ會話があつた後、厨戸は毎土曜と日曜とには必ずスケツチ箱を肩にして郊外に出かけて行つては、日曜の夕方になると、折谷のところに畫いたものを持つて來て見せるのであつた。「どうです、やつぱり厨戸朝生は物にならないかな？」と見せながら彼は癖で、彼自身のことを他人事のやうに斯う言つては、悲しさうな表情をして折谷の顏を見るのである、「こゝの

草のところは一寸うまく畫けてあるつもりなんだがな、どうです？」

「はあ、草はうまいですな、」と折谷はいつもとおんなじ顔をして言ふのである、「だが、一體に何と言つたらいゝかな、つまり印象が薄過ぎるやうな氣がしますな。」

「印象が薄い！」と厨戸は鸚鵡のやうにくり返して「さうだ、印象が薄い、さうだ、さうです、實にうまいことを言ひますね、印象が薄い！」

印象が薄いと批評されて、彼は自分もそれに至極同感しながら、毎日勤め先から歸つて來ると、箱屋の二階の自分の居間の、形ばかりの床の間の前に自分の畫いた畫を立てかけて、五燭の電燈を右手に持つて照らしながら、近づいて見入つたり、遠のいて眺めたりしては、「俺はやつぱり駄目かな？」と思ふのだが、藝術は、藝術は嘗て折谷市郎が喝破したやうに、惡魔かな、まつたく惡魔だな！　厨戸朝生にはその印象の薄い畫をびり〳〵と引き裂いて、繪筆を叩き折つてしまふ思ひ切りは到底つかないのである。

そのうちに二十四番の春が過ぎて、夏の始になつたのであるが、或日突然、日曜でもないのに、折谷市郎が内職の團扇を山のやうに積んだ床の間の前に、何の布切だか眞青な布切を幕のやうに張つて、その前に瘦せこけた、最初にちらと見た者の目にはいつの間に折谷の娘がこんなに大きくなつたのだらうと思はせるやうな、即ち乞食娘のやうな感じのする、年は十七八歳になるかと思はれるモデル女が、洗ひさらした紡績の着物を來て、きちんと坐つて兩手を膝の上に置いてゐる姿を、程よい離れた位置に畫架を据ゑて、一心不亂に畫いてゐるところへ、厨戸朝生が割合に晴れ晴れした顔をして這入つて來た。

「や、ぼ、ぼくも畫きたいな、折谷さん、」と厨戸は中腰になつて、折谷のかきかけの畫をのぞき込みながら言ふには、「愈よ僕は遞信省を止めました、今朝辭表を郵便で出しておきましたよ。今日から僕も畫きますよ、畫きますよ。」

「到頭止しましたね、」と折谷は例に依つて少しも顔の表情を變へないで、動かしてゐる繪筆の運びも止めないで言つた。

「やつぱりうまいな、うまいな、」と厨戸は頻りに首を傾けながら言つた。言ひ忘れたかと思ふ

が、當時厨戸は三十歳で折谷は四十五歳になつてゐた。

三

厨戸朝生は國の家に手紙をやつて、自分も此年になるまで萬難を排して心がけて來た仕事を、今になつて止めてはこれ迄の苦勞を犬死にさしてしまふ譯だから、もう一奮闘、それも長い事とはいはぬ、せめてこの秋まで大いに勉強して、この秋の展覽會には自分の畫がみんなの前に並ぶやうにしたいと思ふから、十月まで澤山とは言はない、月々應分の仕送りを願ひたいと言つてやつた。そしてそれが漸く聞き届けられると毎日のやうに郊外寫生と、折谷の家の訪問とに出かけて行つた。

折谷の家に行くと、たとへ彼が彼女をモデルにして油畫をかいてゐない時でも、つまり彼が内職の團扇畫をかいたり單色の石版畫に彩色を施したりしてゐる傍に、必ずいつかの痩せこけた、いやに頰骨のとがつた、營養不良らしい黄色い顏のモデル女が坐つてゐるのである。今日は彼女がゐないな、と思つて這入つて行くと、案外にも臺所の方で折谷の子供たちと遊び半分

に水仕事をしてゐたり、かと思ふと表の方から子供たちと一緒に歸つて來たり、まるで折谷の家の者になつたやうに、いつ行つても彼女の顏を見ない日はなかつた。

「お金さんはあなたの家にずつと來てるんですか?」と始めの頃厨戸が聞いたことがあつたがすると折谷はいつもの通りの無表情な顏で、

「いゝや、さうでもないんだが、大方夜が明けて、日が暮れる迄來てゐるんですよ、」と言つたが、或時傍に彼女がゐないのを見定めて彼が彼女に就いて説明したところに依ると、彼女には姉と弟とがあつて、姉もやつぱりモデルをしてゐるのださうである。ところが彼女等の父親が詐欺取罪か何かで目下入牢してゐるので、家の財政が一方ならず苦しい上に、彼女等の母親が或時娘をモデルに賴みに來た或美術家と妙な事になつてしまつて以來、それ迄勵んでゐた狀袋はりの内職を止めて始終その男と相引きするために、一層家の中が苦しいのださうである。幸ひ、お金の姉は、妹より顏立などもずつと派手だし、從つてモデルに賴み手も始終ある上に、段々男から金などを取ることを覺えたので、それでやつと一家の生計をつないでゐるのだが、

自然モデル稼業もあまり流行らない上に、外に金を儲ける腕のないお金は、姉と違つて化粧するどころか、三度の食事も碌々當てがはれない程虐待されてゐるといふ事であつた。」だから、あの女は家に歸るのを厭がるんですよ、そして飯を食はしてやると、顏附が變るほど喜ぶんだよ。終には泊めてくれさへするのなら、モデル代も何も入らない、そして女中の用事でも何でもするから、御飯を食べさしてくれて、泊めてほしいなんて言ひ出すんですよ、君、」と折谷はそんな話をする時でもやつぱりおんなじ顏をして言ふのである。

「ぢや、さうしたらいゝぢやないですか、女中の代りまでしてくれると言ふのなら、それ程重寶なことはないぢやありませんか？」と厨戸朝生は稍々好奇心を起したやうな目付で言つた。

「だけど、」と折谷は忙しさうに、丁度煎餅屋の職人が煎餅を燒く時にするやうな、體の上半身を始終搖すりながら、一枚又一枚と、畫筆をなめては畫具をつけ、一筆畫いては筆を筆洗に浸しながら、他所ごとのやうに言ふのである、「僕のとこだつて子供が二人もゐるんでせう、厨戸君はさすがに米の値段を知らないでせう、お金に晝飯を一度食はすのがやつとですよ。とても

女中として置いておく事なんか出來ません。」

「ぢやあ、僕、」と厨戸が膝を乗り出して言ふには、僕この近くに家を借りて、僕もお金ちやんに御飯の支度や掃除なぞを頼まうか知ら？　そしてどうでせう折谷さん、「僕もお金ちやんをモデルにして人物を畫きたいな、」と終の方は獨言のやうに言つた。

すると、折谷が屹度賛成してくれるかと思ひの外、畫をかく手だけは止めないで、「それは面倒ですよ、君、」と彼は言ふのである、「それに、僕の考へではどうもあの娘は家庭がよくないですからな、例へば彼女の話に依ると、毎晩四疊半と三疊の二間しかない狹い家の中で、母親と情夫と、どうかすると姉娘が色男を引張り込む事があるさうですし、それにまだ弟が一人ある、と言ふんでせう、どうせお金だつて碌な事を覺えませんよ。うつかり君、彼女を女中代りに置いたりすると、一生擔ぎ込まなければならないやうな目に會ひますよ。」

厨戸は今日に限つて折谷が何故お金のことを惡く言ふのか、その心持を汲み兼ねたが、それを強ひて反對するのもよくないと考へて、「さうですかな、」とがつかりしたやうに言つた。

「しかし、」と折谷はつゞけて、「モデルに傭つてやることはいゝぢやないですか。そしてたとへ僅でも金をやると、それが彼女にとつて一番功徳になるらしいですよ。寢るところにも困つてゐるのは確らしいが、何よりも餓ゑてゐるらしいのですよ。此頃は何でも僕のとこで晝飯を一度食ふきりで、家に歸つても朝も夕方も碌に食はして貰へないらしいんです、」と相變らず畫筆をつゞけながら、顏の表情を少しも變へないでつゞけたが、やがて又何と思つたか「然し、厨戸君、僕は君がやつぱりもう少し風景をやる方がいゝと思ふがな、殊に展覽會にはその方がパスする可能力がありますよ。僕は君の風景に面白いとこがあると思ふがな、それに一枚一枚とよくなつて行くやうぢやありませんか、これから展覽會までみつちりと風景の力に力を入れたらどうです？」と言つた。

そこで厨戸は少しばかり嬉しくなつて「さうですかね、少しでもよくなつて來ましたかね？嬉しいな、」と言つた。そしてやつぱり人物なぞは思ひ止まつて、この老友の忠告に從つて風景に力を込めようと思つたのである。ところが、その日から一週間程後のことだつたが、彼が夕

方、その大きな體の左の肩に輕々とスケッチ箱の革紐を引つ掛けて、右手にかきかけのカンヷスを下げながら、ぺつちやんこになつた下駄を引きずつて、電車にも乘らずに郊外の方から歸つて來る道で、丁度折谷の家と彼の止宿してゐる箱屋の家との中間の邊で、ふとモデル娘のお金に出遭つたのである。

「やあ、今歸るの？」と彼は黑い顏の人によくある、笑ふ拍子に綺麗な眞白な齒を見せながら聲を掛けた。

「えゝ、」とお金は言つたが、その聲の調子が如何にも親しい人にのやうだつたのが、善良な大男の畫家を喜ばした。

「ご、ご、ご馳走してやらうか、」とそこで厨戸は厭味のない調子で言ふと、

「えゝ、」とお金は早速答へて、「あなたの家はこの近く？」と言ふのである。

そして無論二人は直樣同じ方角に並んで歩き出した。骨のやうに痩せてゐて頰骨が出てゐて、一寸見たところでは年取つてゐるのかそれとも若いのか、分らないやうな感じのする顏の娘だ

が、爭はれぬものだ、鬼だつて蛇だつて魅力を添へるといはれてゐる年頃の、まして人間の十八歳の女のお金は、女に馴れない厨戸朝生にとつて、これ迄折谷の家で十度以上會つたことはあるが、斯う二人だけになつて見ると、何とも言へぬ魅力を感じるのである、「何を、お金ちやん、食べよう、天丼？　親子？」と彼がその大きな體を曲めて、道を歩き歩き、彼女の顔をのぞき込むやうにして聞くと、

「私、何でもいゝわ、」としかし彼女は一向恥かしげもなくはつきりした言葉で答へたものだ。

で、少しばかり廻り道して、天丼を三つ注文して、厨戸はお金を連れて箱屋の二階に歸つて行つた。やがて注文したものが來ると、彼か驚いたことには、大食で而もがつ〳〵と早く食ふといふので評判の彼と、同じ早さでお金が一つの丼を空けたことである。そして殘つた一つの丼の蓋を取つて、「これ、半分わけにしようか？」と聞くと、「えゝ、」と一寸ほゝ笑んだが、彼女がはつきり答へたのに更に驚かされた。流石の、無神經らしく見えるこの大男の畫家にも、少しづつお金のする事が感じが惡くなつて來た。だが、それでもまだ排斥の氣分を感じる程で

はなかつた。のみならず、食べるものだけ食べてしまふと、それから取止めのない談話なぞを交して見ると、何と言つても十八歳といふ年だけの可愛らしい所も、しほらしい所も見えて來て、厨戸は再び愉快な氣になつた。恐らく年の若い娘と一つの部屋で唯二人きりで話したことなどは、彼の三十年のこれ迄の生涯での始めての出來事に違ひなかつた。

「さう〳〵、お金ちやん」と、彼は言つた、「今日こゝへ來たこと、折谷さんには内所にしといてね。」

「えゝ、」と彼女は無論そのつもりでゐると言つたやうに答へた。

それからぼつり〳〵と二人の間に折谷に就いて話が出た。彼女の言葉に依ると、折谷は彼女が厨戸と接近することを喜ばないとのことである。と聞いて、厨戸はいつか折谷が彼にお金を女中に置くことを反對したのみか、モデルに傭つて畫くことさへ、始めは一寸賛成しておきながら、直に後から反對したことを思ひ出して、一寸厭な氣がした。けれども、斯うして當のお金から折谷に裏切つて、自分に親しんで來てゐる現在に思ひ及ぼすと、彼は忽ち折谷に對する

不快はけろりと忘れてしまつて、やつぱり愉快になつたのである。

だが、そのうちに困つて來たのは、始めの間はなるべく退屈させないやうに、ゆつくり腰を落着けて行くやうにと思つて、吃音ではあるが、それをなるべく吃らないやうに話する注意から、いつとなく極めて低い調子で物を言ふ癖がついてゐたが、さういふ調子で、小唄でもうたふやうに一種の味を持つた話し振りで、彼はお金を引止めようと努めたものだが、氣が附くと、相手は彼の話の最中からこくり〳〵と居眠りをし出しながらも、しかし仲々歸りさうにならないことであつた。

「明日も亦歸りに寄らない？」折谷さんに內所でね、」とか、「大分遲くなつたな、家へ歸つて叱られやしない？」とか、それから又「ぢやあね、少しお金を上げるから、家へ歸つて夜分のモデルに賴まれたからと言ふといゝね、」とか、つまりもう歸つてくれといふ事の別の言ひ方を色々とした後、厨戶が大きな欠伸が出たのを機會に「あゝ、眠くなつた！」と言ふと、その時始めてお金は立上つて、「ぢやあ、私、歸るわ、」と言つて、「私、寢床を敷いて上げるわ。」

そして厨戶が止めるのにも拘らず、お金は寢床を敷いて、無理に、厨戶に寢間着を着更へさせてから、又一時間ばかりゐたのである。もうその時は彼の方でもどうせ十時を過ぎたからには階下の箱屋の家族は皆眠つてしまつたらう。そしたら自分も彼女を送つて玄關まで行つたついでに、表の電信棒のところで小便をしてやらう、と度胸を定めたものである。けれども、それが過ちの元になつた、と言ふのは、その晩、お金は今も言つた通り遲く家に歸つて行つたことは行つたが……。無論、厨戶朝生だつて大砲のやうに木石ではなかつたのである。

四

その翌日から、夕方になると、お金は必ず折谷の家から歸りに厨戶のとこへ廻つて來るのである。すると、どうしても夕飯を食べさせない譯には行かないのである。が、さう毎日のことに天丼を御馳走する譯には行かないし、それに厨戶自身が朝晩近所の飯屋に食事をしに行く境遇であるのだから、お茶漬を振舞ふといふ譯にも行かないのだ。ところが、いつからともなくお金は彼に自炊を勸めて、毎日夕方にやつて來てはその翌日にかけて、一日分の飯を炊いて行

つてくれるやうになつた。一寸便利な事のやうではあるが、厨戸にはそれ等の事が何から何まで次第に感じが惡くなつて來たものである。だが、お金は一向そんな事に氣が附かぬ樣子で、どうかすると、今日はどうしたのか折谷さんが機嫌がよくて、モデル代を少し澤山くれたから、」などと言つては、貧乏人の子は貧乏人の子だ― 鹽鮭の切身などを提げやつて來るのである。すると又、厨戸は厨戸並に「お金ちやん、き、き、君は折谷君とも怪しいんぢやないか？」などと燒餅を燒いて言ふのである。

「まさか、」とお金は笑ふと一寸可愛らしく見える顏をして言ふのである、「晝日中、それに子供が二人もゐるぢやないの？」

と、そんな話も出るのだが、次第に、どうしても厨戸にはお金が毎晩やつて來ることに堪へられなくなつて來た。或時、珍しく下の箱屋の亭主と朝顏を合はした時、亭主に「厨戸さん、近頃は奧さんがお出來になつて、結構ですな、」と言はれてからは、それが一層堪らなくなつて、それに彼女が來始めてから、とんと氣に入つた畫もかけない。ぐづ〳〵してゐるうちに展覽會

に出品する期日も近づいて來る、と思ふと、體こそ人の倍も大きいが、度胸は人の半分程にも小さい厨戸は氣がもめて堪らなくなつて來た。そこで思ひ切つて、房州の方へ旅に出たものである。

そして展覽會の締切期日の五日程前に、彼は持つて行つたカンヷスを悉くよこして、その中から一枚と、餘程前にかいたのを一枚と都合二枚の畫を出品しておいて、當分折谷にも歸京して來たことを知らさないで、箱屋の二階にくすぶつてゐた。けれども、或朝、展覽會の入選畫の題名と作者の姓名とが新聞に報告されたのを見ると、十人か十五人に一人位の割合でしか通過しない競爭に、首尾よく彼が當選するなどといふことは夢より外にはあり得ないことなのだ。さう思ひながらも、今年はひよつとすると？……さうでないと忽ち國からの仕送りが絶えて、又以前のやうに通信事務員か何かの境遇に落ちなければならない。どうか一枚だけでも通つてくれゝばと願つた甲斐もなく、幾ら新聞の隅から隅を見ても彼の名を見出すことが出來なかつた。ところがその代りに、折谷市郎作『或る少女の像』といふのが確に入選の中に報告せられ

であるのである。折谷は十何年ぶりかで、去年と今年とつゞけて二度入選した譯である。或る少女の像といふのは多分お金をモデルにしたものに違ひない。去年の今頃は厨戸はまだ折谷の顔を知らなかつたけれども、彼の入選を自分のそれのやうに喜ばしく思つたことだつたが、今年は、それも考へて見ると、彼等の間にお金といふ娘が現れて以來妙に折谷に對して好感が抱けなくなつて、從つて或る少女の像の入選が厨戸には何と氣に入らないのである。それにはもつとも去年とは違つて、彼等が友達になつてしまつたといふ事情から、嫉妬心も混り出したには違ひないのである。だから去年は自分の畫が入選しなかつた代りに、折谷の畫が入選したので償ふことが出來たのに、今年は自分の畫が落選して、彼のも落選すれば腹がおさまる譯なのに、彼のが入選したので、厨戸は二倍に叩きのめされたやうな氣がしたものである。

がつかりして、ごろりと仰向けに寢そべつて、腕枕をして天井を眺めてゐると、元より善良な男のことであるから、始めのうちは、或る少女の像、入選、落選、お金、お金と折谷、などと取止めもなくくしや／＼と考へたものだが、やがて、やつぱり俺の畫はまづいんだらうな、

俺と折谷と比べたら比較にならないからな、俺はどうしても駄目かな？　それにしても俺が折谷を惡く思ふ譯はちつともない、いや、俺の方に多少譯があつても、折谷から見れば、そんな譯はない筈だ。だから彼は俺のことを變に思つてるだらう、明日あたり久し振りで訪問しよう、などゝ思つてゐるうちにいつかうと／＼と眠つてしまつた。そして、何時間ほど經つたのか、「厨戸さん、電報ですよ、厨戸さん、」といふ箱屋の小僧の聲を耳の傍で聞いて、彼は目を醒ました。何も體に掛けないで寢てゐたので、目を醒ました時、氣が付くとぞく／＼寒かつた。で大きなくしやみを一つして、電報を手にした瞬間、おや、俺の畫が入選して、その通知が來たのかな？　とふと虫のいゝ事を考へたが、見ると、それは國の家からで、「チチビヨキスグカヘレ」といふのであつた。

それで、厨戸朝生は何年ぶりかで、故里の山梨縣下に歸り榮えのしない歸省をした譯であつた。彼が歸つた時、彼の年取つた父はその臨終の床で呼吸だけはしてゐたが、枕元にゐた兄嫁が、「お父さん、お分りになりますか、朝生さんが歸つて來られましたよ、」と言つたが、父はど

んよりした目を彼の方に見張つたゞけで、それから二時間程すると息の根が止まつてしまつた。するると彼は不斷の會話の時のぼそ〱言ふ吃音者らしい聲とは別人のやうな、朗らかな、少し馬鹿氣て見える程の大きな聲を立てゝ泣いたものである。考へて見ると、父の死がその主なるものに違ひなからうが、自分の才能のこと、折谷のこと、お金のこと、落選のこと、これから先、父に死なれた後の自分の身の振り方のこと、秋風の吹く東京と違つて、座敷の軒から望まれる國境の、もうその頂には眞白に雪の積もつた高山から冬のやうな風の吹いて來る故里の家のこと、本當に冬になつた時の寒さのこと、さういふことを一度に思ひ浮べて、一口に言ふと、束にして泣いたやうな譯に違ひなかつた。

死者の四十九日の忌日が過ぎる時分には、愈よ毎日冷い風が吹いて來て、厨戸朝生の心を更でも悲しくするのである。野に出て百姓の仕事を手傳ふ譯にも行かず、無論呑氣に繪を書くことなどは到底出來ない周圍の感じなのである。掃除の手傳をしたり、手紙の代筆をしたりしても、そんな事には一時間以上の時間を潰す譯にも行かないのである、兄嫁の待遇なども決して

よくはないのである。すると、或時兄が彼に「お前もさうしていつ迄も遊んでゐても仕樣があるまい、どうだ、役場か、それとも學校にでも勤めたら？」と言ふのである。「はあー」と答へておいたが、いつ迄も答だけでは濟まされなくなつて來た。或時東京の折谷から葉書が來て、「そちらはもう隨分寒いでせう、僕なぞ子供の頃の記憶を浮べるだけでも、山梨縣の寒さは身に泌みてしまつたと見えて、風を引きさうです、早く歸て來ては如何？」と書いたその餘白に假名ばかりの拙い字で「早くかへつていらつしやい、金」と書いてある。モデルのお金のたよりなのである。それを見ると、早速にも飛んで行きたい氣が躍るのである、こんな田舍で、子供のうちからの馴染の者ばかりの中で、到頭畫かきになれなかつたのかと思ばれて、役場の書記か小學校の教員になつて恥を曝すよりは、東京で通信事務員をしてゐる方がどんなに樂しいか知れない、と思ふと、折谷市郎のことが去年までのやうに、中學時代に始めて彼の名を繪葉書で知つた時のやうに、懷しく考へられて來るのであつた。

到頭、彼は半分逃げ出すやうにして、再び東京に出て來た。十一月の末のことであつたが、

まだ彼の父が世にゐた間は、叱られながらも上京する時は何許かの金を貰つて出たものだが、
　さういふ譯で、彼は上京すると早々生活の方法を講じなければならなかつた。早速折谷を尋ねて行くと彼は三ケ月前とも半年前とも少しも變らない恰好、で何でもその時は大小無數の羽子板を床の間に積んで、それに燒畫で模樣を書く仕事をしてゐた。厨戸が例に依つて、何か彼にも出來るやうな仕事がないか、と賴むと、「だん〳〵世間の景氣が惡くなつて來てね、」と彼はやつぱり少しも動じない顏附で言ふのである、「全然商賣を止める譯ではないんでせうが、何處からも此前のやうにたとへ厭な仕事でも賴みに來ることは殆どなくなつて、此方から賴みに行つても此頃は少し手控えしてゐますので」とか、「ずつと商賣が暇なもんだから、新しいものを造へないで前のものを捌くやうにしてゐる位で……とか言ふ始末ですよ。もつとも今はこの羽子板が丁度時節だから相當に忙しいんだが、ばかに安くてね。しかし何ならこの僕の燒畫した畫に簡單に着色する仕事なら少しは分けて上げてもいゝがね、」と言つた。
「さうさう、忘れてゐましたが」と厨戸は言つた、「今年も亦展覽會に通りましたね、お目出たう。あのお金ちやんをかいた畫でせう？」と言ふ時、思ひ出してお金がゐないので、「お金ちやんは近頃は？」と少し顏を赤くして聞くと、
「相變らず始終來てゐますよ。だけど此頃は油繪どころぢやないから、何だか子供とばかり遊んでゐます。その代り女中の仕事をしてくれるので助かりますがね、」と折谷は言つた。
「で、あの展覽會の繪は賣れましたか？」と厨戸が聞くと、
「何が賣れるものですか、今頃は京都で曝し物になつてゐるでせうよ、」と折谷は言つた、「僕はつく〴〵考へたんですが、もう來年からは展覽會なんて出すのを止さうかと思つてゐますよ。もつとも、そんな事を言つてゝも、例の藝術といふ惡魔に取憑かれてゐる我々の事だから、又來年のその時分になるとふら〳〵と妙な氣になつて、高い繪具を使つて書いて出すんでせうがね。僕は君も知つての通り、去年十何年ぶりかで入選したんですが、そして今年もどういふ廻り合せかやつぱり入選しましたが、あの可否の發表のされる朝、つまり新聞に入選者の名前の載つて出る朝ですな、僕はあの朝を十何遍經驗した譯ですよ。ぐちや〳〵と何百人かの名前が

小さな活字でごみのやうに並んで載つてゐますね、あれを手に取る時は、この年になつてやつぱり手が震へますよ。芝居でやると手が震へて字が讀めないといふ場ですね。ところが違ひますよ。名前なんて何といふ變挺なものでせう、すつかり自分の通りですな、折谷市郎といふこの變なたつた四字の、人が見たら百遍見ても忘れてしまふやうなこの名前が、自分のとなると、あの朝の新聞のごみ見たいに人間の名前の並んでゐる中に、一秒間以內にちらりと見付けますからな、さうすると動悸がしますよ。それも、もつとも一昨年までの十何年間は、さういふ經驗も知らずに、自分の名の載つてないのを、三遍も五遍も、あきらめては見直し見直したものです。ところが、まあそんな火を呑むやうな思をして、自分の畫が通つた迄はよいが、その結果がです、その結果がです。……無論その一日二日の間は外の事が手に附かない程そわ〳〵と嬉しくて堪りません。厨戸君、僕は本當のことを、實際正直なことを言つてるんですよ。すると君も知つてるでせう、僕に始終、夏は團扇の畫、冬はビラ畫など賴みに來る內藤といふ石版屋があるでせう、あそこから鯛を一疋お祝だと言つて持つて來てくれましたよ。今年もやつぱ

り又鯛を持つて來てくれましたよ、鯛は目出鯛といふ魚ですからな。ところで、もう一つ恥を話さなければ分らないが、僕は去年も今年も展覽會が始まると、毎日は行けませんけれど、二日か三日おきに此近所の一番澤山新聞を取つて居るミルク・ホールへ牛乳一杯飲みに出かけて行くんです。君も知つてるでせうが、ミルク・ホールぢや前の日の新聞をさう取つて置きませんよ、まして一日飛んで前の新聞なんて反古にして使つてしまふでせうからね。それを泣くやうに賴んで、何しろ牛乳一杯の客なんですからね、泣くやうに賴んで取つておいて貰ふんです。どうです、そして毎日の、殆ど十種位の新聞の展覽會の畫の批評といふ批評を片つ端から讀むのです。だが、去年もさうでした、今年もさうでしたが、折谷市郎といふ名前は蟲眼鏡で探しても、どの新聞の誰の批評にも出て來ないんですよ。去年の畫はまだ風景でしたから、安い値段で無理に賣りましたが、今年の畫なんて、唯の貧乏娘の而も別嬪でもない娘を畫いたものでせう、あんなものやらうと言つたつて、何處の家だつて掛けておく譯にはいかないでせうから、貰ひ手だつてありませんよ。どうです、すると、僕の畫が、苦しい中から工面して、カン